

伊場遺跡発掘調査報告書第5冊

伊場遺跡遺物編3

(本文編)

1982

浜松市教育委員会

伊場遺跡発掘調査報告書 第5冊

伊場遺跡遺物編 3

(本文編)

凡　　例

1. 本書は、伊塙遺跡の正式な調査報告書第5回として刊行するものであり、第7次調査までに出土した弥生土器に関する報告書である。
2. 本書は、本文編・写真図版編（土器観察表）・別冊図版の3冊で一体をなす。
3. 写真図版には、493個体の写真が掲載されており、約3分の1に統一されている。別冊図版には、953個体の実測図と234点の破片拓影図が載せられており、縮尺3分の1に統一されている。
4. 本文編は、浜松市博物館長向坂鋼二と同学芸員辰巳 均が分担し、それぞれ文責は各章の末尾に記した。写真図版編の土器観察表は、辰巳 均がまとめた。
5. 土器の整理・復元作業は、辰巳 均が、当館学芸員小木 吾の協力を得て行った。
6. 写真図版の土器写真は、辰巳 均が撮影し、別冊図版の土器の実測は、当館学芸員辰巳 均、佐野一夫、佐藤由紀男、鈴木敏則、太田好治、宮下知良が分担し、浜松市遺跡調査会の浦山明子さん、明治大学学生近江かおるさん、福田美子さんの協力を得た。また、版下の作成は辰巳 均が担当した。

目 次

本 文 編

◎ 序 章	1
第1節 遺跡の概要	1
第2節 報告書刊行事業	4
第1章 弥生時代遺構と遺物出土状態	5
第1節 環濠と遺物出土状態	5
第2節 環濠以外の遺構と遺物出土状態	7
第2章 弥生土器の概述	8
第1節 記載方針について	8
第2節 出出土器の観察（観察表の作成）	8
第3節 土器の形態分類	9
1. 壺	9
2. 壺	20
3. 高 坯	21
4. 鉢	23
5. 片 口	24
第4節 技法・手法について	24
1. 素 地	24
2. 成 形 法	25
3. 調 整	25
4. 色調・焼成・黒底について	28
第5節 文 様	28
1. 壺（鉢）	29
2. 高 坯	39
第6節 丹彩・絵画・穿孔土器について	40
1. 丹 彩 土 器	40
2. 絵画の描かれた土器	42
3. 穿 孔 土 器	43
第3章 地点別出土土器の分析	43
第1節 山土器の分析結果について	43
1. 器 種 構 成	43
2. 器 種 組 成	45

第2節 地点別出土土器の分析	48
1. A群 (A10区YT1)	48
2. B群 (B10区YT1)	51
3. C群 (A10区YT2東縁)	54
4. D群 (A10区YT9西縁)	56
5. A10区・B10区YT2	58
6. B12区・B13区YT7—下層	59
7. B12区・B13区YT7—中・上層	61
8. B12区・B13区YT6—下層	62
9. B12区・B13区YT6—中・上層	63
10. B13区・A13区環濠外下層	64
11. B13区・A13区環濠外中・上層	65
 第4章 総 括	67
第1節 土 器 の 編 年	67
1. 出 土 状 態	67
2. 層 位 関 係	67
3. 地 点 別 特 徴	67
4. 型 式 組 列	68
5. 文 様	71
第2節 出土土器の対比	72
1. 伊 場 式 土 器	72
2. 寄 道 式 土 器	74
3. 山 中 式 土 器	75
4. 二之宮 式 土 器	76
第3節 西遠地区の後期弥生文化	76
1. 土器論のまとめ	76
2. 伊場遺跡の消長	77

挿 図 目 次

第1図	伊場遺跡周辺の遺跡とその消長および海面変動推定曲線	2
第2図	伊場・城山・国鉄工場内遺跡位置図	3
第3図	伊場遺跡東部地区グリッド表	6
第4図	弥生土器形態分類図(1)	11
第5図	弥生土器形態分類図(2)	12
第6図	弥生土器形態分類図(3)	13
第7図	弥生土器形態分類図(4)	14
第8図	弥生土器形態分類図(5)	15
第9図	弥生土器形態分類図(6)	16
第10図	弥生土器形態分類図(7)	17

表 目 次

第1表	壺(主要形態)における文様部位と底部形態	29
第2表	壺胴部文様集成表1	33
第3表	壺胴部文様集成表2	34
第4表	壺胴部文様集成表3	36
第5表	丹彩上器一覧表	41
第6表	穿孔土器一覧表	42
第7表	地区別の器種比率	44
第8表	伊場遺跡周辺の主な弥生遺跡における器種比率表	45
第9表	壺(各形態別)の地点別累計表	49
第10表	甕(各形態別)の地点別累計表	51
第11表	高坏(各形態別)の地点別累計表	52
第12表	鉢(各形態別)の地点別累計表	53
第13表	片口(各形態別)の地点別累計表	54
第14表	壺胴部文様の地点別頻度表	55
第15表	伊場遺跡出土土器の型式組列表	69
第16表	東海地方西部後期前半弥生土器の比較	73

* 写 真 図 版 編 士 器 觀 察 表 79頁

写 真 図 版 80頁

* 別 冊 図 版 63葉

序 章

第1節 遺跡の概要

伊場遺跡については、これまで、次節に述べるように、いくつかの概報と4冊の正報告書を刊行してきたし、この他にも伊場遺跡に言及した論著が多い。したがって、伊場遺跡についての概要は、学界にも広く渗透したものと思われる。ここでは、周辺の遺跡を中心に、いまいちど遺跡の概略について述べ、伊場遺跡について理解を深めていただこうと思う。

伊場遺跡は、三方原台地南端の海食崖から500mほど南にある。また三方原台地の東縁に沿って流下する馬込川からは、もっとも近い地点で1.5kmを測る。今では工場や鉄道、あるいは人家のために埋め立てが進んで、かつての景観をうかがうことはできないが、遺跡の周辺は、一帯の水田地帯であって、ほんの一部が畑であった。この畑の部分は砂地で畑と畑を結ぶと、東西方向に並び、北の海食崖と平行する。これは、かつて沿岸砂州だったものが、高さを減じ、それでもやや小高い部分が、畑地として残ったものである。伊場遺跡は、その砂州を基盤として成立した遺跡であった。

同様な立地を示す遺跡は、東500m付近で発見された森田町の「南消防署遺跡」(弥生時代)と、西300m付近の「城山遺跡」(古墳時代~室町時代、浜松市博編1981)であり、さらにその西、伊場遺跡から約1kmの浜名郡可美村長島でも、畑の表面に細かい土器や陶器の破片(時代不明)が散っていた。

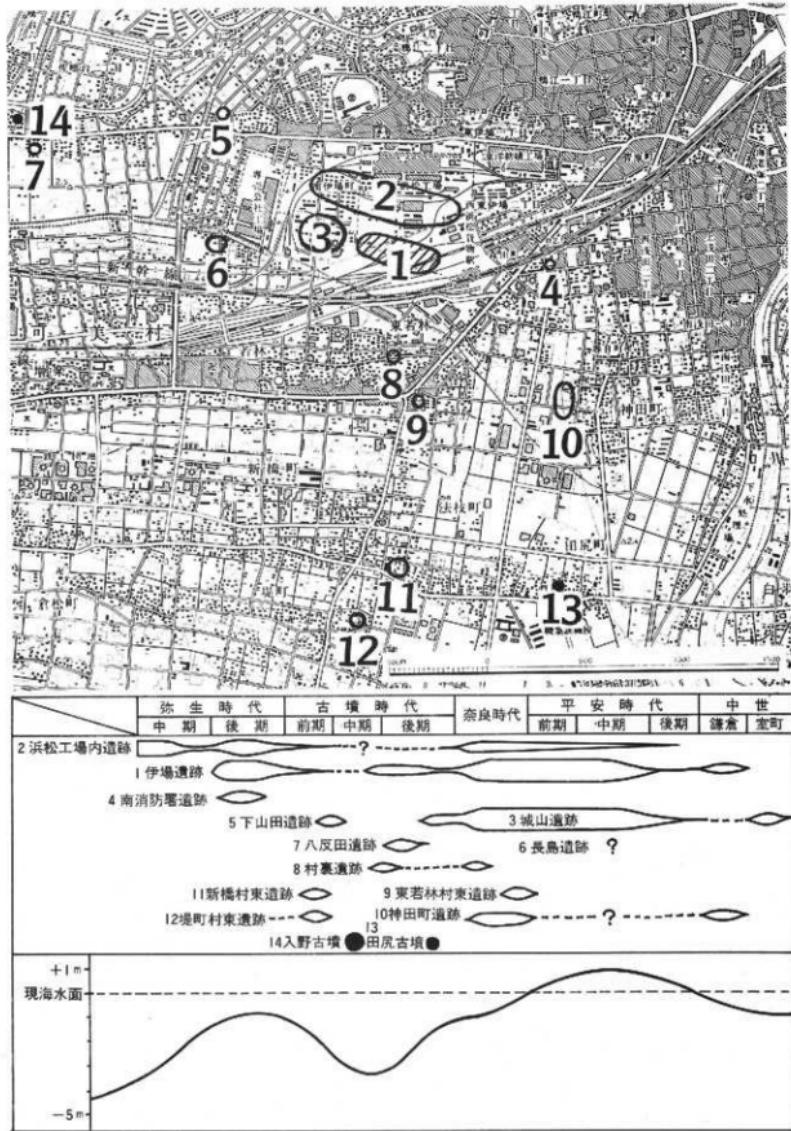
海食崖の直下には、岸堆の他に砂地が帶状に堆積しており、これが三方原台地に入り込んだ谷地形の部分では、谷口をふさぐ砂州になっている。こうした砂地にも遺跡が立地している。伊場遺跡から北西1.2kmには下山田遺跡(古墳時代前期)が、西北西2kmには入野町五反田遺跡(古墳時代後期)がある。この遺跡の北側台地上には、基底径41mの円墳大野古墳が立地する。

海食崖直下の砂州と伊場遺跡などがのる砂州の間は、湿地帯かと思っていた所、ここにも弥生時代以来の遺跡のあることがわかった。地盤も砂地であるが、この砂は海底から運ばれたものではなく、古い馬込川(古天竜川か)に由来する川砂であることから、砂州と砂州の間が、川砂で埋積され、ここに遺跡が営まれたものであった(浜松市博編1979)。この遺跡は、国鉄浜松工場の下にすっぽりおさまってねむっている。1978年から工場内の建替えや新築工事が行なわれるたびに、事前調査を実施してきたが、その結果南北は100mほど、東西は約800mに及ぶ大遺跡であることがわかつてき。これを国鉄浜松工場内遺跡と呼ぶ。この遺跡は、その西端部に弥生時代中期(須賀式期)の包含層があり、これを出発点として同後期に東へ範囲を拡大したものらしい。しかし古墳時代に入ると遺跡規模は急に小さくなりつつも断続的に平安時代に及んでいる。

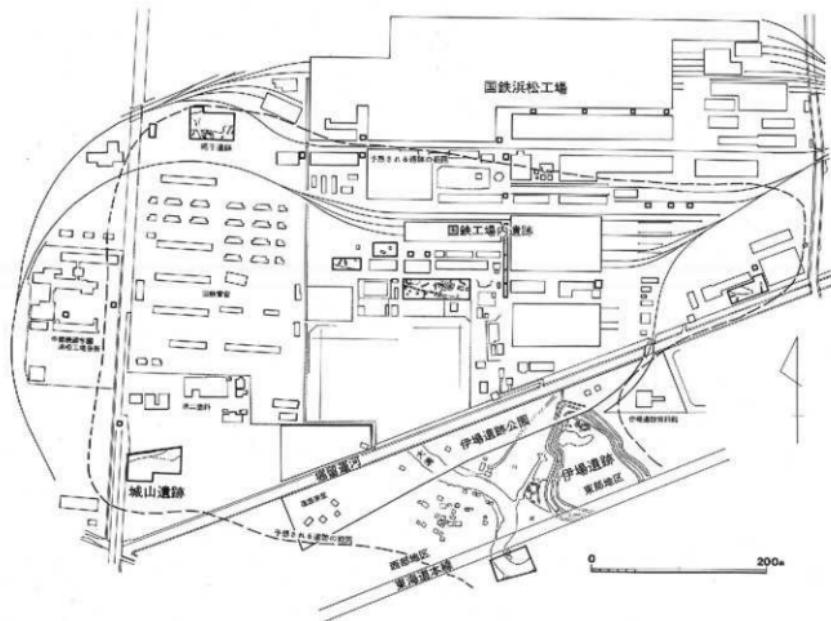
伊場遺跡の南500mと700mには、浜名郡可美村東若林中村遺跡(古墳時代中期)と村東遺跡(奈良時代後期)がある。この2遺跡は、海食崖直下から算えて第3列目の砂州の東端部に立地するのである。村東遺跡のさらに東、伊場遺跡からは東南約1kmの地点に、神田町遺跡(奈良~鎌倉時代)がある。しかし、この遺跡は馬込川(古天竜川か)の自然堤防上に位置している。

さらにその南の砂州上にも遺跡が知られている。伊場遺跡から南1.6kmに新橋村東遺跡(古墳時代)、2kmに堤町村東遺跡(古墳時代前期、向坂1959)があり、南南東1.8kmには、田尻古墳(古墳時代後期、伊藤1942)があった。今の所、これより南には遺跡が確認されていない。

以上13遺跡を、ひとまず伊場遺跡を中心とする遺跡群と把えることができる。これを年代の順序に整理してみると、第1回のようになる。この順によって工場内遺跡→伊場遺跡・南消防署遺跡→堤町村東遺跡・新橋村東遺跡→下山田遺跡→?・人野古墳→伊場遺跡・五反田遺跡→出尻古墳・伊場遺跡・城山遺跡→工場内遺跡・伊場遺跡・城山遺跡・神田町遺跡といった順序をたどることができる。ただし、だからといって、この順序に人が移動したと考えるのは危険である。



第1図 伊場遺跡周辺の遺跡とその消長および海面変動推定曲線



第2図 伊場・城山・国鉄工場内遺跡位置図

この図でもわかる通り、伊場遺跡は、古墳時代を挟んで弥生時代と律令期とに、大きく盛期を分けている。これを遺構の状況についてみると、弥生時代には三重の環濠で囲まれた東部地区を中心栄えたが、古墳時代には東部地区と西部地区にかけて集落が営まれ、律令期には主として西部地区一帯に官衙の性格の建物群が林立していた。この時期には、城山遺跡も、場合によっては工場内遺跡も、ひとつづきの遺跡であった可能性が大である。

この付近の縄文時代後期以来の相対的海面変動の推移は、第1図の下段に示した通りと推定される。弥生時代以前の資料として、伊場遺跡から晩期縄文土器（浜松市博編1975）と石器（浜松市教委編1971）が出土しており、国鉄浜松工場内（梶子）遺跡からも、後期縄文土器（浜松市博編1983）が1片検出されている。かなり古くから、この砂州は陸化していたようである。そして伊場遺跡の弥生時代遺跡が栄えていたころは、周囲に湿地帯が拡がり、水稻耕作にとって良い条件が整っていたと考えることができる。

伊場遺跡の弥生時代遺構は、三重の環濠に囲まれている。詳細は「伊場遺跡遺構編」（浜松市博編1977）を参考にされたいが、住居跡として確認されたものはない。わずかに壘穴住居跡らしい掘り込みがひとつと、掘立柱の倉庫跡らしいものひとつが検出されただけである。細長い土壙風の掘り込みがいくつか知られており、周辺に墓域があつたらしい。他の小穴群の多くは、失なわれた住居跡の柱穴ではなかろうか。環濠内北別区と、環濠外西別区からそれぞれ方形埴溝墓群がみつかっている。今回報告する弥生土器は、主として環濠内にまとめて捨てた状況で検出されたものである。

* この海面変動曲線は、向坂・嶋1976に載せた図の再現であるが、これは加藤1977によって追認された形になっている。

なお、古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺構については、浜松市博編1977などの文献を参照していただきたい。

第2節 報告書刊行事業

伊場遺跡の発掘調査については、これまで次のような報告や論著がある。ここでは、調査の学術報告に関するもの及び、調査関係者が、発掘結果について言及した文献に限ることとした。

第1次調査（1949・1950年）

国学院大学伊場遺跡調査隊編『伊場遺跡』（1949年8月15日）

国学院大学伊場遺跡調査隊編『伊場遺跡』浜松市役所（1953年9月1日）

樋口清之「静岡県浜松市伊場遺跡」『日本考古学年報』2（1954年4月23日）

第2次調査（1968年）

浜松市教育委員会・遠江考古学研究会『伊場遺跡予備調査の概要』（1968年）

第3次調査（1969～1970年）

浜松市教育委員会編『伊場遺跡第3次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会（1971年2月10日）

向坂綱二「静岡県伊場遺跡出土の奈良時代遺物」『考古学雑誌』56-3（1971年3月1日）

第4次調査（1971～1972年）

伊場遺跡調査団編『伊場』・第4次調査月報1－浜松市遺跡調査会（1971年8月10日）

伊場遺跡調査団編『伊場』・第4次調査月報2－浜松市遺跡調査会（1971年9月15日）

伊場遺跡調査団編『伊場』・第4次調査月報3－浜松市遺跡調査会（1971年10月15日）

伊場遺跡調査団編『伊場』・第4次調査月報4－浜松市遺跡調査会（1971年11月5日）

伊場遺跡調査団編『伊場』・第4次調査月報5－浜松市遺跡調査会（1971年12月5日）

伊場遺跡調査団編『伊場』・第4次調査月報6－浜松市遺跡調査会（1972年1月5日）

伊場遺跡調査団編『伊場遺跡出土文字集成（概報）』浜松市遺跡調査会（1971年12月25日）

川江秀考「伊場遺跡（静岡）」『月刊考古学ジャーナル』No.64特集本簡（1972年1月30日）

伊場遺跡発掘調査団編『伊場遺跡第4次発掘調査の成果（要旨）』浜松市遺跡調査会（1972年2月29日）

浜松市遺跡調査会『伊場』第4次調査月報合本（1972年3月31日）

森藤忠・山村宏・向坂綱二「伊場遺跡第4次発掘調査の成果」「日本考古学協会第38回総会研究発表要旨」（1972年5月）

向坂綱二「静岡県伊場遺跡 その第4次調査」『日本考古学年報』24（1973年3月31日）

第5次調査（1972年）

浜松市教育委員会編『伊場遺跡第5次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会（1973年2月10日）

第6・7次調査（1972～1974年）

向坂綱二「伊場木簡にみる地名について」「会員だより」2文化財調査会（1973年2月10日）

八木勝行「平安時代の軒」「民具マンスリー」6-1（1973年4月10日）

八木勝行「7世紀後半の釜」「民具マンスリー」6-5・6（1973年9月10日）

浜松市教育委員会編『伊場遺跡出土文字集成（概報）』浜松市遺跡調査会（1973年11月30日）

伊場遺跡調査団編『伊場遺跡現地説明資料』浜松市遺跡調査会（1973年12月1日）

向坂綱二「遺跡案内 伊場遺跡」「日本考古学の視点」下（1974年11月10日）

浜松市教育委員会編『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会（1975年3月25日）

浜松市教育委員会『伊場遺跡出土品の解説目録』（1975年7月11日）

向坂綱二「静岡県伊場遺跡」『日本考古学年報』26（1975年6月）

- 向坂鋼二「伊場遺跡①～⑨」『中部日本新聞』夕刊連載（1975年8月～10月）
- 向坂鋼二「伊場木簡にみる人名について」「はぎ原」7文化財調査会（1975年9月）
- 向坂鋼二「伊場木簡にみる駅制関係史料について」「はぎ原」8文化財調査会（1976年2月）
- 漆畠 敏「伊場遺跡出土の小絵馬について」「はぎ原」9文化財調査会（1976年9月）
- 第8～13次調査（1974～1978・1980～1981）
- 向坂鋼二「伊場遺跡第9次発掘調査の概要」「静岡県考古学会通報誌』16（1976年6月18日）
- 向坂鋼二「伊場遺跡における律合制時代遺構の性格をめぐって」「遠江」創刊号 浜松史跡調査懇親会（1976年12月20日）
- 向坂鋼二「伊場遺跡」「佛教芸術」124特集地方官衙の遺跡（1979年5月25日）
- 向坂鋼二「伊場遺跡発見干支絵木簡」「地誌と歴史」22（1979年10月22日）
- 川江秀孝「1978年出土の木簡- 静岡・伊場遺跡-」「木簡研究」創刊号（1979年11月25日）
- 浜松市立郷土博物館編『国鉄東海道線線路内埋蔵文化財発掘調査報告書』-伊場遺跡第12次の1期調査概報-浜松市教育委員会（1979年3月）
- 向坂鋼二「伊場遺跡出土の絵馬と馬形」「神奈川県博物館協会会報』43（1980年2月1日）
- 向坂鋼二「免掘調査略報 13番岡県(伊場遺跡)」「日本考古学年報』31（1980年4月）
- 浜松市博物館編『伊場遺跡第8～13次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会（1981年3月31日）
- 川江秀孝「伊場遺跡の民具」「中部地方の民具」明玄書房（1982年7月20日）
- 伊場遺跡発掘調査報告書
- 第1回 浜松市立郷土博物館編『伊場木簡』浜松市教育委員会（1976年3月25日）
- 第2回 浜松市立郷土博物館編『伊場遺跡遺構編』浜松市教育委員会（1977年2月28日）
- 第3回 浜松市立郷土博物館編『伊場遺跡遺物編1』浜松市教育委員会（1978年3月31日）
- 第4回 浜松市博物館編『伊場遺跡遺物編2』浜松市教育委員会（1980年3月31日）
- かくして本書の刊行となったものであるが、伊場遺跡の出土品の量は膨大であり、とても短期間では記録化し切れない。それに第8次調査後の遺構についても詳細は未報告である。今後の計画としては、2～3年間を整理執筆期間とし、向後10年位を目途に、報告書を完結させたい。（向坂鋼二）

第1章 弥生時代遺構と遺物出土状態

第1節 環濠と遺物出土状態

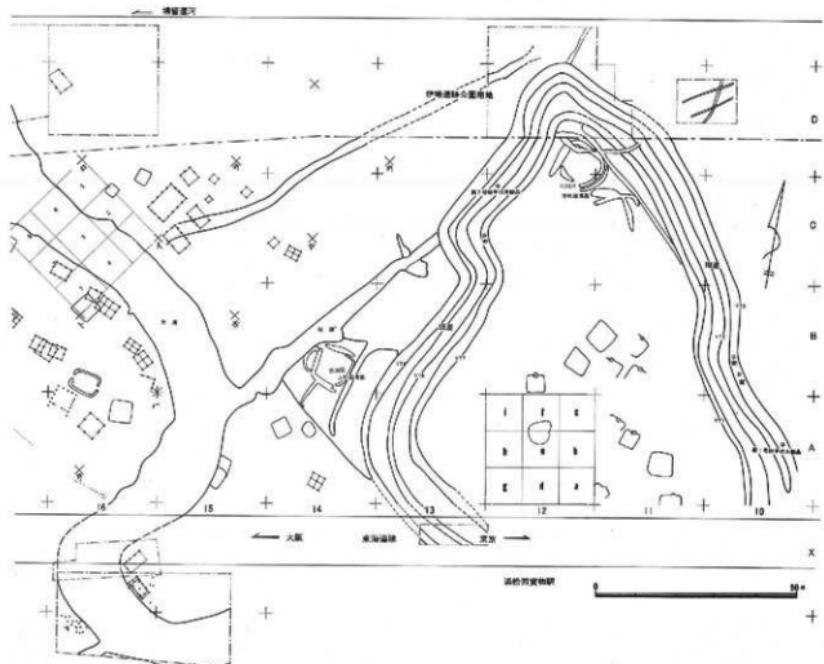
伊場遺跡の環濠は、『伊場遺跡遺構編』（浜松市博編1977年）刊行時には、北端と南端が未調査であった。その後1978年に第12次調査を実施したことによって、北端では東西の濠がそれぞれ連続してひとつになること、南端は東海道線の南側になお続いていることが明らかになった（浜松市博編1979、1981）。環濠の規模は、外溝で測って東西118.5m、南北は180m位と推定される。北西から東南の方向に細長い形をしていたらしい。

環濠の幅員は、内溝が1.8～2.4m、中溝が2.4～3.5m、外溝が2.5～3.3mで、内溝だけが特に狭いようである。しかし、A10区からB11区にかけては、後世の削平があったものとみられるので、もとは2m以上あったと思われる。環濠の底面は、かならずしも平坦ではない。おおむね東側が高く西側が低いが、A13・14区では全域でもっと高い。ここでは外溝が標高40cm、中溝が20cmである。逆に内溝は、全体として西側で標高-20～-40cmであるのに対して、東側では20～30cmである。中溝は、A13区を除くと東側で0～-20cm、西側で-20～-40cm、外溝は東側で-20～-40cm、西側ではA14区を除き-20～-50cmとなっている。内と中、中と外の溝で狭まれた部分は、おおむね標高60～70cmであるから、溝底との比高差は、特別深い部分を除き1m位はある。幅2～3mの溝が3条めぐり、高さ1mの土堤が2本めぐる勘定であるから外敵からの防禦機能は充分あった。

各溝の構築順序は、中溝が最初に掘られ、後外溝が掘られて土が内側へ盛られたと推定される（浜松市博編1977）。しかし内溝と中溝の関係は微妙であって前後がつけかねる。ほとんど同時の構築ではあるまい。そうした点を検討すべき環濠の層位関係は、浜松市博編1977の別冊図版第37に示してある。東側の環濠は内側からYT1, YT2, YT9、西側は、内側からYT7, YT6, YT8と記録されているが、YT2とYT9, YT6とYT8に介在する土堤の盛土断面は、いずれもYT2とT6の土が外側へ盛られた後、YT9とYT8の上が内側へ盛りつけられたことを示している。また、YT1, YT2, YT6, YT7の各溝底よりやや上に薄くC層（青灰色有機質粘土層）が堆積しているが、YT9とYT8にはこれを欠く。このC層堆積後に外溝が掘削されたと考えざるを得ない。

環濠内の堆積状況は、下層にD層と呼ぶ黒色有機質粘土層があり、これをC層と呼ぶ青色粘土層が覆っている。さらにこの上にB層と呼ぶ青色粘土層が堆積しているが、この層は、外溝から外側に向っては広汎に分布するもののYT1には見られず、YT2, YT7, YT6にも、溝の中央部に断面レンズ状にみられるだけである。D層は、先述した部分（D3層とする）とC層以上に大別される。C層より上のD層も、土色や混入物の違いから上下に分けられD1・D2層とする。C層も、YT1やYT2では、ひとつにみえたが、YT9, YT7, YT6, YT8では上下に区別できたので、C1・C2層とした。

A10区のYT1では、D3層から一群の弥生土器が出土した。いずれも溝底に密着していた。しかし同じ内溝のB13区付近のYT7では、C層より上のD1～D2層から、大量の弥生土器群が出土した。同一溝中のことで



第3図 伊場遺跡東部地区グリッド表

あるから、両群が東西にかなり離れているとはいえる。まず年代差を考慮すべきであろう。YT9のA10区部分では、D層(D1)から大量の土器群が出土したが、溝底にはほとんど土器はなかった。かわりに短柱状木製品(胸当)が出土して、みんなをびっくりさせた。同一個体とみられる背当もB10区でのYT6溝底から出土した。一般に溝底からは遺物の出土が少ないので、木製品や木片の多くは溝底から検出されている。C層(特にC1層)からはほとんど出土例はなかったが、B11区のYT2では数個体まとめて弥生土器が出土した。D層出土のものより当然新しい土器群といえよう。さらにB層となると出土量はいよいよ少なく、年代的に新しいものが主体を占める。これについては、本書は扱わない。

最後に土器の出土状態を平面的にみると、いくつかの地点において、一度に廃棄したようなまとまりがみられる。まずA10区のYT1(本書でA群としたもの、以下同じ)とB11区のYT1(B群)、つぎにA10区のYT2とYT9の間の土堤上(C群)とYT9(D群)が顕著である。特にD群としたものの量が多い。これらは溝中というよりも、溝が若干埋積した後土堤の外側斜面にずっと廃棄された状態と思われた。C群もおそらく同時に廃棄されたものと思われるが、これらはあたかも積み上げたものが転倒したかのような出土状態を示していたので、小さながら別群としたものである。

土器のまとまりは、つぎにC11c区付近のYT2にみられ、それでもっとも大規模なものは、A13区からB13区、さらにB12区に及ぶYT7にみられた。後者の場合には、A13区とB13区に大別されそうにも思えるが、若干希薄になるだけで、ほとんど連続している。しかもA13区とB12区では、YT7の東側にも一面に土器の集積が認められた。もうひとつこの集積は、B14区の西別区西端部にみられた。しかしこの集積は、枝溝により切られたためか、奈良時代遺物と混在した二次堆積として検出され、完形品もほとんど認められなかった。

本書では、こうした土器集積やまとまり具合を日安として分類作業を行なった。しかしA13区からB13区にかけて出土した大量の土器については、充分な分類と観察を行なうことができなかつた。ここでもまた、課題を将来に残すことになった。

第2節 環濠以外の遺構と遺物出土状態

環濠の他に溝状遺構、小穴群、方形周溝墓、井戸状遺構、杭列(水田跡?)等の遺構が知られているが(浜松市博編1977)、いずれも出土遺物に乏しく、特に土器の分析に役立つほどの資料はない。

伊場遺跡の東部地区は、A11・12区とB11・12区にほぼおさまるほどの略方形の小高い部分Aと、A14区からB14区にかかるやや小高い部分B、それにAにつづきながら、C12区からC11区へ入り込む窪地で分けられるD12区付近のやや小高い一角Cの3部分から成っている。いうまでもなく推定居住区がAに西別区がBに、北別区がCに占地している。微地形に注目すると、この内AとBの間が異常に低くなっている。特にA13f区からB13d区にかけては、基盤の砂地が周囲より20cm以上低い。

こうした微地形をうまく取り込んで、三重の環濠をめぐらしたものと思われる。しかし3条に挟まれた中間の土堤の高さは、おおむね同水準に仕上げる必要があろうから、A13b～c区、B12h～i区、C12区南半部といった部分のYT7より内側に、湿地部分というか滞水しやすい部分、つまり居住にむかない部分ができることがある。そこで、推定居住区から離れているC12区を除き、こうした低地部も、土器の廃棄場所となつた。それでもB12h～i区では、YT7の溝中に廃棄された土器と区別が可能であったが、A13区では、両者の区別がつかないほど、両者の土器群は重なり合っていた。こうした点に注目すると、A13b～c区の土器群は、YT7の溝中に廃棄されたものより若干後れるといえるかも知れない。

なお、1949年遺跡発見当時の調査報告書(岡大綱1953)によると、例の有名な「ひれ付土器」(本書別図版53)は、試掘の際に出土したものといわれ、その位置は西別区の境となるYT5の北端に近い部分に該当する。YT5から出土したものと推定される。そして当時の発掘区は、大部分B13区南半に集中しており、当時の出土品はYT6～8から出土したものと考えられる。しかし、われわれの発掘所見では、当時のトレンチの底は、溝

のD層まではほとんど及んでいないので、C2層もしくはD1層あたりから検出されたものと思われる。本書には当時の出土品の一部を実測し直して再録した。(向坂鋼二)

第2章 弥生土器の概述

第1節 記載方針について

すでに第1章でも述べたように、伊場遺跡の弥生時代遺構は、遺跡東半部の砂丘の高まりを取り囲むように認められた東西118.5m、南北180m(外溝)のおむすび型をした3条の環濠と、その内側で認められる小穴・土壤・小溝・周溝墓等の遺構からなる。一連の伊場遺跡の調査では、この環濠に開まれた集落跡をほぼ全掘し、莫大な量(43cm×33cmのポリ袋にして4,085袋)の弥生土器を得ている。これら4,000袋余の弥生土器は、大半が環濠内からの出土で、その他遺構(小穴・土壤・周溝墓等)に伴って出土したものはほとんどない。しかも、これら環濠以外の遺構から出土する土器は、土器編年を考察するうえで有効といえる一括資料もほとんどなく、また時間的先後関係を知るうえで有効な手掛りをあたえてくれる遺構間の切り合い関係を示して出土する土器もあまりない。

とはいって、これら弥生土器は、同一集団の何世代かにわたる生活の軌跡(宮み)の場としての集落跡をほぼ全掘して得た資料であり、しかもそれらはいくつかの小文化間に分かれるものの、大きくは弥生時代後期という一時期に限定される資料という特徴をもっている。

したがって、これら出土土器の仔細な分析(土器組成・文様構成・容量・製作技法等)は、そこにあらわれる時代性・時間的なつながりを知るうえで重要なばかりでなく、その背後にある人間集団の生産・消費・精神生活の一端を明らかにするうえでも重要なといわなければならない。

さて、こうした特徴と制約をもつ弥生土器を今回、「伊場遺跡遺物編3」弥生土器として報告するのであるが、本論に移るまえに、一言おわりとともにことわりしておく。

それは、発掘された莫大な出土遺物に対して、充分な整理期間と人員がとれず、分析箇所を限定して報告しなければならなかつたという点である。今回の報告に際し、整理・分析した資料は全体の3/5にあたる2,500袋、分析箇所は全面積の1/2の面積である。

次に本書において掲載した土器の、抽出方法や分析地点について述べておく。

まず、分析地点は、北を向いておむすび型をした環濠のうち、土器が多量で、層序関係が比較的明瞭かな、環濠東側→A10区・B10区と環濠西側→B13区においていた。この両地点出土の土器については、復元しうる土器は極力復元して、実測図や写真で表現し、残る土器片等についても、拓本、統計、分析等を通して、極力多くの事柄をデータ等として示すように努めた。また、こうした作業とは別に、器種構成のうえで、一応の典型例と特異な例を示す目的で、充掘時(遺物取上げ時)の井記等を参考に、形になるものや図化できるものを残余の中から取り出し、極力多くを図として載せるように努めた。

こうして本書には、土器実測図52葉953点、拓影図7葉234点を掲載した。また、写真図版編には実測図に示した個々の土器のうち、写真としてたえられる493点をあげておいた。さらに報告書に掲載(実測図・拓影図)したすべての土器について、土器観察表を示した。この観察表の記載方法については第2節において詳述する。

なお、本書別冊図版編の判組方針は、遺構内一括資料や切り合い関係にある遺構内出土土器が極めて少ないとから環濠内出土土器を中心取り上げ、溝内出土土器という制約はあるものの、地点別、層序別といった型式論に連なる要素を重視し、地区別、遺構別、層序別の順に掲載編集した。

第2節 出土土器の観察(観察表の作成)

別冊図版には実測図953点、拓影図234点を掲載した。これら土器については、個々に器種、形態、出土層位、

法量、技法・調整等の特徴、焼成・胎土・色調等の特徴を観察表として載せた。ここでは観察表の作成についての規準・要項を述べる。

記載方法について 伊場遺跡グリッド表（挿図第3図参照）にもとづき、おにぎり型をした環濠の東南隅（A10区）より、逆時計回りに30m区画（グリッドの1単位）ごとに分けて、遺構別、層序別に版組した。なお、A10区～B10区の一部については、環濠内の土器出土状態が一括性をもち、良好な土器集積がみられるなど、地点別分析が可能・有効と思われたので、遺構別・地点別にA群～D群までに分けて取り上げ、分析した。

＜番号・器種・形態＞ 番号は実測図番号であって、別冊図版・写真図版・本文編とも統一している。器種・形態は挿図第4図～10図において示す形態分類表による。

＜登録番号・出土位置＞ 登録番号とは発掘時の取り上げ番号をいい、例えば6-1670とは第6次調査の1670番を示し、A10h-YT1-DとはA10hが地名、YT1が遺構名、Dが出土層位名を表す。

＜法量＞ 口縁部径・器高・胴部最大径・底部径についてcmで表す。

＜技法・調整等の特徴＞ 壺・甌は口縁部と胴部・底部（脚台部）、高坏は坏部と脚部に分けて表記する。土器細部の名称および実測図の表現については『六条山遺跡』（久野・寺沢1980）、技法・調整等の用語については『紫雲出』（小林・佐原1964）報告の用語法に據ったが、一部変更したところもある。調整法はカタカナ、成形法・施文法は原則として漢字を用いた。

＜焼成・胎土・色調＞ 焼成については良好→やや軟質→軟質の3段階で表現した。伊場遺跡の土器は低湿地の遺跡であるため、保存状態が良いものが多く、比較的、当時の焼成具合を的確に知ることができた。焼きとしては良好なものが大半を占める。

胎土：胎土には石英・長石・角閃石・雲母・赤色酸化土粒等の鉱物が含まれていた。これら、土器組成鉱物の仔細な観察は、現状では在来品、搬入品を検討するうえ最も有効な方法と思える。しかしながら本報告では土器実測に手一杯の状態であって、有効とはいそまで観察する時間の余裕がなかった。そこで砂粒の多寡に注目して、砂粒をほとんど含まず精製されたものを“精良”，胎土中に小石が見られるものを“砂粒多含”，砂粒がかなり目立つものを“砂粒多含”とできるだけ簡単に表現するようにした。一般的にみて在地産の壺、高坏には精製された胎土のものが多く、搬入品、とりわけ東（中遠地域）からのものには砂粒を含むもの多かった。また、甌については大半が補強材（混和材）としての砂粒を含んでいた。

色調：色調は莫大な量を長期間にわたって実測しつつ観察するため、もっとも主観的になりやすい。そこでより客觀化するために色度表（日本色彩株式会社編『実用 today's COLOR／300J』）を使用し表現した。

第3節 土器の形態分類

伊場遺跡の弥生土器には、壺・甌・高坏の基本3器種に、鉢・片口を加えた5器種がある。このうち壺は、外形上の違いによって、受口壺・広口壺等の名称で呼ぶ。また、壺を含めた各器種は、形態（フォーム）の違いによって壺A・甌B等と呼び分けて扱う。こうして細別した各器種を、壺・鉢では胴部形態、甌・高坏等では形態および手法の違いにもとづいてA1・A2・A3と区別する。したがってここでいうA1、A2というのは必ずしもタイプの違いを意味しない。以下、壺・甌・高坏・鉢・片口の順に述べる。

1. 壺

外形上の違いにより、受口壺・広口壺・小型広口壺・小型壺・壺・長頸壺・脚付長頸壺・ひさご壺・短頸壺・無頸壺の10種類に分類する。

受口壺 口縁部の中位で屈曲・直立して、受口状の口縁部を作る壺である。胴部の形状には無花果形、長円形、球形があり、器高16cm～22cmの中・大型品が多い。口縁部の形態変化により、次の3形式に大別される。

〔A〕 頸部が細く、口縁部中位で直立気味に立ち上がる受口部をもち、肩下部に最大径がきて明瞭な棱がつく

無花果形をした壺である。口縁部の形態変化によって2種に細分される。

A1 頸部が著しく細く、口頸部中位でやや内彎気味に大きく立ち上がり、しっかりと受口部を作るもの。器高18cm程の中型品が多い。

A2 受口壺A1と比べ、受口部が短かく、立ち上がりも弱いものの。やはり器高16cm程の中型品が多い。

(B) 幅広い頸部から口縁部にむかって大きく外反し、口縁部上部で直立気味に立ち上がり、しっかりと受口部を作る壺である。胴部球形を呈する大型品が多い。

(C) 細い頸部から口縁部へはやや内彎気味に外反して、ゆるやかな受口部を作る壺である。(2)の1点だけである。胴部長円形を呈し、器高22cmの中型品である。

広口壺 伊場造跡においては最も一般的な形態の壺である。口頸部は幅広く、口縁部の形態には単純口縁と折り返し口縁があり、胴部形態には、無花果形・長円形・球形を呈するものがある。口縁部の形態変化によって6形式に大別される。

(A) 口唇下端を下方に引き延ばすようにして幅広い口唇部を作ることを特徴とする。幅広い頸部から口縁部にむかっては単純に大きく外反する。尾張・三河地方の弥生時代後期の壺形土器によくみられる形態的特徴である。口縁部の形態変化によって2種に細分される。

A1 口縁部は大きく外反し、口唇部下端を下方に強く引き延ばして、幅広い口唇部を作る。胴部は球形(下ぶくれ形)を呈し、大型品が多い。

A2 広口壺A1と比べ、口縁部の外反の度合は弱く、口唇下端の下方への引き延ばしもさほど顯著でない。胴部は最大径が胴下部にきて稜がつく無花果形をしたもの。

(B) 広口壺の中でも最も一般的な形態の壺である。幅広い頸部から口縁部にむかっては単純に大きく外反し、口唇部は広口壺Aとは異なり、器盤幅で面を作る。口頸部および胴部の形態差により4種に細分される。

B1 頸部は4種類の中では最も幅広く、口頸部とも一定の広さをもつ。胴部は最大径が胴下部にきて、明瞭な稜がつく。器高の割に胴径が大きく、その比率は1:1程度である。

B2 口径、並びに胴径が広口壺B1ほど幅広くないもの。下胴部に稜がつくものの、明瞭ではない。胴部は広口壺B1と比べ長胴化(無花果形)の傾向を示す。

B3 細い頸部から口縁部にかけては大きく外反し、胴部は無花果形の長胴形をした壺である。胴部最大径は下腹部で、明瞭な稜がつく。

B4 口縁部は、比較的幅広い頸部から、外側にむけて単純に大きく外反する。胴部は球形を呈する。

(C) 比較的幅広い頸部から、口縁部にむかって大きく外反し、口縁部付近で直線的に延びる形態の壺である。広口壺Bとの差は、口縁部が単純に外反するのではなく、口縁部の中位から先が口唇にむけて直線的に延びることである。胴部形態の違いにより2種に細分される。

C1 口縁部は大きく外反した後、中位より先を直線的に作っている。胴部は胴下部に最大径がくる無花果形をした大型のもので、稜はさほど目立たない。

C2 口縁部はやや内彎気味に作るが、口縁中位より先はやはり直線的に作っている。広口壺C1と比べ長胴で、稜はさほど顯著ではない。

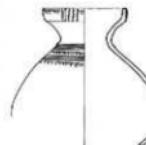
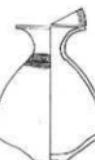
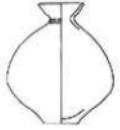
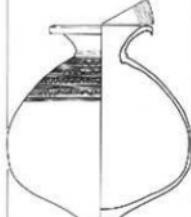
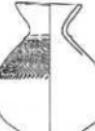
(D) 直線的に外傾する口縁部をもち、頸部と肩部の境には明瞭なくびれがつく壺である。胴部形態の違いにより、3種に細分される。

D1 器高に比べ、口頸部、胴部とも幅広い器形の広口壺B1と同形をした壺である。胴部最大径が下胴部にきて、明瞭な稜がつく。

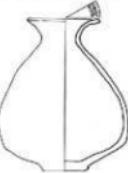
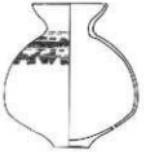
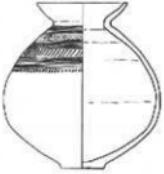
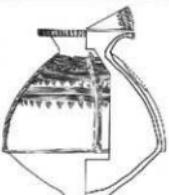
D2 断面長円形をした長胴形の壺である。胴部最大径は中位にくる。

D3 胴部最大径が中位にくる球形の壺である。

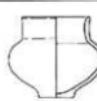
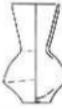
(E) 内彎する口縁部をもつ壺である。比較的細い頸部から大きく外反し、中位から先を内彎させたもの。受

器種	形態	図	代表例				
受口壺	A ₁		I 659 731	B ₁		9 84 85 87 88 485 486 487 488	10 13 87 330 464 553 628
	A ₂		627 732	B ₂		29 453 489 577	330 464 553 628
受口壺	B		570	B ₃		91 738 916	579 876 942
	C		2	B ₄		92 128 130 332	127 129 331 549
広口壺	A ₁		886 940	C ₁		115 138 662	116 584
	A ₂		706	C ₂		139 341 585 587	340 541 586 707
広口壺	D					20 630	629 900

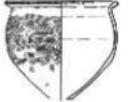
第4図 弥生土器形態分類図（1）

広 口	D ₂		347 524 838 879	F ₂		492 559
壺 D	D ₃		144 465 525 631 704 705 839			554 588 589 708 741 742 743
広	E ₁		149 943	F ₃		
	E ₂		491 556 663			151 152 153 634 945 946
口 壺	E ₃		468 526 725 840	A ₁		96 97 161 379 746
	F ₁		93 360 905 914 915			163 562
E	A ₂			A ₃		162 920
	E ₄					380 638 675
広 口 壺	F ₂			B ₂		600 601 603
	F ₃					563 602 639

第5図 弥生土器形態分類図（2）

小型広口壺	C ₁		745	ひさこ壺 A		544
C ₂			505 545	A		611 647
				短頸壺 A		
C ₃	C ₃		477 552 821			
小型壺A	A		528 676	短頸壺 B		514 682 892
小型壺B	B		677 726 799	短頸壺 C		515 759
小型壺C	C		476 718 824 846 847 848	短頸壺 D		389 454 533 947
壺A	A		165 166 167 168 385 506 605 641 713	短頸壺 E		648
長頸壺A	A		508 509 531 607 608 740 827	短頸壺 F		910
長頸壺B	B		510 511 512 513 532 757 859	無頸壺 A		828 883 893
長頸壺C	C		178	蓋A		875
脚台付長頸壺A	A		546	蓋B		829
				蓋C		684
				蓋D		683

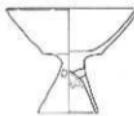
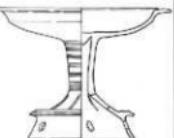
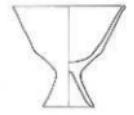
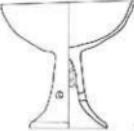
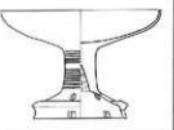
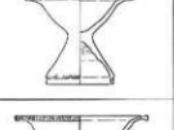
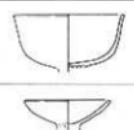
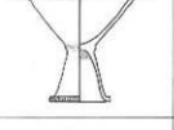
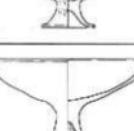
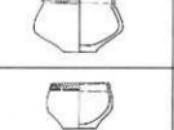
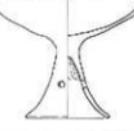
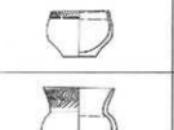
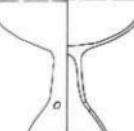
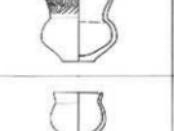
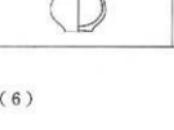
第6図 弥生土器形態分類図（3）

	A ₁		34 35 36 101 186 760 761		B ₁		205 862
A	A ₂		46 47 685	B ₂		762	
	A ₃		187	C ₁		206 207 929	
	B ₁		188 189 190 191 197 686 687	C ₂		227	
B	B ₂		48	C ₃		229	
	B ₃		200	C ₄		909	
	B ₄		50	D ₁		400 784 863	
				D ₂		231	

第7図 弥生土器形態分類図(4)

甕	E ₁		232		272 519 724 785 932	
	E ₂		612			
甌	F		688		273 691 768	
	G		413			
甌	H		107		274 275	
	A		613			
高 坏	B ₁		264 414		912	
	B ₂		266 415 416 650 689 767			
高 坏	C ₁				769	
	C ₂					
					276	
					57	
					651 730	
					417	

第8図 弥生土器形態分類図（5）

高 坏	C ₁		770 805 885	高 坏	G ₁		286 288
	C ₂		806		G ₂		287
高 坏	D ₁		120 277 418 419 692	G	G ₃		807 833
	D ₂		615 864		H ₁		617
高 坏	D ₃		279	H	H ₂		693
	E		616		A ₁		77 78 112 520 652
高 坏	F ₁		280 281 282	鉢	A ₂		547
	F ₂		284 285		B ₁		121 316 318 431 432 433 434 455 535 540
				鉢	B ₂		113 620 696

第9図 弥生土器形態分類図(6)

鉢 B	B ₃		482	台付鉢 B	B		716
鉢	C ₁		122 319 320 321 322	台付鉢 C	C		896
	C ₂		437 654 655 764 884		D		522
	C ₃		324	片 口	A ₁		447
鉢 D	D		80 81 536 622 623 802		A ₂		263 626 703
鉢 E	E ₁		537 765 902 908		A ₃		262 868
	E ₂		481 804 873	片 口	B ₁		448 702 831
	E ₃		837 874		B ₂		913
鉢 F	F		836	台付片 口	A		766
鉢 G	G		483				
台付鉢 A	A ₁		325 326 624 656 657 699 786				
	A ₂		443 658 700				
	A ₃		897				

第10図 弥生土器形態分類図（7）

口壺と良く似るが、受口壺が直立気味の受口部を作るのに対し、E類は、外反しつつ内擣する口縁部を作る違いがある。これも胴部形態の違いにより3種に細分される。

E1 脇部最大径が下脇部にきて、明瞭な稜がつく、無花果形をしたもの。

E2 脇部最大径が中位にあり、長円形を呈するもの。

E3 脇部最大径が中位にあり、球形を呈するもの。

(F) 口縁部を折り返しによって成形したものをいう。口縁部形態の違いを除けば、形態的には広口壺Bと差はない。これも胴部形態の違いによって4種に細分される。

F1 脇部最大径が下脇部にきて、明瞭な稜がつく無花果形をしたもの。形態分類図にあげた(914)のようなひれ付土器もみられる。

F2 広口壺F1と比べ脇部に丸味をもつ無花果形をした脇部をもつ土壺をいう。脇部最大径は中位よりや天下きて、明瞭ではないが稜がつく。

F3 無花果形をした長脇形の壺。脇部最大径は下腹部でもかなり下位にくる。下脇部と上脇部の境には明瞭な稜がつく。

F4 脇部最大径が中位にくる球形をした壺。

小型広口壺 広口壺のうち、器高10cm~12cmほどの小型のものをいう。いずれも実用品と考えられるものである。器高10cmを下まわり、実用の品とは考え難いミニチュア品(てづくね土器)については、今回は報告せず、将来、土製品の項で報告することにした。小型広口壺も口縁部、脇部の形態によって3形式に大別される。

(A) 広口壺Bを小型化したもの。口縁部に比してやや細い脇部から、口縁部にむかっては単純に大きく外反する。脇部の形態差により3種に細分される。

A1 脇部最大径が脇下部にあって、明瞭な稜がつくもの。器高の割に脇径が大きく、脇張りのする壺である。

A2 広口壺B3の小型化したもの。無花果形をした長脇形の壺で、脇下部には明瞭な稜がつく。

A3 脇部が球形を呈するもの。広口壺B4の小型化したものである。

(B) 直線的に外傾する口縁部をもつ広口壺Dの小型化したもの。これも胴部形態の違いによって、3種に細分される。

B1 器高の割に口径・脇径が大きく、脇部最大径は脇下部にきて明瞭な稜がつく、無花果形をした壺である。

B2 無花果形をした長脇の壺である。脇部最大径は脇下部にきて、明瞭な稜がつく。

B3 広口壺D3の小型化したもの。脇部は球形を呈する。

(C) 広口壺Eの小型化したもの。頭部から口縁部にかけては大きく外反させ、口縁部中位から上を内擣させた壺。胴部形態の違いによって3種に細分される。

C1 器高の割に脇径が大きく、脇部最大径は脇下部にきて、明瞭な稜がつく、無花果形をした壺。

C2 無花果形をした長脇の壺。脇部最大径は脇下部にきて、稜はほとんどつかない。

C3 脇部が球形を呈するもの。

小型壺 小型の壺のうち、上記小型広口壺にあたらないものを総称して小型壺と呼んだ。形態の違いにより、3種に大別される。

(A) 直立気味に立ち上がる短かい口頭部をもち、口頭部と脇部の境界はくびれを欠き、なだらかに移行する。脇部は無花果形をしたやや長脇の壺である。

(B) 直立する短かい口頭部をもち、小型壺Aと異なり、口頭部と脇部の境にはくびれがはっきりとつく。脇部は器高の割に脇径が大きな器形で、最大径は脇下部にきて、明瞭な稜がつく。

(C) やや外開きする直線的な短かい口頭部と、球形を呈する脇部をもつ壺。

壺

(A) 球形の脇部に、逆八の字状に開く口頭部をもつ壺。口径は脇径より大きく、底部は平底を呈する。

長頸壺 算盤玉形または球形の胴部に、直線的に延びる長い口頸部を有する壺をいう。口頸部の形態差により以下の3形式に大別される。

(A) 比較的幅広い頸部から、やや外開きしながら直線的に延びる長い口頸部をもつ壺。口頸部と胴部の境のくびれは明瞭で、胴部形態は算盤玉形を呈する。長頸壺としては最も一般的な形態である。

(B) 細頸長頸壺とも呼ばれるもの。長頸壺Aと比べ幅狭い頸部から、やや外開きしながら直線的に延びる長い口頸部をもつ。肩部との境のくびれは明瞭で、胴部は長頸壺Aと同じく算盤玉を呈する。

(C) やや内傾するU型部を有する。胴部との接合はわずかにくびれる程度でスムーズに移行する。胴部は球形を呈するが、底部形態は欠損するため不明である。三河・尾張地方の欠山式土器によくみられる器形である。

脚付長頸壺

(A) 1点だけある。口頸部および脚台下部が欠損しているため、形態ははっきりわからない。

ひさご壺

(A) 長頸壺のうちやや内輪気味に外傾して延びる細長い口頸部と、球形の胴部をもつ壺をひさご壺とした。

短頸壺 器高に比して口頸部高が小さいもの（原則として1/7以下）を短頸壺とする。U型部の形態によって、以下の6形式に大別される。

(A) 短かな口頸部は、屈曲、直立して受口状の形態を呈する。胴部は最大径が脚下部にきて、そこに明瞭な稜がつく無花果形をした壺である。

(B) 短かい口頸部は折り返しにより、やや外反しながら直立する。胴部は短頸壺Aと同じく最大径が脚下部にきて、明瞭な稜がつく無花果形をしたもの。

(C) U型部は単純に「く」の字状に外反するだけのもの。胴部は球形を呈する。

(D) 直立する口頸部をもつもの。他の短頸壺と比べ、口頸部は比較的長い。胴部は最大径がU位にくる断面横位円形を呈する。

(E) やや内輪気味に、単純に大きく開くだけの口頸部をもつもの。胴部は最大径が中位にきて、下部に弱い稜がつく球形をしたものがくる。

(F) 外側に大きく外反する折り返し口頸部をもつもの。1点あるが胴部欠損のため形態ははっきりわからない。

無頸壺

(A) 頸部をもたない壺で、上端をごくわずかに直立させて、小さな口頸部を作っている。脚下部に最大径がきて、明瞭な稜がつく。

壺蓋 数は多くないが、いろいろな形態のものがある。

(A) 編笠形を呈し、頂部には円形の平坦面をもつもの。

(B) 凸レンズ状をした円板形の蓋で、U型部に2個1組の円孔が1対あく。内外面丹塗。

(C) 円盤状をした粘土板に、円筒状のつまみを付けた蓋で、U型部に2個1組の円孔が1対あく。

(D) 断面逆台形の円板の中央に、円筒状のつまみ部をつくり出したもの。

胴部 口頸部が欠損して、胴部のみ残存する点胴部破片が、どの地区においてもかなりの量認められた。形態分類表には図示しなかったが、これを胴部（中・大型壺）と小型壺胴部に区別けして分類した。

〔胴部〕

I 広口壺B1に代表されるような、器高の割に胴径の大きな形態で、胴部最大径が下脚部にきて、そこに明瞭な稜が付くもの。

II 広口壺B2に代表されるような胴部で、Iと比べ、稜はあまり顕著ではなく、長胴化の傾向を示すもの。

III 広口壺B3に代表されるような無花果形をした長胴形を呈するもの。

IV 広口壺B4に代表されるような、球形を呈するもの。

〔小型点脣部〕

- I 脣部Ⅰの小型化したもの。形態分類図の小型広口壺A1に代表される脣形である。下脣部には明瞭な稜がつく。
- II 脣部Ⅱ・Ⅲの小型化したもの。小型広口壺A2のように長脣形を呈するものである。
- III 脣部Ⅳの小型化したもの。小型広口壺A3のように球形を呈するものである。

2. 脣

壺には脚台部の付くもの（台付壺）と 付かないものがある。これらは口縁部および脣部等の形態により 脚台の付くもので 5 形式、脚台の付かないもので 3 形式の計 8 形式に大別される。

(A) 底部に「ハ」の字形に聞く脚台部がつく壺のうち、口縁部が「く」の字形に外方に大きく聞き 脣部最大径は中位にあり、そこに明瞭な稜がつく 壺の張った壺を A 類とした。口唇部の形態（刻日有無、位置等）により 3 種に細分される。

- A1 口唇部は面取り調整し、その面下端に櫛・篦・棒状器具等により刻日を施したもの。
 - A2 やはり口唇部は面取り調整され、その面上に直交して、櫛・篦・棒状器具で刻日を施したもの。
 - A3 口唇は面取り調整するだけで、刻日を施さないもの。
- (B) 壺 A と同じく、「く」の字形に大きく外傾した口縁部をもち、底部に「ハ」の字をした脚台部をもつ壺のうち、脣部最大径が脚上位にあり、あまり胴張りしないで上部から下部、脚台部にかけてながらに移行する長脣形をした壺を B 類とした。これも口縁部の形態によって 6 種に細分される。

B1 「く」の字形に単純に外反する口縁部をもち、口唇部は面取り調整し、口唇下端に櫛・篦・棒状器具による刻日を施したもの。

- B2 壺 B1 と同形態であるが、刻日が口唇面上に施されているものを B2 とした。
- B3 壺 B1・B2 と同じく、「く」の字形に大きく外傾する口縁部であるが、口縁部は折り返し、あるいは貼り付けなどにより肥厚させ、脣部との境に段が付く壺をいう。この段差は余り整形しないで はみだし痕のように付くため 実測図で示すより目につく。刻日は口唇下端に施している。

B4 折り返しにより肥厚させた「く」の字形に聞く短かい口縁部をもつもの。口唇部は円頭状に作り、櫛状器具等により刻日を施している。

- B5 「く」の字形に単純に外反する口縁部をもち、口唇部は面取り調整するが、刻日は施さないもの。
- B6 形態的には壺 B5 と同形態だが、すべての壺中、唯一、脣部表面調整に施したハケ目を消すように、板状器具（ヘラ）でなで仕上げしている。

(C) 「ハ」の字形をした脚台部をもつ壺のうち、脣部形態が球形（最大径脣中位）を呈するものをいう。口縁部には外傾するものばかりではなく、内彎するものもある。これも口縁部の形態により 4 種に細分される。

C1 「く」の字形に単純に外反する口縁部で、口唇部は面ないし円頭状に作り、その下端に櫛状器具等により刻日を施したもの。

C2 壺 B3 の口縁部と同じく、口縁部は折り返し、貼り付け等により肥厚させ、脣部との境に粘土板のはみ出し痕のような段が付いた壺を C2 とした。刻日は口唇下端に施している。

- C3 「く」の字形に単純に外反する口縁部をもち、口唇部は面取り調整するが、刻日は施さないもの。
- C4 口縁部が「く」の字形に外反しないで、直立気味に内彎するもの。口唇部は内側に向けて面取り調整しており、刻日は施さない。

(D) 「ハ」の字形をした脚台部をもつ壺のうち、脣部形態が長脣形（最大径脣中位）を呈するものを D 類とした。口縁部は、これまでの壺 A～C のように「く」の字形に大きく外反しないで、直立気味にやや外傾する程度となる。また、脚台部も、「ハ」の字形を呈するが、内彎気味の短かい脚台部となる。口唇部の形態によって

2種に細分される。

D1 口唇部は面取り調整をし、口唇下端部に笠・梯状器具により刻日を施したもの。

D2 口唇部は面取り調整するが、刻日は施さないもの。

(E) 脚台部がつく壺のうち、口縁部が「く」の字形に屈曲しないで、直立する形態の壺をE類とした。これも口唇部の形態によって2種に細分される。

E1 口唇部は面取り調整をし、その口唇外側に、笠・梯状器具等により刻日を施したもの。

E2 口唇部は面取り調整するが、刻日は施さないもの。

(F) F類以下H類までの3形式は脚台部の付かない壺である。F類は口径が31.6cmもある大型品で、口縁部は「く」の形に大きく外反させ、端部付近でわずかに内弯させた鉢形をした壺である。口唇部は面取り調整をし、口唇下端には梯状器具により刻日を施している。内外面の調整には細かなハケ状器具を用いている。

(G) 壺Fと同じく鉢形をした壺で、これも口径41.6cmと大型品である。口縁部は口辺をわずかに外反させただけの作りで、口唇部は面取り調整をし、口唇下端には梯状器具により粗い刻日を施している。胴部調整は刷毛状器具ではなく、梯状器具により粗い斜線列を施している。内面ヘラミガキ。東(関東地方)からの搬入品か。

(H) 短瓶壺Cと良く似た形態の壺である。口縁部は「く」の字形に大きく外反させ、口唇部は面取り調整するが、刻日は施さない。肩部は中位に最大径がきて、そこに明瞭な稜がつく。底部は脚台部は付かず、浅いドーナツ底となる。

3. 高 壺

高壺にも壺と同様に、数多くの形態のものがみられた。これを壺部・脚部の形態差により8形式に大別する。

(A) 鉢状の壺部をもつ高壺である。口縁部は直立し、口縁部と壺下部との境には明瞭な稜がつく。脚部は欠損するため形態は明らかでない。

(B) 盆状をした壺部とラッパ状に大きく開く脚部をもつ高壺である。口縁部と壺下部の境には明瞭な稜がつくものが多い。壺部・脚部の形態によって以下の9種に細分される。

B1 浅く大きな壺部と、ラッパ状に大きく開く脚部をもつもの。口縁部は大きく外反し、壺下部との接合部には、口縁部(壺上部)がはみ出したような段がつく。脚部には円孔があき、脚端部を折り返すものが多い。

B2 壺部・脚部とも高壺B1に類似するが、口縁部の外反の度合は弱く、壺下部との境には明瞭な稜がつくだけで、段はつかない。

B3 口径・器高に比して壺部が深いもので、口縁部は直立気味に外反し、壺下部との境には明瞭な稜がつく。脚部はラッパ状に大きく開く。

B4 さほど大きくなれない壺部は、外反度の弱い口唇部でやや内弯する。口縁部と壺下部との境には明瞭な稜がつく。脚部はラッパ状に大きく開く。

B5 口径・器高に比して壺部が深いもの。口縁部はわずかに外反するが、口縁部と壺下部との境の稜はあまりはっきりしない。脚部はラッパ状に大きく開く。

B6 壺部は口縁部が直線的に外側に開く比較的浅いもの。脚部は下半部が大きく外側に内弯しながら開く。

B7 壺部は高壺B2と同形態のやや小型のもの。脚部はラッパ状に大きく開いた形態をとるが、高さは極めて低く、器高に占める割合は $1/2$ 以下となる。

B8 非常に深く大きな壺部を有する高壺で、口縁部は直立気味に大きく立ち上がり、口縁端部でわずかに外反させている。壺下部へは直角に折れ曲がり、明瞭な稜がつく。脚部は欠損するためはっきりしないが、エンタシス風の脚部となる可能性が強い。

B9 壺部は高壺B3と良く似た非常に深い形態をとり、脚部はラッパ状に広がらないで、壺の脚部に良く似た「ハ」の字形に単純に開いた形態のものをいう。

(C) 断面逆台形をした深い坏部と内弯しながら外開きする脚部をもつ高坏である。これも坏部・脚部の形態により4種に細分される。

C1 口縁部は外側にむけて、やや内弯気味に直線的に開き、口縁部と坏下部との境はさほど明瞭でない。脚部は一旦は外反気味に開き、下半部で内弯する形態をとる。

C2 坏部は高坏C1とよく似た形態であるが、C1と比べ口縁部は内弯しないで直線的に外開きし、坏下部との境には明瞭な稜がつく。脚部は内弯しながら外開きするエンタシス風の長い脚となる。

C3 口縁部は直線的に大きく開き、坏下部との境に明瞭な稜がつく。坏下部は脚部から水平に折れ曲がり、坏内部には小さいながらも水平面をつくる。脚部はやや内弯気味に、「ハ」の字形に外開きする長い脚となる。

C4 坏部は高坏C3と比べ 坏下部をやや上向きに作る。脚部は、臺の脚台部と良く似た「ハ」の字形に開いた形態となる。

(D) 半球形状(碗)を呈する坏部をもつ高坏をD類とした。坏部・脚部の形態により3種に細分される。

D1 比較的浅い半球形状(碗)を行する坏部に、ラッパ状に聞く長い脚部がつくもの。

D2 腹の張った半球形をした深い坏部に、やや内弯気味に開いた(「ハ」の字形)比較的長い脚部がつく高坏。坏口縁部はやや内弯する。

D3 形態的には高坏D2と良く似るが、D2の口縁部が内弯しているのに対し、外反しているものをD3とした。脚部は欠損しており不明である。

(E) 高坏D類と良く似るが、腰があり張らないで浅い椀状を呈する坏部に、外方に大きく広がる短い脚部(中実)をもつものである。

(F) 水平に張り出した口縁部をもつ浅い半球形(椀状)の坏に、ラッパ状に大きく聞く脚部がつく高坏をF類とした。脚部の形態によって2種に細分される。

F1 脚部は下部に向って、単純にラッパ状に聞くもの。

F2 脚部は坏部との接合部から一旦は外反気味に開き、下部でさらに内弯しながら大きく聞くもの。

(G) 脚上部が柱状で、脚下部で大きく外側に開き、その途中に膝状突起(凸帯)を付けた、いわゆるパンタロンと呼ばれる脚部をもつ高坏をG類とした。坏部の形態により3種に細分される。

G1 水平に張り出した大きな口縁部をもつ、浅く大きな皿状の坏部の高坏。

G2 高坏Fと同形の坏部をもつもの。

G3 浅く大きな半球形(浅い椀状)を呈する坏部をもつもの。

(H) 坏部は、脚部との接合部から外方にむけて直線的に大きく延び、口縁部で水平に折れ曲がり輪状突起を作り、脚部は、「ハ」の字形をした長い脚を作る高坏をH類とした。東(中遠地域)からの搬入品である。坏部・脚部の形態により2種に細分される。

H1 口縁部は水平に折り曲げただけで、折り返しをしない。また脚部は「く」の字形に折り曲げた形態をとる。

H2 高坏H1とは異なり水平に折り曲げた口縁端部を折り返しているものという。脚部もやはり折り返して作る。

高坏脚部 高坏については、前述したように坏部形態の違いを主に、それに脚部形態の差を加味して形態分類図を作成した。ところが実際に各地点別資料にあたってみると、脚部破片が多く、形態分類表だけでは間に合わないことが知られた。たとえば高坏のB1と同じようにラッパ状に大きく聞く脚は、同じB2・B3にもあり、また別形態の高坏D1・F1にもあるというように、脚部についても脚部だけの分類をする必要性を感じた。そこで形態分類図としては表せなかったが、ここで形態分析に生かせるように簡単に分類しておく。

(A) ラッパ状に大きく聞く脚部である。高坏B・D・Fの脚部にみられる形態である。

A1 高坏の形態分類表には認められなかったが、(422)に示したような脚高20cm程もある長脚のもの。

- A2 最も一般的な単純にラッパ状に開いた脚。
- A3 高环B6・C1・F2のようにラッパ状に開いた脚を、下部で内彎させたもの。
- A4 脚端部を脚A1・A2より大きく外側に折り曲げたもの。
- 〔B〕 壊部と脚部の接合部が幅広く、がっしりしているものをいう。
- B1 (110) のように「ハ」の字形に大きく、単純に開くもの。
- B2 脚下部を脚A3と同じように、内彎して作るもの。
- 〔C〕 「ハ」の字形に開いた、短かい脚部をもつものをいう。
- C1 窒の脚台部のように、「ハ」の字形に直線的に外傾するもの。
- C2 エンタシス風の「ハ」の字形を呈するもの。
- (D) 脚Aの小型化したもの。台付鉢の脚部である可能性が強い。
- (E) 高环Gの脚部をいう。脚下部に筋状突起がつく、いわゆるパンタロン形式と呼ばれる脚である。
- (F) 高环IIの脚部。脚端部を折り曲げ段を付けた、中近地域に盛行する高环の脚部である。

4. 鉢

胴部最大径もしくは口縁部径が器高を上回る形態の土器を鉢とした。形態の違いにより以下の7形式に大別される。

- 〔A〕 受口状の口縁部をもつ鉢である。口縁部・胴部の形態により2種に細分される。
- A1 「S」字状に屈曲した受口状の口縁部をもち、胴部は上半部と下半部の接合部(胴中位)に、明瞭な稜がつくもの。
- A2 内彎気味に傾く受口状をした口縁部に、球形(胴下部にわずかに稜がつく)を呈する胴部がつくもの。
- 〔B〕 胸部から口縁部にかけては「く」の字状に大きく外反し、その接合部(頸部)に明瞭なくびれをもつもののをいう。口縁部・胴部の形態により3種に細分される。
- B1 器高の1/3強を占める大きな口縁部は、「く」の字状に大きく外反し、口縁部と胴部の境には明瞭なくびれがつく。胴部は最大径が中位にきて、明瞭な稜がつく。
- B2 口縁部はさほど大きくなり、「く」の字状に直線的に折れ曲がる。胴部は最大径が中位にきて球形を呈する。
- B3 やはり「く」の字状に直線的に大きく外開きした口縁部に、球形を呈する胴部がつく。
- 〔C〕 L縁部を折り返し又は貼り付けなどにより肥厚させた結果、頸部に低い段を有する鉢をC類とする。胴部はいずれも最大径が中位にくる偏球状を呈するものである。これも口縁部の形態により3種に細分される。
- C1 外反する口縁部をもつもの。
- C2 直立する口縁部をもつもの。
- C3 やや内彎気味に立ち上がる低い口縁部をもつもの。
- (D) 口縁部を外側に向ってわずかにまみ出しただけの短かいL縁部をもつ鉢をD類とした。胴部は最大径が中位にきて、稜がつく偏球状を呈するもの。
- (E) 逆台錐形をした鉢をE類とする。口縁部の形態により3種に細分される。
- E1 口縁部がわずかに外反するもの。
- E2 胸部から口縁部へは直線的に移行するもの。
- E3 口縁部でわずかに内彎するもの。
- (F) 浅い半球形を呈する大きな鉢である。底部は平底となる。
- (G) 角の張った椀形を呈する鉢で、口縁部は直立し、胴部へは「く」の字状に折れ曲がる。底部は平底を呈する。

台付鉢 ワイングラス形、半球形・逆台錐形等をした鉢部に、脚部が付いたものである。脚部にも長脚のものと短脚のものがある。鉢部・脚部の形態により5形式に大別される。

(A) ワイングラス形をした鉢部に、ラッパ状に広がる長い脚部が付いたもの。口縁部の形態により3種に細分される。

A1 口縁部をわずかに外反させたもの。

A2 口縁部を直立、直線的に作るもの。

A3 口縁部を内彎させたもの。

(B) 中央部のややくびれた円柱状(グラス形)をした鉢部に、ラッパ状に広がる長い脚部がつくもの。

(C) 半球形の鉢部に、「ハ」の字形に膨ら張るように、短かい脚部がつくもの。

(D) 口径の大きな逆台錐形をした深い鉢部に、「ハ」の字形に張り出した短かい脚部がつくもの。

5. 片 口

鉢形土器に片口部をとりつけた上器で、胴部形態により2形式に大別される。

(A) 半球形をした鉢に片口部をとり付けたもの。口縁部の形態により3種に細分される。

A1 口縁部が外側にむかって直線的に開くもの。

A2 口縁部が内彎しながら直立気味に立ち上がるもの。

A3 口縁部が内側に向って内彎するもの。

(B) 口縁部と胴部の境に明瞭な稜がつく楕形をした鉢に片口部を取り付けたもの。口縁部の形態により2種に細分される。

B1 口縁部が外反するもの。

B2 口縁部が直立するもの。

台付片口

(A) 口縁部が直立する楕形をした深い片口部に脚部がつくもの。口縁部と胴部の境には明瞭な稜がつく。脚部は欠損するためはっきりしないが、類例からすると「ハ」の字形をした長い脚がつくようである。

第4節 技法・手法について

ここでは弥生土器の製作技法・手法について述べる。弥生土器の製作過程、つまり素地作り→成形→調整→施文→乾燥→焼成といった工程を通して、そこに表われる技法・手法上の特徴や差違が、形態や文様にどのような影響を与えているのか、はたまた、形式差とどのように関連しているのかといった点を中心に見ていく。

1. 素 地

素地となる粘土には、石英、長石、角閃石、萤石、赤色酸化土粒等の鉱物が含まれていた。土器1点1点における組成鉱物の分析が、在地品と搬入品を区別するうえで、有効な分析方法であることはわかっていたが、本報告においては、実測図の作成に手一杯の状態でそこまで手がまわらなかった。そこで簡単にできる砂粒の多寡を観察してみた。その結果、明らかとなったのは、在地産と思われる壺、窓壺の場合、砂粒をほとんど含まない精製された素地(5mm以上の中石はほとんど含まない)を用いるものが大多数を占めるのに対して搬入品の大部分を占める中遠地域の土器と思われるものの場合、胎土にはまず例外なく多量の砂粒(5mm以上)を含むという特徴がみられた。また、在地産の伊勢第Ⅱ期(欠山式)の窓壺の場合、ほとんど砂粒を含まぬ最も精製された緻密な胎土を用いるものが多いという特徴もみられた。ただこの砂粒の多寡だけでは、中遠地域の七器は識別できても、西(尾張・三河)や、北(北道・南信)からの搬入品と思われるものは明らかにできなかった。

鑿は、壺や窓壺等と異なり、いずれも胎土中に多量の小石(1~5mm)を含んでいた。これは鑿のもつ役割、

つまり物を煮炊きするという目的に供するために“胎土中の耐火度を増したり”“粘土の腰を強くしたり”“ひび割れ防止のため”などに混和材として、かなりの量の砂粒を混入させるため（坪井1958）である。

2. 成形法

壺：胴部の成形は、一般的に言われている（小林・佐原1964）ように、粘土帯積み上げ技法によって、底部より上部に向けて順次作られていることが、土器内面に残る粘土紐の痕跡等からわかる。土器実測図には、この粘土紐積み上げ痕の観察できたものについては、破線で示した。この粘土紐の幅は、作る土器の大きさによって異なるが、普通器高20cm程度の壺で、幅3cm程度の粘土紐を用いている。粘土紐は指先あるいは手掌で接着しながら積み上げ、内面も滑らかに仕上げている。このため、粘土紐の積み上げ技法は、完形品の場合がはっきりしないことが多い。復元前の破片等で確認する限りでは、積み上げた粘土紐の上部内側に、次に積み上げる粘土紐の下端を貼り付ける方法で積み上げる例が多いようである。また、粘土紐の積み上げは、小幅の粘土紐をある程度積み上げた後、この場所で一度乾燥させ、再び積み上げるという成形方法をとっている。このことは破片が、底部、胸部最大径、頭部付近で剥れるように削れていることからも知られる。口縁部は胴部がなま乾き状態のときに、胸部内側にはめ込むように成形している。肩上部内側には、口縁部を接合した際の粘土痕が帶状に残る例が良くみられる。なお、底部は、粘土円板あるいは粘土紐を輪状にしたものを持って底をしているようであるが、これらを判別することは難しい。

甕：胴部成形は壺と同じように粘土紐を積み上げる方法をとっているが、積み上げ順序は口縁部から底部からではなく、脚部最大径、頭部付近で剥れるように削れていることからも知られる。口縁部は胴部がなま乾き状態のときに、胸部内側にはめ込むように成形している。肩上部内側には、口縁部を接合した際の粘土痕が帶状に残る例が良くみられる。なお、底部は、粘土円板あるいは粘土紐を輪状にしたものを持って底をしているようであるが、これらを判別することは難しい。

高坏：やはり坏部と脚部の接合法に注目してみる。高坏の場合も壺同様ははっきりしないものが多い。接合の状態が明らかにできたものについては、実測図にも示したが、円盤充填法によると思われるものが最も多くみられた。ただ、円盤充填法が、坏部と脚部を連続的に成形することによって生じた孔を、円盤を埋め込むことによって整形することを目的とした手法ならば、伊場遺跡出土の高坏の場合、坏部と脚部の間に明らかに製作時期の異なるものがみられ、また、円盤充填法はしているものの、(274)にあげた高坏のように、脚上部を中空状に作り、坏部は脚部に付加するような成形法を取っているものもあり、なんのための円盤充填法かわからない場合もままみられた。この他、坏部と脚部の接合法には、完形の坏部をやはり完形の脚部にのせた“接合法”をとるものや、完形の脚部に坏部を付加した“挿入付加法”によると思われるものもみられた。

3. 調整

大体の形ができる土器の細部の造り出しや、器面を薄く、もれないように仕上げの目的で行う調整をここではみていく。やはり、壺・甕・高坏について見る。なお、手法別における土器比率などについては次章の地区別項目で述べることにし、ここではふれない。

壺：口縁部・胴部・底部の順にみていく。

口縁部：口縁部は指先・布衣・葉等によるヨコナデ等によって、口縁端部を一定の形に作っている。この口縁部の処理手法には、

- a 手法 口唇端部を引き延ばして幅広い口唇部を作るもの
- b 手法 面を作るもの

- c 手法 円頭状に作るもの
- d 手法 折り返して作るもの

の4手法がある。

このうち、a手法は、西（尾張・三河）の弥生時代後期土器にみられる形態的特徴で、本遺跡の場合、この形態をとる壺を広口壺Aとして分類した。口唇部に文様を施すことはあまりしないが、口縁内面に文様を施す例はよくみられる。

b手法のなかには、①角頭面、②外傾面、③内傾面を呈するものがあり、これらはさらに、文様や凸帯の有無によっても分けることができる（文様や凸帯が付く割合は高い）。広口壺A・F・短形壺B・Fを除く壺の多くは、この口唇部形態をとる。

C手法の場合は、①強いヨコナデと②弱いヨコナデの施されるものの違いがみられる。b手法のものと同じ器形のものにみられるが、広口壺等では胴部形態がIVと呼ぶ球形の新しい時期と考えられる器形のものによくみられるようである。数はb手法のものと比べ少ない。この口縁形態をとるものの場合、文様を施すことはあまりしない。

d手法では折り返し面が、①三角形を呈するもの（F-a）と、②四角形を呈するもの（F-b）に分けられる。また円頭状を呈するのも数少ないがみられる。このd手法をとる広口壺を広口壺Fとして分類した。広口壺ではb手法に次いで数多くみられる。

次に、口縁部におけるハケ調整やヘラミガキ調整についてみてみよう。まず、広口壺についてみると、内面は多くの場合、ハケ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施している。しかし、外側はハケ調整の後、ヨコナデ調整を施すだけでヘラミガキ調整はほとんどしない（頭部はハケ調整後ヘラミガキ調整をしている）。広口壺以外の器種ではいずれも口縁部外側が外から見えることもあって、文様を施さない場合は、ヘラミガキ調整している。

胸部：胸部は成形時の土器表面の凸凹を除いたり、あるいは余分な粘土を削り落すために、器面全面にハケ調整を加えている。刷毛は幅3cm程の針葉樹？の板を用いて、胴下部から胴上部にかけて施すことが多い。こうした後、人方の土器は少し乾燥が進んだ段階で、ヘラミガキ調整を加えて、表面の砂粒を沈めるなどして表面を緻密にし、ミガキによる光沢等の装飾効果をもたせている。このヘラミガキ調整は、文様帶を除く、胸部全面に施されることが多い。この胸部へのヘラミガキ調整は、胸部最大径付近を境に、胴上部を斜方向、腹部を横方向、胴下部を横又は斜方向に、壺の上下の位置を替えたりしながら施している。そしてこの作業によって、前段階のハケ調整の痕をほとんど消してしまう。

次にハケ・ヘラミガキ調整と文様との関係を見ると、文様を施す際、多くの場合、ハケ調整後ナデ調整を行い、その後、文様を施している。これをヘラミガキ調整との関係でみれば、文様を施した後、文様下部をヘラミガキ調整しているものが多いようである。つまりハケ調整→文様施文→ヘラミガキ調整という順序で作業が行われているのである。

なお、文様施文法における回転台の使用、ならびに施文（回転）方向等については第4章に詳述されるのでここで述べない。

底部：土器観察では、底部の大きさが、器種・土器の大きさ等とどのような関係にあるだろうかと、統計をとってみたが、芳しい結果は得られなかった。ただ言えたことは、弥生時代中期後半（新居町一里田遺跡出土品等）の壺等では、器形の割に底部が小さく不安定なものが多いのに対し、伊場遺跡のものでは、ある程度の大きさがあり、安定性の良いものが多いということであった。また、底部破片だけの場合、器種はもちろん、壺・鉢を区別することも容易でないことが知られた。次に底部の形態についてみることにしよう。底部には、胴部から突出して作るものと、胴部から底部にかけてはわずかに弧なりになる程度でスムーズに移行するものがある。それぞれの数値は、地点別分析の項に述べるが、突出した底部の数は少ない。底面の形態には、平底・ドーナツ底・あげ底の3形態がある。全体数としては平底が最も多く、続いてドーナツ底、あげ底はごくわずかである。器種別

の数値は第1表に示したが、その傾向を述べれば、受口壺では平底が優位で、ドーナツ底となるものはほとんどない。広口壺ではどの形態においてもドーナツ底より平底がやや優位といったところである。長頸壺では平底が大半でドーナツ底はほとんどなく、それが短頸壺になると長頸壺とは逆に、ドーナツ底が大半で、平底となるものはほとんどない。あげ底は広口壺B・C・短頸壺Aなどで数例がみられるだけである。この他、形態とは別に、底部に木葉痕が付着するもの、砂粒が付着するもの、ヘラミガキ・ナデなどで仕上げているものの違いなどもみられた。木葉痕は平底ばかりでなく、ドーナツ底のものにおいても認められたが、その数は多くない。砂粒は焼成時に意識的に砂粒の上においたことによるものか、量的には木葉痕よりも多くみられた。

窓：窓については、口唇部・胴部の調整法、胴部と脚部の接合法についてみていく。

口縁部：まず口唇部の調整法についてみていく。窓の口唇部にも、

- ① 面を作るもの（窓口縁部処理手法b）
- ② 凹頭状を作るもの（窓口縁部処理手法c）
- ③ ヨコナデ等により尖頭状を作るもの（窓口縁部処理手法にはない）
- ④ 折り返して作るもの（窓口縁部処理手法d）

がみられる。

これらはさらに、刻目の状態で、④口唇下端に刻目を施すもの、⑤口唇面上に刻目を施すもの、⑥刻目を施さないものの差がみられる。この刻目については、櫛・鑿・板状器具を用いた場合がみられるが、なかでも櫛状器具によるものが大半を占める。こうした口唇部の形態、並びに刻目の状態については、口縁部の形状とともに形態分類の大きな指標としてとらえ、分類に生かした。

次に進口縁部を観察していく場合、よく目立つ手法に、口縁部のヨコナデ手法がある。このヨコナデが、壺の新旧を区別する指標になるのではないかとの予測もあり、層序別並びに形態別に統計をとってみたが、ヨコナデの有無の割合はほぼ1/2近く、これは層序間・形態間においても差ではなく、新旧・形態差に関係しないことが明らかとなった。

胴部：胴部外面は大半のものが、針葉樹による刷毛状器具でハケ調整している。ハケ方向は多くの場合、右下り斜方向（胴部のみ横方向）である。施文順序は一般に言われているように胴下部から胴上部へではなく、逆に胴上部から胴下部に施しているものが多いようである。内面は外側ほどしっかりハケ調整はしていない。ハケをナデ消しているものや、板状器具でナデしているようなものもみられる。

脚台部：胴部と脚台部の接合部に粘土紐をつける手法についてみてみよう。この粘土紐をつけるという手法は、弥生時代後期前半の伊場式のメルクマールの1つにされていたが、はたしてそういえるであろうか。

まず、胴部の脚台部接合法には、

- ① 粘土紐のつかないもの
- ② ドーナツ状の粘土紐の付くもの
- ③ 蜻状の粘土紐突起の付くもの

の3形式がみられる。このうち③は伊場遺跡全体においても10例たらずとあまり問題にしなくてもよい。それでは①と②はどうであろうか。詳しくは地点別分析を通して述べることにし、ここでは結論を述べると、これらは環濠内の下層と上層においても、ほぼ同じ割合で出土し、明らかに伊場第Ⅱ期（火山式）の壺にも認められた。したがってこれを時期を決定する要素とはなりえないといえる。ただこの胴部と脚台部の境に粘土紐を貼付するという手法は、分布からすれば西遠地域独特の形態と言ふことはいえよう。

窓環：窓部口唇部および脚端面の処理手法について述べる。

窓口唇部の処理手法には、

- ① 面を作るもの（窓口縁部処理手法b）
- ② 凹頭状を作るもの（窓口縁部処理手法c）

⑨ 折り返して作るもの（壺口縁部処理手法d）

この3手法がみられる。このうち⑨の折り返した口縁部を作るものは、高壺H2においてのみ認められるもので、搬入品の中遠地域の菊川式の形態的特徴である。①の口唇部に面を作るものと、②の円頭状に作るものについては、③の処理手法をとるものが、どの器種においても数多く認められる。しかし⑨の手法も高壺Bを中心にならざる認められた。

次に脚端面の処理手法についてみてみよう。

脚端面の処理手法には、

① 面を作るもの（壺口縁部処理手法b）

② 円頭状に作るもの（壺口縁部処理手法c）

③ 押えつけるように折り返すもの（壺口縁部処理手法f）

④ 折り返し、あるいは折り曲げて段を作るもの（一部壺口縁部処理手法d）

この4手法が認められる。このうち最も多く認められるのは①によるものである。④の手法は、口唇部の③の手法と同じく、中遠地方の土器に認められる形態的特徴である。②と③のうち、②はあまり数は多くない。③は高壺Bや高壺D・Fといったラッパ状に大きく広がる脚部をもつ土器に多くみられる。

4. 色調・焼成・黒斑について

伊場遺跡出土の土器を見た場合、明るい黄橙色・赤味橙色をしたものが多い。器壁を含めて黄橙色・赤味橙色を呈し、器壁の芯が灰黒色等のサンド状を示す土器は少ない。総体として焼きは良いといえる。このことは弥生時代中期のこの地域の土器が、暗い色調を示すことと比べ、その差が著しい。こうした現象が、土器を焼成するための設備、構造の変化によるのか、はたまた材料・燃料の変化によるのかははっきりわからぬが、その動向は西日本の弥生土器の変革（小林・佐原1964）に影響されていることはまちがいない。

以上は在土地器の色調の様相であるが、搬入品、とりわけ中遠地域の土器の場合、在地品とは胎土とともに色調も明らかに異っていた。つまりこの種の土器は、弥生時代中期の土器にみられる暗い色調をひくにぶ黄橙色、灰味黄茶色を呈するものが多かった。

これら搬入品の色調の違いは焼成技術の違いと言うより、胎土の違いによるものではなかろうか。ただ中遠地域にいってその地から出土した土器をみると、たとえば天竜川左岸などでは暗い黄茶色のように暗い色調のものが多いのに対し、菊川流域では、やはり暗い色調ながらもぶ黄橙色を呈するものがみられるなど小地域ごとに、色調にも微妙な異なりが認められたが、伊場遺跡出土の土器ではそこまで識別することはできなかった。

黒斑については、壺・高壺のかなりの数の土器において認められた。壺の場合、内面にそれらしい跡の付くものもあるがはっきりしない。

黒斑の表われる場所は、たとえば壺では、①口縁部、②胴上部、③胴中央部、④胴下部、⑤底部等で、②～④の胴部のいずれかに認められるものが最も多かった。黒斑は単独で認められる例が最も多いが、2箇一対で表われる例、たとえば壺胴中央部と胴下部といった場所に対をなして認められる場合も数みられた。また3ヶ所以上に認められる場合もあった。色調は真黒をしたものが多く、胴部色調との境がはっきりしているもののが多かった。黒斑の成因については、「紫窯出」（小林・佐原1964）において、佐原氏は「焼き上げた土器を取り出す際にいたるもの」とされている。

第5節 文 様

文様は土器仕上げの重要な要素の一つで、器面を飾ると同時に、使用目的を決定づけたり、あるいは地域性、時代性を表現したりしている。ここでは、こうした文様のもつ特性・構成等についてみていく。

文様の施された土器には、壺・高壺・鉢がある。壺は原則として施文しない。以下、器種別にみていくことに

第1表 壺(主要形態)における文様部位と底部形態

		無文	口縁部と 胴部両面 有文	口縁部 有文	胴部 有文	底部形態		
受 口 壺	A					平底	ドーナツ底	あげ底
	A ₁		2	1	1	3	1	
	A ₂	2	1	1	1	1		
	B		1					
	C				1	1		
	A ₃		2	2		1		
広 口 壺	A ₄		4		1			
	B ₁	5	19	1	4	17	6	1
	B ₂	7	9		1	11	5	
	B ₃	2	6	1	2	4	4	1
	B ₄	5	8		4	7	9	
	C ₁		2		4	3	1	1
	C ₂	4	2		4	3	5	1
	D ₁	3			1	1	3	
口 壺	D ₂	2	1		1	3	1	
	D ₃	9	1			5	3	
	E ₁	1			2	2	1	
	E ₂	2			1	2	1	
	E ₃	1			3	1	1	
	F ₁	1	4	1		5	1	
長 頸 壺	F ₂		3			1	2	
	F ₃	1	5	1	2	4	3	
	F ₄	2	3		2	5	1	
	A	14				12	1	1
短 頸 壺	B	13				6	2	
	C		1					
	ひきご壺	1				1		

*別冊図版に実測図をのせた資料による。ただし文様について
は口縁部・胴部両方がわかる資料に限る。

しよう。

1. 壺(鉢)

壺は多くの場合、口縁部と胴上部において文様が認められる。また無文のものも多い。そこで代表的な器種において、有文と無文土器の割合、有文である場合、文様の施される部位、などを明らかにする目的で、第1表を作成してみた。まず、この問題について述べる。その後、個々の文様構成について述べる。

a. 各形式における文様の比率・部位・構成

受口壺 図示したのは18個体(口縁部破片9点を含む)のみである。このうち無文であるのは口縁部破片を含めてもわずか4点。他は口縁部・胴部いずれかに文様が施されている。この内訳は、口縁部・胴部両面に施文されているものの4点、口縁部のみ7点(口縁部破片の5点を含む)、胴部のみ3点である。後述する広口壺では、口縁部のみに施文するとか、口縁部外面に施文するということは余りしないが、受口壺では、口縁部外面が、外からの観賞の対象となることもあって、この部位に施文する例が多い。文様は、口縁部においては縦文や横の押正横線文・横描刻突文が目に付く。また、胴部文様には、横描の直線文・波状文・扇形文といった後述する横描文による文様がよくみられる。

広口壺 非常に数が多いので形態別に見ていくことにしよう。

まずA類。数は9点（内5点は口縁部破片）と少ないが、すべて有文である。内訳は口縁部・胸部両面が6点、口縁部のみが2点、胸部のみが1点である。文様は口縁部においては、柳描波状文と柳描刺突文を施したものが多い。胸部は柳描直線文・柳描波状文の組み合せ文様が多く、他に柳描刺突羽状文や纏文を施したもののがみられる。

B類は数が多い。文様構成のはっきりわからぬ口縁部破片を除いても、74点（C類以下、いずれも口縁部破片を除いた点数をいう）がある。内訳は有文55点（74%）、無文19点（26%）である。この比率はB1～B4においてもほとんど差はない。施文部位は口縁部・胸部両面のものが圧倒的に多く55点中42点、続いて胸部有文が11点で、口縁部のみ施文というものは2点だけである。文様は口縁部においては、柳描波状文がB1～B4いずれにおいても主体を占め、44点中26点を数える。この他では、柳描扁形文がB1において4点、柳描刺突文がB1～B3で各2、3点ずつといったところが目につく。胸部は、後述する胸部文様柳描文Iとした柳描の直線文・波状文・扇形文を構成要素とした文様が53点中35点と圧倒的に多い。これもやはりB1～B4を通じてほぼ同じ傾向にある。この他、上記柳描文Iの構成要素に柳描刺突文を加えた柳描文IIが8点、纏文を施したもの6点等が胸部文様としては目立つ。

C類は16点（形式の明らかな資料に限る。以下同じ）がある。C類はC1とC2の間に文様構成のうえで若干の差がみられた。数が少ないので、これがC類における普遍的な傾向といえるかどうかわからぬが述べておく。まずC1においては無文のものなく、すべて有文で6点ある。内訳は口縁部と胸部両面有文のもの2点、胸部のみ4点である。これに対しC2は、無文4点、有文6点となる。文様の付く部位は口縁部と胸部両面のもの2点、胸部のみ4点である。口縁部に文様が付くものは16点中4点と数少ない。文様は柳描波状文と柳描刺突文を施したもののが各2点ずつある。胸部文様は、柳描刺突文とハケによる羽状文を組み合せた文様や、柳の押圧模様を2～3条程施しただけのもの、纏文を施したもの等が2～3点ずつみられる。柳描の直線文や波状文を用いた文様もみられるが目立たない。

D類は18点がある。この類は有文4点に対し、無文14点と無文土器が目立つ。とりわけ胸部球形をしたD3では無文9点に対し、有文1点と、無文土器が圧倒的に多い。施文部位の内訳は口縁部と胸部両面のもの2点、胸部のみ2点の計4点である。文様は口縁部においては柳描刺突文と柳描波状文を施したもののが各1点、胸部では、柳描の直線文と波状文を組み合せたもの、それに柳描刺突文を加えたもの、刺突文だけのもの等がみられる。

E類は10点と数は少ない。内訳は無文4点、有文6点である。文様の部位は、口縁部に施すものではなく、すべて胸部である例が注目される（このことは口縁部破片14点中11点が無文であることからもいえる。）胸部文様では柳描直線文に柳描刺突文を組み合せた文様が4点と目につく。

F類は25点ある。有文・無文の割合は有文21点、無文4点と、有文土器が圧倒的に多い。施文部位の内訳は、口縁部と胸部両面に施す例が最も多く、15点を占める。口縁部のみ有文2点、胸部のみ有文も4点ある。文様は口縁部においては、口縁部内面に柳描波状文を施したもののが6点と最も多く、この他、やはり内面に柳描刺突羽状文や纏文を施したもの、口唇面に刺突文を施したもののが各2～4点ずつある。胸部文様には後述する柳描文Iによるもの、同じく柳描文II、纏文もしくは纏文に柳の押圧模様を加えた文様をもつものが各5～7点ほどみられた。

小型広口壺・小型壺 表からは除外したが、前述した中型土器に比べ、無文土器の占める割合が高い。とりわけ口縁部に施文する例は小型広口壺Aを除き、ほとんどみられなくなる。

長頸壺 C類の（178）を除き、すべて無文土器（27点）である。（178）は西（三河・尾張）からの撤入品と考えられるもので、これには口縁部から肩部（肩部）にかけて、柳描直線文と柳描刺突文を交互に施した文様が認められた。

脚付長頸壺 口縁部と脚下部が欠損したものが1点あるだけで、はっきりしないが、残存部には文様はない。

ひさご壺 1点あるだけであるが無文土器である。ひさご壺は、他遺跡出土のものをみても無文であることが多い。

短頸壺 A類～F類に分類したが、いずれも数例あるだけで、これによって傾向を示していると言えるかどうかわからぬが述べておく。A類は3点あるが、これらはいずれも口縁部・胴部に文様が認められた。文様は口縁部が櫛描の刺突羽状文又は刺突羽状文、胴部が櫛描の直線文と波状文の組み合せ（2点）と櫛描の直線文と刺突文を組み合せたものである。B類は7点あるが、内無文は1点で、有文であるものが多い。施文部位は口縁部と胴部の両面にあるもの3点、口縁部のみ3点である。口縁部文様は、(892)にあげた1点が珍しく櫛描波状文である他は、すべて櫛描刺突文である。胴部は(892)が、口縁部と同じく櫛描波状文である他は、櫛描直線文に櫛描波状文・櫛描扇形文もしくは櫛描刺突文を施したものである。C類は4点あるが、(32)が口縁部に櫛描刺突文を施す他は無文である。D・E類は合せて7点あるがいずれも無文である。F類は1点のみでこれには口縁部に櫛描刺突文が施されている。

鉢 鉢については表示はしなかったが、ここで述べておく。鉢には口縁部外面に文様が施されたものが數多く認められた。また胴部に文様が施されたものも少しはあるが認められた。後述するように、伊場遺跡出土の弥生土器は西（尾張・三河）からの影響を受けて成立した土器型式であるが、この鉢口縁部に文様を施すという行為は、西の土器では余りせず、この地域独特の文様構成といえる。以下、器種別に簡単にみていく。

まずA類は6点があり、内半数余に文様が認められた。文様は口縁部外面に刺突文を施したものが多い。胴部に文様が付くものも1点あり、これには直線文と扇形文が施されていた。

B類は30点余があるが、文様の付く割合は1/3程と少なくなる。文様は口縁部外面に施したものが多く、文様としては刺突羽状文が多かった。口縁部と胴部の境に直線文を施したものもみられた。

C類は20点余りがあり、B類につぐ形式である。文様は約半数のものに認められたが、これには口縁部外面に刺突羽状文を施したもののが多かった。D類～G類はともに無文である。

台付鉢では、A類の場合、坏部に文様を施すことはしないが、脚部に直線文、刺突文を施したもののが半数余に認められた。

台付鉢のB・C類は共に1点ずつしかないが、これには尚方に文様が認められた。B類には、鉢部に直線文、脚部に直線文と刺突文が、C類では、鉢部に直線文と扇形文が認められた。

以上、壺・鉢の各形態において、文様の有無の割合とその部位についてみてきたが、以下では、個々の文様をそれぞれの構成要素にわけてみていくことにする。

まず、文様を施すところの施文具についてみていくことにしよう。施文具については、後述する高坏においても同様の器具を用いていたと考えられる。

b. 施文具について

施文具には櫛状施文具（以下櫛といふ）、棒状施文具（以下棒といふ）、竹管状施文具（以下竹管といふ）、鉗状施文具（以下鉗といふ）、繩文の5つがある。櫛による施文方法には、描くものと、刺突するものがあり、前者には描きはじめて描き終えるまで櫛を土器面から離さないで描ける櫛描直線文（以下直線文といふ）や櫛描波状文（以下波状文といふ）のような文様と、文様を描くごとに土器面から離しながら描く櫛描扇形文（以下扇形文といふ）、櫛描丁字文（以下丁字文といふ）等の文様（単位文）がある。後者の文様には櫛描刺突文（以下刺突文といふ）の他に、櫛の押圧横線文、山形文等がある。棒と竹管はまれに直線文を描くことはあるものの数は少なく、多くは刺突に使用され、棒刺突文とか竹管文と呼ばれる。繩文には撚り方によって、無節のL、R、单節のL R、R L、单節+附加条、羽状繩文、結節繩文などの文様がある。

c. 文様構成について

壺は多くの場合、口縁部と胴上部において文様が認められる。これら文様を整理する方法としては、それぞれの文様を要素別に処理、整理し、それらを合わせて分類する方法が最も良い方法であろう。しかしながら、それ

をするに伊場遺跡出土土器はあまりに莫大すぎて煩雑になることは目にみえていた。そこで口縁部と胴部それを別々に分類して述べ、それらを次章、地点別出土土器の分析を通してみていくことにした。

それではまず、胴部文様について、要素別に分類し、述べることにしよう。

胴部文様：胴部文様については、文様の組み合わせとともに、文様帶の施文幅が年代順と逆関係にあるのではないかとの予測もあり、横描文においては、第2表～第4表において、縦列に文様組み合わせ、横列に文様帶を示して整理してみた。またそれぞれの文様についても、構成要素別に整理し、第2表～第4表に示した。なお、凸帯や浮文については文様構成表には含めず、必要に応じて文中でふれることにした。以下、それぞれについて説明する。胴部文様は構成要素によって〔I〕～〔VII〕までに大別される。

〔I〕 横描文Ⅰ 横描の直線文・波状文・扇形文を組み合わせた文様を横描文Ⅰとした。表の説明に入る前に、直線文・波状文・扇形文といった単位文について説明する。

〈直線文〉 直線文は波状文と並んで最も基本的な文様の1つである。施文具は、木竹等の小片の先端を細かく割ったもの」と思われるもので、人半のものが、逆時計回りに、一周の間に、数回の停止痕を残しながら、描いている（波状文も同じ）。直線文そのもので文様を構成している例は極めて少なく、多くは波状文、扇形文、刺突文等、他の多くの文様と組み合って文様をなす。

〈波状文〉 施文具を上下に動かすことによってできる文様である。波状文もこの文様帶だけで完結することは少なく、多くは他の文様との組み合せからなる。波状文には手法および外見上の違いによって、

- ① 比較的均整のとれた波状文
- ② みみざばれ状の細かな波状文
- ③ 不均整・不整形の波状文
- ④ 廊状的な波状文
- ⑤ 扇形文を上下互違いに連続させたような波状文

がある。ただし観察表ではそこまで表現していない。

〈扇形文〉 単位文を描くごとに櫛を土器面から離し、この反復によって施文する文様である。胴部文様の場合、扇形文だけで施文されることはほとんどなく、直線文や波状文と組み合って文様をなす。

I 1～3（直線文のみ） あまり数は多くないが、1～3帯までのものがみられる。

I 4・5（波状文のみ） やりはり数は多くない。1・2帯のものが少しみられる。

I 6（扇形文のみ） 口縁部文様ではまれにみられるが、胴部文様はほとんどない。

I 7～12（直線文+波状文） 2帯から9帯までの組み合わせが認められる。直線文と波状文を交互に組み合わせたものと、一方の文様を優先的に施したものとがある。3帯（8）～6帯（11）のものが多く、胴部の文様構成としては最も一般的である。

I 13～16（直線文+扇形文） 数はあまり多くない。交互に施す場合と、直線文を数条施し、最下段に扇形文を施す場合がある。

I 17～22（直線文+波状文+扇形文） 比較的よくみられる文様構成である。3帯（17）～6帯（20）のものが多い。

I 23・24（波状文+扇形文） 波状文を1ないし2条施し、その下に扇形文を施した文様で、数は少ない。

〔II〕 横描文Ⅱ 上記横描文Ⅰの構成要素に、刺突文を加えた文様を横描文Ⅱとした。まず単位文としての刺突文について述べる。刺突文には、以下の2種がある。

〈刺突文A〉 器面に櫛状施文具全面で刺突するもの。

〈刺突文B〉 器面に櫛状施文具の角を使って刺突するもの。

なお、刺突羽状文は、刺突文の連続の軌跡としてとらえ、2帯として数える。

I 1～4（刺突文Aのみ） 1帯（1）～4帯（4）までがあり、有段羽状に施すことが多い。

第2表 壁洞部文様集成表 I

I 楠描文 I (直線文・波状文・扇形文の組み合せ)

	1帯	2帯	3帯	4帯	5帯	6帯	7帯	8…帯
直線文								
	1	2	3					
波状文								
	4	5						
扇形文								
	6							
直線文 + 波状文								
		7	8	9	10	11		
直線文 + 扇形文								
		13		14	15	16		
直線文 + 波状文 + 扇形文								
			17	18	19	20	21	22
波状文 + 扇形文								
			23	24				

IV 楠描文 IV (文様帯を縦位に区画するモチーフをもつ文様)

1	2	3	4	5	6	7	8	9

V 竹管文を用いる文様

1	2	3	4	5	6	7	8	9

第3表 壺胴部文様集成表 2

II 楢描文II(直線文・波状文・扇形文・刺突文の組み合せ)

	1帯	2帯	3帯	4帯	5帯	6帯	7帯	8…帯
刺突文A	//////	~~~~~	~~~~~	~~~~~				
	1	2	3	4				
刺突文B	~~~~~							
	5							
直線文 + 刺突文A		~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	
	6	7	8	9	10	11		
直線文 + 刺突文B		~~~~~	~~~~~	~~~~~				
	12	13	14					
波状文 + 刺突文A		~~~~~	~~~~~	~~~~~				
	15	16	17					
直線文 + 波状文 + 刺突文A		~~~~~	~~~~~			~~~~~		
	18	19				20		
直線文 + 波状文 + 刺突文B			~~~~~		~~~~~			
			21		22			
直線文 + 波状文 + 刺突文A・B				~~~~~	~~~~~			
				23	24			
直線文 + 扇形文 + 刺突文A		~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	
	25	26	27	28	29	30		
直線文 + 波状文 + 扇形文 + 刺突文A				~~~~~	~~~~~	~~~~~		
				31	32			

II 5 (刺突文Bのみ) 1帯のみ施したものが数例みられるだけである。

II 6~11 (直線文+刺突文A) 直線文と刺突文Aを交互に施すことが多い。刺突文Aは、多くの場合、右下り・左下りと交互に施している。

II 12~14 (直線文+刺突文B) やはり、交互に施すことが多い。刺突文Bは、前者の刺突文Aとは異なり、單方向の左下りに施している。

II 15~17 (波状文+刺突文A) 数は多くない。17の刺突文は羽伏文を呈する。

II 18~20 (直線文+波状文+刺突文A) 3種をほぼ交互に施す場合と、直線文と波状文の組み合せを優先させ、その中にないし2条の刺突文Aを施したものがある。

II 21・22 (直線文+波状文+刺突文B) 前者と比べ、刺突文Bを施す例は数少ない。

II 23・24 (直線文+波状文+刺突文A・B) 刺突方法の異なる刺突文を施したもので、数は少ない。

II 25~30 (直線文+扇形文+刺突文A) 直線文と直線文の間に、扇形文や刺突文Aを施したもので、比較的良く見られる文様である。扇形文に比べ刺突文Aが優先するものが多いが、最下段は扇形文でしめくくるものが大半である。

III 31・32 (直線文+波状文+扇形文+刺突文A) 上記文様に波状文が加わった文様で、数は少ない。

(Ⅲ) 横描文Ⅲ 上記横描文Ⅱの構成要素に、押圧横線文を加えた文様を横描文Ⅲとした。まずは単位文としての押圧横線文について述べる。

〈押圧横線文〉 横向きにした棒を、器面に垂直に刺突しながら、頭部から肩部付近を一周させることを原則とする文様である。一気に一周することではなく、数回にわたり棒を動かして描く。

III 1~4 (押圧横線文のみ) 頭部に1帯~4帯を施したもののがみられる。1帯から2帯のものが多い。

III 5・6 (押圧横線文+直線文+扇形文) 3帯(5)と5帯(6)の場合がみられる。原則として肩上部に押圧線文を施し、その下に直線文と扇形文を施す。

III 7 (押圧横線文+直線文+波状文+扇形文) 1例だけ認められた。やはり押圧横線文を肩部上段に配し、その下に直線文・波状文・扇形文を施す。

III 8 (押圧横線文+直線文+扇形文+棒?刺突文) これも1例だけ認められた。最上段に押圧横線文、最下段に棒?刺突文を配した文様である。

III 9~11 (押圧横線文+刺突文A) 上段に押圧横線文、その下に刺突文Aを施した文様。破片であるため、全体の文様構成は明らかではない。

(IV) 縦描文IV 文様帶を縦位に区画するモチーフをもつ文様をいう。縦位に施す文様としては、横描のJ字文、直線文、波状文等がある。

IV 1 (直線文+波状文+縦位横描直線文) 直線文と波状文を交互に施し、その上に縦位横描直線文を3・4ヶ所に配したもの。

IV 2 (波状文+縦位横描直線文) 波状文を連続して幅広く施した後、縦位横描直線文を複数条施したものである。

IV 3 (直線文+波状文+刺突文A, 縦位横描直線文) 幅広い文様帶の上に、縦位の直線文を垂下させたもの。やはり破片であるため、縦位の文様の数は明らかでない。

IV 4 (直線文+縦位横描J字文) 1点(671)ある。比較的幅広く施した3条の直線文の上に、肩部より垂下する横描J字文を1ヶ所に配したもの。

IV 5 (直線文+波状文+扇形文+縦位横描J字文) 破片であるため、縦位の文様の数は明らかでない。

IV 6 (直線文+波状文+縦位横描波状文) 直線文と波状文を交互に施し、その上に縦位横描波状文を3・4ヶ所に配したもの。

IV 7 (直線文+波状文+縦位横描波状文) IV 6・IV 9と同一の構成要素によるが、IV 7は波状文を数条、直

第4表 壺胴部文様集成表 3

III 楯描文III(直線文・波状文・扇形文・刺突文・押圧横線文の組み合せ)

	1帯	2帯	3帯	4帯	5帯	6帯	7帯	8…帯
押圧横線								
直線文 + 扇形文 + 押圧横線文	1	2	3	4		5	6	7
直線文 波状文 扇形文 押圧横線文						7		
直線文 扇形文 棒刺突文 押圧横線文						8		
刺突文A + 押圧横線文						11		

VI 繩文を用いる文様

1	2	3	4	5	6	7	8	9
縄文								

VII その他の文様

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
									
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
									

線文を1条配した上に、縦位櫛描波状文を配したものである。

IV 8 (刺突文A+直線文+扇形文↓縦位櫛描波状文) 肩部上段に凸帯と刺突文A、その下に直線文と扇形文2段を交互に施し、その上に縦位櫛描波状文を4ヶ所に配したものである。

IV 9 (直線文-波状文、縦位櫛描波状文) IV 6と同様の構成要素によるが、IV 9は直線文と波状文を交互に数箇所した上に、縦位櫛描波状文を2条1組にして、数ヶ所に配したものである。

IV 10 (櫛描J字文+扇形文↓縦位櫛描波状文) 小破片であるため、全体の文様構成は明らかではないが、横方向の櫛描J字文の下に扇形文を数箇所施し、その上に縦位の櫛描波状文を施したものである。

(V) 竹管文を用いる文様 竹管文を用いる文様を、ここで取り上げる。総数はあまり多くはないが、いろいろなパターンがみられる。

V 1 (竹管文のみ) 頸部との境に、凸帯と組み合わさせて施されているが、数は多くない。

V 2 (竹管文+直線文) 肩部上段に直線文と竹管文を施しただけの幅狭い文様である。

V 3 (竹管文+直線文+波状文) 肩部上段に直線文、波状文、竹管文を順に施した幅狭い文様である。

V 4 (竹管文+直線文+扇形文) 上下段に直線文と扇形文を交互に施し、その間に竹管文を配したもの。

V 5 (竹管文+直線文+波状文+扇形文) 最上段に竹管文、その下に直線文と波状文を交互に数箇所施し、最下段に扇形文を施した幅広い文様である。

V 6 (竹管文+波状文+刺突文A) 波状文の間に刺突文Aを配し、その下に竹管文を配したもの。

V 7 (竹管文+直線文+刺突文A+扇形文) 上段に竹管文を2段、その下に直線文と刺突文Aを交互に2段、最下段に扇形文を施したもの。

V 8 (竹管文+繩文) 肩部上段に竹管文を1段施し、その下に幅広い繩文帯を施したもの。

V 9 (竹管文+直線文+波状文) 直線文の間に、波状文や竹管文(山形文)を施したもの。

(VI) 繩文を用いる文様 繩文には、拂り方によって、無筋のR、L、単節のLR、RL、単節+附加条、刺状繩文、結節繩文等がみられる。ただし他文様との組み合せを説明する場合、この拂りの別まではふれない。

V 1 (繩文のみ) 上記した拂りのものが認められる。

V 2 (繩文+直線文) 幅広い繩文帯の中央を直線文で区画した文様である。

V 3 (繩文+直線文+扇形文) 直線文と繩文を交互に2段施し、最下段に扇形文を配したもの。

V 4 (繩文+刺突文B) 幅広い繩文帯の上下端を刺突文Bで区画した文様。

V 5 (繩文+刺突文A) 頸部との境に刺突文Aによる有段羽状文を1段めぐらし、その下に幅広い繩文帯を配したもの。

V 6 (繩文+押圧横線文) 肩部との境に櫛の押圧横線文を2段めぐらし、その下に幅広い繩文帯を配したもの。

V 7 (繩文+押圧横線文+刺突文B) 頸部との境に櫛の押圧横線文を3段、その下に、上下端に刺突文Bをめぐらした幅広い繩文帯がつくもの。

V 8 (繩文+直線文+扇形文+刺突文A) 肩部上段に刺突文Aによる有段羽状文を1段めぐらし、その下に直線文と扇形文、繩文を施した幅広い文様帯である。

(VII) その他の文様 [I]～[VI]までに入らない文様をここで述べる。

VII 1 流水文が施された土器である。流水文土器は発掘時より、目についたものはすべて取り上げていたこともあり、総数で10点余が認められた。ただこれらは小破片が多く、全体の形態、文様構成がわかるものはほとんどない。流水文は、破片で観察する限りでは、いずれも頸部から胸部にかけて垂下する櫛描直線文によって区画された中に、櫛描の綱型流水文が施されていた。

VII 2 小破片のため全体の文様構成は明らかではないが、櫛描の直線文の上に扇形文を重ねて描いたもの。破片内では上下の直線文の上に扇形文が並んで認められた。佐原真氏のいう櫛描擬流水文にあたる。

VII 3 やはり小破片であるため、全体の文様構成は明らかではないが、前述したVII2の櫛描直線文の間に波状文が加わった文様構成をとるもの。

VII 4 脊部との境に押圧横線文を1条もうけ、その下脣部に縦位櫛描直線文を5ヶ所に配し、その中に櫛描による斜格子を施した文様である。(88)の1点のみで、これには口縁部内面に扇形文が施されている。

VII 5 上段に櫛描直線文を1条、その下にX状に交差する櫛描文を施した幅狭い文様である(1123)。

VII 6 脊部の小破片が1点(1052)あるだけで、全体の文様構成は明らかではないが、櫛を左下り、右下りの順に櫛幅程施して格子文を作り、その下に直線文を施した文様である。長野県座光寺原式等にみられる文様構成である。

VII 7 直線文と直線文の間に、櫛描の逆U字文を施した文様。

VII 8 直線文と直線文の間に、VII 7とは上下逆の櫛描U字文を施した文様。

VII 9 VII 8の文様帶の上部に、波状文が加わった文様。

VII 10 直線文の間に、櫛描のJ字文(扇形文の場合もある)、その下部に櫛描のI字文を組み合せた文様(1119)をいう。

VII 11 小破片であるため、全体の文様構成は明らかではないが、櫛又は刷毛状器具を用いて、雑な山形文様を描いたもの。

VII 12 VII 11と同様、櫛又は刷毛状器具を用いて、文様効果をもつ雑な羽状文を施したもの。

VII 13 VII 12と同じく、櫛又は刷毛状器具を用いて羽状文を施し、その上下端、あるいは上・中段に刺突文Bを配した文様。

VII 14 文様帶下部の破片であるため、全体の文様構成までは明らかではないが、直線文の下に櫛描J字文を描き、J字文とJ字文の間(一部)を直線文で結んだ文様である。

VII 15 基本的には直線文、波状文、刺突文A・Bを組み合せた文様。直線文と波状文の間に刺突文Aによる山形文・羽状文がそれぞれ施されている。

VII 16 直線文と刺突文A・Bを組み合せた文様。上段の直線文と直線文の間に、刺突文AによるX字文(格子文)を施した文様。

VII 17 刺突文Aと直線文を交互に施し、その最下段に櫛描J字文(扇形文変形)を施した文様。

VII 18 直線文と波状文を組み合せた文様最下段に、刺突文Aによる山形文を施したもの。

VII 19 直線文の間に、波形の纏状文を施したもの。

VII 20 VII 19と同じく、直線文の間に、直線の纏状文を施したもの。

口縁部文様：脣部文様に統いて、口縁部の文様についてみていく。口縁部の文様は、脣部文様ほど、多種多様ではない。また、脣部文様の場合、文様帶の範が時期差と関連するのではないかと思われたが、口縁部の場合は時期差まで表しているように思えなかった。口縁部文様についていえば、形態の違いによって、文様の部位や文様そのものが異なるように思えた(前述形態別の項参照)。

口縁部に施された文様を整理・集成すると次の13種類に分かれる。

1.(波状文のみ) 口縁部内面に施される文様としては圧倒的に多く、57点中44点(点数は実測図にあげた値に限る。以下同じ)を占める。文様は1条の場合が最も多く、2~3条を施す場合もままみられた。口縁部外側のみ文様といった場合、口脣部を含めていうが、この部分に波状文を施すものはほとんどない。両面に文様が施されているものは11点がある(この中には後述する浮文と組み合わさったものが5点程あったが、この項に含めた。以下、浮文についてはそれぞれの文様に含めて述べる)。これら口縁部に付く波状文は、振幅の幅は少ないが、比較的均整のとれたもの(波状文①)が多かった。広口壺B、F等によくみられる文様である。

2.(波状文+扇形文) 外面に櫛状浮文、内面に波状文と扇形文を施した両面文様のもの。数は少ない。

3.(波状文+刺突文B) やはり数は少ない。内面のみではなく、外側1点、両面2点の計3点があるだけであ

る。両面に文様がつく（132）（362）は、口唇部に波状文、内面に波状文と刺突文Bを組み合わせたものである。

4.（波状文+竹管文） 両面文様のものが1点（15）あるだけである。内面に波状文2条と竹管文、外側（口唇部）棒状浮文の組み合わせである。

5.（扇形文のみ） 内面7点、両面1点の計8点がある。（97）と（493）が扇形文というより半円形に近い形である他は、いずれも幅狭い扇形文である。図示した資料は、内面の扇形文はすべて1段であるが、破片の中には、拓影図で示した（991）、（992）、（1097）のように、内面に扇形文を2段以上施文した例がみられる。これらは中遠地域の弥生後期土器によくみられる特徴である。

6.（刺突文A・B） 刺突文の施された土器は波状文について多い。内面のみ10点、外側のみ17点、両面に付くものの10点の計37点ある。刺突文Aによる文様が大半を占める。刺突文Aによる羽状文、あるいは刺突文AとBによる羽状文を施したもののが全体の約半数を占める。外側および両面の場合、口唇部に刺突羽状文を施したものも多い。広口壺A・B・F等の器種に數多くみられる。

7.（押圧横線文のみ） 口縁部に押圧横線を施した土器が3点ある。いずれも受口壺に施されたものである。

8.（押圧横線文+刺突文） この文様も1点みられるだけである。広口壺E（353）に施されたもので、口唇部に刺突羽状文、外側に押圧横線文と刺突羽状文が付く。

9.（押圧横線文+刺突文+波状文） 受口壺A2（123）の1点にのみ認められた。口唇部に波状文、外側に押圧横線文と刺突文が施されていた。

10.（纏文のみ） 4点ある。受口壺の2点（1・6）は外側、広口壺の2点は内面に施されていた。

11.（纏文+竹管文） 広口壺Fに2点見られた。外側（口唇部）に纏文、内面に纏文と竹管文を施したものである。

12.（刻目の付くもの） 口唇部の下端に刻目をつけたもので7点がある。文様としては刻目を施すだけで、他文様を施すことはあまりしない。

13.（浮文の付くもの） 全体から見れば数は少ないが、それでも20点程が認められた。多くは棒状浮文であるが、まれに円形、ドーナツ状浮文も認められる。浮文は4・5個を単位に3・4ヶ所に配されている。他文様とともに施されている場合が多い。

2. 高 坏

高坏の場合、坏部に文様を施すことは極めて少なく、坏部75点中15点に文様が認められただけである。脚部に文様を施すことは多く、約半数が認められる。まず形態別に文様の有無、文様部位について見、続いて坏部・脚部における文様構成について述べる。

a. 各形式における文様の比率・部位・構成

高坏A 坏部破片が1点あるだけで、しかも無文である。

高坏B 皿状をなす坏部をもつB類は、坏部に最も文様が施される器種でもある。36点中12点に文様が認められる。このうち5点は脚部にも文様が施されている。坏部文様には、波状文を施すものが最も多く、次いで波状文+直線文、直線文がみられる。脚部は25点中10点に文様が付く。文様は直線文が7点、直線文と刺突文が2点、残る1点は押圧横線文と刺突文A・Bを組み合わせたもので、これは中部山岳地帯からの搬入品である可能性が高い。

高坏C 11点あるが、いずれも無文である。

高坏D 坏部に文様を施すことはしない。脚部には直線文を数条施したもののが2点ある。

高坏E 1点あるが無文である。

高坏F やはり坏部に文様を施すことはしない。脚部には約半数のものに、直線文を数条施したもののがみられる。

高坏G 坏部形態にはいろいろな形のものがみられているが、文様が付くものはない。脚部には直線文や押圧横線を数条施した文様をもつものが多い。

高坏II 中遠地域からの搬入品であって、文様構成もこれまでの高坏と異なる。H2の(683)では口唇部・脚端部に刺突文、(568)や(952)は口唇部に刻目、(314)(952)などは坏部と脚部の境に押圧横線文が施されている。

高坏脚部の文様

脚A 脚部の中では最も多い36点があり、そのうちの21点に文様が認められる。文様には直線文を数条施したものと直線文と刺突文を組み合わせたものがある。

脚B 2点中1点に直線文を数条施した文様が付く。

脚C この形態のものは文様を施すことはない。

脚D 台付鉢の脚部である可能性もある小型の脚部で、14点中5点に文様が認められる。文様には直線文を数条施したものや、直線文と直線文の間に竹筍文を配したものなどがある。

脚E 脚上部が欠けているものが多いため、文様の有無のわかるものは少ない。(939)には横描直線文が施されている。

脚F 高坏IIの脚部で、文様にも、脚上部に押圧横線文を施したものや、脚端部にハケ、繩文等を施したものがある。

b. 文様構成について

施文具については、壺に施されたものと変わることはないので、ここで、簡単に文様構成についてみていくこととする。

(I) 坏部の文様 坏部に文様が施されるのは、高坏Bと高坏IIの2形式だけである。このうち高坏Bの坏部には直線文、波状文、直線文+波状文の3種が認められる。直線文は壺と比べ横目の粗いものが多く、また、波状文には比較的均整のとれた波を描くもの(波状文①)が多い。高坏IIには刺突文が用いられている。

(II) 脚部の文様 脚部にも文様の付く形式と付かぬ形式があるが、このことについては前に述べた。文様では直線文のみのものと、直線文と刺突文を組み合わせたものが圧倒的に多い。中でも直線文を間隔をあけて数条施すものは29点があり、新旧、形式差に関係なく、ほぼ万能なくみられた。また直線文と刺突文を組み合わせた文様も10点余認められるが、これはA群出土のものに多数みられるなど古い時期のものに多いようである。押圧横線文は、高坏IIの坏部と脚部の境に付く例が多い。繩文も高坏IIの脚端面に施したもののがほとんどである。

第6節 丹彩・絵画・穿孔土器について

1. 丹 彩 土 器

文様とともに、器面を装飾する代表的手法に、器面を赤く彩る丹彩がある。丹彩は東海西部(尾張・三河)においては弥生時代後期土器(パレススタイルの壺等)の有力な文様構成の1つであり、また、中部山岳地帯や、静岡県東部等では、弥生時代を通じて丹彩された土器が愛用され盛行している。しかしながら伊場遺跡の位置する静岡県西部から県中部にかけては、丹彩を施す土器は極めて少なく、ここ伊場遺跡においても個体数を確認した4,000余点中わずか14点が認められただけである。

これら丹彩土器を今少しくわしく観察するため、全出土例について器種、丹彩部位、出土遺構と層位、時期等について表にしてみた。

以下、この表にもとづき、みていくことにしよう。まず器種別では、壺、壺蓋、高坏、鉢、台付鉢がみられた。壺は広口壺Fと長頸壺が各1点と数少ない。高坏が4点、台付鉢が3点ある。脚台の付く土器が多い点は注目される。高坏も台付鉢も一般には日常容器として使用されていたであろうが、供獻土器としての側面も強いことか

第5表 丹彩土器一覧表

遺物番号	図版番号	器種	丹彩部位	登録番号 出土層位	時期	備考
55	7	高環B _a	环上部の内外面	6-1672 A10h-YT1	I期	脚部欠損
79	8	鉢 C _a	外面全面	6-1252 A10d-YT1	I期	底部欠損
313	22	高環脚D	环内面?	6-2724 A10f-D	II期	环部欠損
322	22	鉢 C ₁	外面全面と 口縁部内面	6-2510 A10f-D	II期	完形品
352	23	広口壺E	胴部外面	6-2413 B10g-YT2-D	I・II期	底部欠損
432	28	鉢 B ₁	外面全面	6-2159 A10c-YT2	I・II期	完形品
522	32	台付鉢D ₁	外面全面	7-2508 C11a-YT1-D	I期	完形品
610	37	長頸壺A	外面全面と 口縁部内面	7-2116 H12i-YT7-D	I期	口縁部欠損
656	39	台付鉢A ₁	外面全面と 口縁部内面	7-504 B12b-YT7-C3	I期	ほぼ完形
723	43	台付鉢D	鉢部内面	7-364 B13h-YT8-D	I・II期	口縁部欠損
724	43	高環B _a	环全部全面と 脚部外面	6-1062 A14b-YT8	I・II期	完形品
802	47	鉢 D	内面全面	6-929 A12g-D	I・II期	完形品
829	49	蓋 B	内外面全面	6-E176 A13e-C2D	?	ほぼ完形
1150	62	高環	环部全面	7-485 B13b-YT7-C3	?	环部破片

ら、これらも祭事とのかかわりの中で、使用されたと考える方がよいであろう。この他では鉢が1点と壺蓋が1点ある。

次に彩色部位についてみてみよう。まず、壺や鉢では、口頭部の内外面および脚部外面に施すことが多く、高環および台付鉢等では环・脚部の外面、および内面上部と脚部外面に施すことが多い。壺蓋については外面全面に施している。また(723)の台付鉢、(802)の鉢等は内面にのみ丹彩しており、なんのための丹彩かわからない。

それでは丹彩と文様とは、どのような関係にあるのだろうか。東海西部のたとえばパレススタイルの壺等では丹彩は文様区まで及ぶことなく、同一土器内において、丹彩と文様が同列の装飾効果をもって表現されている。しかしながら伊場遺跡出土の数少ない例では、丹彩と文様がこうした関係にあるものではなく、文様をもつ5点(壺胴上部1、鉢口縁部2、高環脚部2)とも、文様を含む全面に丹彩が施されていた。

統いて出土遺構・出土層位・時期についてみてみよう。まずこれらはすべて3条の環濠とその周辺包含層(土堤上)より出土した。環濠内より内側の溝より数多く出土しているが、これは全出土量と相対をなすものであってどの遺構(溝)どの地点で集中して出土したということではない。出土層位は溝中下層あるいは包含層中下層から出土する例がほとんどで、明らかに上層から出土したと思われるものはない。

また、丹彩土器は形態的にみても出土層位と同じく、新しい要素と思われるものはなく、いずれも後述する伊場第I期、II期と思われるものであった。こうした傾向は、東海西部(尾張・三河)の朝日遺跡や瑞穂遺跡・瓜

跡遺跡などでみられる傾向と変わることはない。

最後に搬入品との関係をみてみよう。丹彩土器のなかには形態および胎土等からみて明らかに搬入品と思われるものが何例かみられた。たとえば、(522)、(610)、(656)、(723)などは、伊場第Ⅰ期・Ⅱ期と姉妹墓式をなす寄道式の三河や山中式の尾張からの搬入品と思われるものである。また、(724)などは中部山岳地帯(座光寺式)からの搬入品と思われる。このように丹彩土器に占める搬入品と思われるものの割合は高い。

これら丹彩の施された搬入品が、たとえば同一地域からの搬入品のなかでどの程度の割合をもつのか明らかでないで断定できないが、これらがある事柄(たとえば祭事等)に用いるために特別にもたらされた可能性も考えられなくもない。

2. 絵画の描かれた土器

B13b YT7 下唇から出土した壺胴部破片の中に、水鳥を描いた土器片が1点(1187)あった。これが、万余を数える土器片の中からたった1点発見された絵の描かれた土器片である。絵は、壺腹部に、焼成後に細い棒あるいは鉛を使用して描かれていた。構図としては、頭を右にむけ、頭から尾へは単線によるゆるやかなカーブで、水鳥の姿を巧みに表現し、その後、胴中央や右よりに足2本を加えたものである。この土器片は、やや大型壺の腹部(球形?)破片で、破片上部には稚拙な感じのする直線文と波状文が認められた。従って、これらのこと

第6表 穿孔土器一覧表

遺物番号	図版番号	器種	穿孔部位	大きさ	登録番号	出土層位	時期	その他
20	5	広口壺D ₁	下胴部	5cm×3cm	6-3308 A10i-YT1		I期	完形品
84	9	広口壺B ₁	底部	径 2.5cm	3-520 B11C-YT1		I期	完形品
161	13	小型広口壺A ₁	下胴部	2cm×3cm	6-2370 A10f-D		II期	完形品
388	25	壺胴部IV	下胴部	5.5cm×4cm	6-1755 A10f-YT2		II・III期	口縁部欠損
561	34	壺胴部II	上胴部	径 2cm	第4次 C12g		I・II期	口縁部欠損 発掘時の傷?
589	36	広口壺F _a	下胴部	4.8cm×3cm	7-2625 B13d-YT7-D		I・II期	底部欠損
717	43	壺胴部I	下胴部	2cm×2cm	7-1626 B13c-YT6		I・II期	口縁部欠損
733	44	広口壺B _a	下胴部	2cm×2cm	6-1697 A13e-YT7		I・II期	完形品
738	44	広口壺B _a	腹部	径 2cm	6-1703 A13e-YT7		I・II期	完形品
748	45	壺胴部I	下胴部	径 2cm	6-1702 A13e-YT7		I・II期	口縁部欠損
771	46	広口壺B _a	下胴部	3.5cm×2.5cm	6-430 A13h-YT6		I期	完形品
772	46	広口壺B _a	下胴部	径 2.5cm	6-1571 A13i-YT6		I期	完形品
779	46	壺胴部	下胴部	3cm×3cm	6-1566 A13h-YT6		?	上胴部欠損
895	52	鉢 B ₂	底部	径 3.5cm	7-162 B13a-YP3-C3		?	発掘時の傷?
947	56	短頸壺D	胴部	8cm×8cm	6-1383 A10e-YT2		?	円窓風の穿孔 発掘時の傷?

から推察すると、この土器片は伊場最古式（伊場第1期）のものではなく、伊場第2期ないし第3期のものと考えられた。

この地域における絵画土器としては、市内三和町遺跡から、直弧文と舟を描いた2点（佐藤1981）が出土している。時期は伊場第3期～久山式のものである。

3. 穿孔土器

煮あるいは鉢の胴下部や底部に、外面（まれに内面）から小孔を穿った、いわゆる穿孔土器が15点出土した。これらについても、まず、器種、穿孔部位、穿孔の大きさ、出土遺構・層位について表示する。

この表でも明らかなように器種では壺が圧倒的に多く、（895）の底部穿孔の鉢を除き、すべて壺であった。壺では広口壺が多く、なかでもB1が目立つ。

穿孔部位は胴下部、しかも底部に近いものが多い。胴中位にくるものも2点あるが、内1点は穿孔部の大きさが径8cm余もある尾張などで良く見られる円窓付土器に近いものである。底部穿孔は広口壺（9）と鉢の2点である。穿孔は上記した円窓風の1点を除き、径1cm程度で、焼成後に锐利な利器によって多くは外側からあけている。

次に出土状況についてみてみよう。表でも明らかのように、出土遺構、層位については、環濠内出土のものが圧倒的に多いということはいえども、それ以上の関連性を見い出すことはできなかった。これは環濠を主な抽出遺構とし、他の遺構出土土器（たとえば、方形周溝墓・土壙・小穴等）のすべてを検査しなかったことにもよる。従って、穿孔土器が実用を否定した仮器であるということ、そしてこれらの多くが埋葬・祭祀等の供獻物として利用されている事実からすれば今後、北別区、西別区とよぶ方形周溝墓群はじめ、土壙、小穴内の出土土器の分析が進めば、その数はいま少し増える可能性はある。

時期としては、後述する伊場第1期・2期のものが多い。（辰巳 均）

第3章 地点別出土土器の分析

第1節 出土土器の分析結果について

地点別出土土器の分析に先立ち、遺跡全体における出土土器の分析結果を報告する。

1. 器種構成

『六条山遺跡』（久野・寺沢1980）の報告以後、各遺跡および各遺構における器種構成に注目し、その分析を行った報告も數みられるようになってきた。確かに、壺・壺・高杯等の比率は、弥生時代の中期と後期の間に明らかな差異が認められるし、こうした徹底した統計処理は、そこに住んだ人々の生産・消費・精神生活を明らかにするうえで、重要な手掛りをあたえてくれる。また、地点別・遺構別の分析も、たとえば高杯の高率化等からは、祭祀の側面が予想されるように、地点、遺構等の性格解明にも役立つ。本報告においても、こうした意味から各地点における器種比率を調べてみた。以下その結果について報告する。

まず最初に、遺跡全体における器種構成についてみていく。伊場遺跡において確認された器種は、周辺の一般弥生時代後期遺跡と同様、壺、甕、高杯、鉢、片口の5器種であった。各器種の累計方法は、壺の場合、底部が1/2以上残存するもの、甕・高杯については胸部と胴部（杯部）の接合部がやはり1/2以上残るものと1個体として数えた。また、鉢・片口については、破片である場合壺との区別がつかず、従って全体の形のわかる場合のみ数に加えた。

さて、こうして分析した地点資料は、後述する11地点によるものであり、それは遺跡全体の1/2の面積、弥生土器総数の2/3にわたるものである。この11地点出土弥生土器の総数は、3,758点であり、その器種構成は、

第7表 地区別の器種比率

地区名	壺	甕	高坏	鉢	片口	計	器種別比率			
A群 (A10区YT1)	67 33%	57 28%	58 28%	22 11%	0	204 100%	壺	甕	高坏	鉢
B群 (B10区YT1)	25 54%	10 22%	9 20%	2 4%	0	46 100%	●	●	●	●
C群 (A10区YT2東縁)	5 55%	1 11%	1 11%	2 23%	0	9 100%	●	●	●	●
D群 (A10区YT9西縁)	232 33%	204 30%	240 35%	15 2%	2	693 100%	●	●	●	●
A10区・B10区 YT2	250 45%	128 23%	162 29%	11 2%	2	553 100%	●	●	●	●
B10区 YT9	6 40%	3 20%	6 40%	0	0	15 100%	●	●	●	●
A B10区 YT9西縁	29 30%	37 37%	30 31%	2 2%	0	98 100%	●	●	●	●
A10区・B10区 環濠上面	52 39%	25 19%	52 39%	3 2%	0	132 100%	●	●	●	●
B12区・B13区 YT7一下層	236 43%	136 24%	179 32%	6 1%	1	558 100%	●	●	●	●
B12区・B13区 YT7一中・上層	283 45%	133 21%	209 33%	7 1%	0	632 100%	●	●	●	●
B12区・B13区 YT7	21 54%	3 8%	6 15%	7 18%	2	39 100%	●	●	●	●
B12区・B13区 YT6一下層	56 58%	19 20%	20 20%	0	2	97 100%	●	●	●	●
B12区・B13区 YT6一上層	33 45%	16 22%	23 31%	2 2%	0	74 100%	●	●	●	●
B12区・B13区 YT6	4 100%	0	0	0	0	4 100%	●	●	●	●
B12区・B13区 YT8	35 27%	55 42%	39 30%	1 1%	0	130 100%	●	●	●	●
A13区・B13区 環濠外下層	110 40%	64 23%	95 35%	4 1%	0	273 100%	●	●	●	●
A13区・B13区 環濠外中・上層	79 39.5%	47 23.5%	61 30.5%	10 5%	3 1.5%	200 100%	●	●	●	●
分析地點 計	1523 40%	938 25%	1190 32%	94 2.5%	12 0.5%	3757 100%	壺	甕	高坏	鉢

第8表 伊場遺跡周辺の主な弥生遺跡における器種比率表

中期 後半	壺 甕 高环	小笠郡菊川町 白岩遺跡	浜名郡新居町 一里田遺跡	愛知県豊橋市 瓜郷遺跡・中層第2様式
		4.6%	4.4%	9.1%
		4.3%	5.2%	3.0%
後期 前半	壺 甕 高环	磐田市 二之宮遺跡	袋井市 鶴松遺跡	愛知県豊橋市 瓜郷遺跡・上層第1様式
		4.4%	5.9%	6.8%
		3.4%	1.8%	1.4%
後期 後半	壺 甕 高环	浜松市 椿野遺跡	浜松市 三和町遺跡	愛知県宝飯郡小坂井町 欠山第Ⅱ貝塚
		5.2%	5.3%	4.1%
		2.5%	2.6%	4.0%
		2.3%	2.1%	1.9%

壺1,523点(40.6%)、甕938点(25%)、高环1,190点(32%)、鉢94点(2.5%)、片口13点(0.5%)であった。第7表には、この地点別の器種構成を示した。

伊場遺跡全体の器種構成は以上の通りであるが、それでは周辺遺跡における器種構成と比較してみた場合、どのようなことが言えるであろうか。幸いなことに周辺遺跡の器種比率については、「森町考古」18号(鈴木1983)で鈴木氏がいくつかの遺跡を分析したものがある。これを再録させてもらおう。

これらのうち、椿野遺跡、三和町遺跡、欠山遺跡を除く遺跡については、報告書記載の底部および口縁部の比率より鈴木氏が算出した数字で、実際とはやや異なるかも知れないが傾向は示していよう。

これによれば、菊川町白岩遺跡、新居町一里田遺跡等、弥生時代中期後葉の遺跡の場合、甕の比率が壺とほぼ同数とかなり高率であるのに対し、高环はいずれも10%以下と、まだほとんど盛行していないことがわかる。それが、弥生時代後期の遺跡になると、高环の比率が20~30%とかなり高率となり、その分壺の比率が下がり、高环より低率となるという大きな変化が看取される。この土器比率の違いは、この地域の弥生時代中期社会が、高环等を使用する祭祀的側面あるいは食生活段階に至らず、より主体的な日常容器である壺・甕を主体とする段階であるのに対し、弥生時代後期社会に入ると、高环や鉢等を使用する祭祀、あるいは食生活変化等が行ったことによるのであろう。

伊場遺跡の場合も、この意味において、明らかに弥生時代後期の遺跡の器種比率を示していた。

また、弥生時代後期の遺跡になると、前半と後半の遺跡の間に、土器比率のうえで明確な差違が見いだせなかった。これは弥生時代後期の前半と後半の間に、生活や祭祀等の上に大きなエポックがなかったことを窺わせる。こうした結果は、たとえば伊場遺跡においても、当初の予測としては、これら出土土器を地点別、層位別に仔細に分析していけば、下層と上層の間に器種比率の差がみられ、それらがひいては時期差を決定する目安にもなるのではないかとの予測に対し、両者の間にはほとんど差が認められなかつたという結果からもいえる。

2. 器種組成

地点別出土土器の分析に先立ち、遺跡全体の器種組成をまずみることにしよう。

a. 壺

壺は総数(分析地点内)1,523点を数える。このうち別図版にのせた522点については形式的分類が可能だ

が、残り1,000点余りについては、受口壺や広口壺を除いて形式不明である。壺は広口壺（226点）が圧倒的に多く、胴部・小型胴部を除くと、全体の半数以上を占める。ついで、小型広口壺（33点）、長頸壺（30点）、短頸壺（23点）等が有力器種だが、壺全体の比率からすれば極めて低い。

受口壺 総数18点（2.7%—この数字は別冊図版に実測図をのせた壺522点中の比率である。以下壺・甕・高杯・鉢・片口の各形式とも同じ）と壺全体の比率からすれば極めて低い。ただ受口という形態は他形式と比べ、目立つため比率以上に目についた。また、完形品が多くみられた。A群等環濠下層からの出土例が多く、古い様相を示す土器である。

広口壺 広口壺は226点（43.3%）とかなり多い。口縁部の形態に注目した分析結果でも総数610点（この数字は口縁部破片から割り出した数であって実数ではない。以下同じ）とかなりの数がみられ、壺全体の半数以上を示することはまちがいない。広口壺の中では、広口壺Bが93点（17.7%）、広口壺Fが50点（9.6%）と、この2つの形式が主体を占める。残る形式は、広口壺A 9点（1.8%）、広口壺C 26点（4.9%）、広口壺D 25点（4.8%）、広口壺E 23点（4.5%）で、その占める割合は低い。しかし出土層位等を考慮に入れるならば、広口壺B・C・Fが環濠上下層のどの層からも同じような比率で出土するのに対し、広口壺D・Eは環濠上層から出土する例が多く、この層中では高い比率を占めていた。

小型広口壺 総数33点（6.3%）と、比較的目立つ形である。内訳は、小型広口壺A 11点（2.1%）、小型広口壺B 14点（2.7%）、小型広口壺C 8点（1.6%）である。

小型壺 小型の壺のうち、小型広口壺に入らなかったものをA類からC類までに分類したが、総数は15点（2.9%）と壺全体に占める割合は低い。内訳は小型壺A 2点（0.4%）、小型壺B 5点（1.0%）、小型壺C 8点（1.5%）である。

壺 壺は17点（3.3%）が出土した。壺全体の比率からすれば低いが、形態的特徴あるいは後述する伊場第Ⅲ期を構成する器種の1つと注目していたこともあって比較的目についた。上層出土のものが多く、出土弥生土器の中では明らかに新しい段階のものである。

長頸壺 長頸壺は総数30点（5.7%）と比較的目立つ形である。長頸壺A 15点（2.9%）と長頸壺B 14点（2.7%）で大半を占め、西からの搬入品である長頸壺Cは1点（0.2%）がみられただけである。

脚付長頸壺 わずか1点（0.2%）だけの特異な例である。

ひさご壺 やはり1点（0.2%）だけである。ひさご壺は欠山式の力行な構成要素の1つであって、この時期の遺跡からは、もう少し高い比率で出土するものだが、予想外に少なかった。

短頸壺 短頸壺は総数23点（4.4%）と壺全体に占める割合は低い。短頸壺B・C・Dが5~8点、短頸壺A・E・Fはさらに少なく、1~2点があるだけである。

無頸壺 わずか4点（0.8%）と出土する数は極めて少ない。

蓋 蓋の出土も少ない。蓋Cが2点ある他はいずれも1点で、計5点があるだけである。

胴部 口縁部が欠損する胴部の破片、中・大型壺胴部93点（17.3%）、小型壺胴部57点（10.9%）を実測した。中・大型壺胴部ではI・IV類が多く、II・III類がやや少なかった。また小型壺胴部ではI・III類が多く、II類がかなり少なかった。この他に壺の脚台部と思われる破片が3点程みられたが、壺形態は明らかでない。

b. 甕

甕は総数（分析地点内）938点が認められた。これもやはり別冊図版に図示した157点については形式分類が可能だが、残る800点余りは形式不明である。したがって甕以上に傾向的なことしかわからぬかも知れないがみていくことにしよう。

甕には脚台部が付くもの（甕A～甕E）と付かぬもの（甕F～甕H）がある。後者は各形式各1点とごく少量であって、存在を確認しうる程度である。残るすべてが脚台部の付く甕となる。図示した資料では脚台部の破片が39点（25.8%）あり、残る100点余りが形式のわかる甕である。次に各形式における比率をみよう。

壺Aは30点（19.7%）とかなり有力な器種である。とりわけA群からは12点が出土しており、A群・B群等では主体を占める器種である。壺Bも壺Aと同数の30点（19.7%）が出土した。A群・B群や清下層からも少量出土するが、主体となって出土するのは土壌上に集積したD群（18点）からである。壺Cは32点（21.2%）と壺A・Bとはほぼ同数が認められる。壺Cは壺BとともにD群から大半の24点が出土した。壺Dは6点（3.9%）と数少ない。上層出土のものが多く新しい段階のものと思われる。壺Eは2点（1.4%）があるだけである。脚台部の付かない壺F・G・Hについては、前述したように各1点が認められただけである。

壺脚台部については、凸帯の付かない脚台部①が20点、凸帯の付く脚台部②が17点とほぼ同数あり、諸付凸帯の付く脚台部③はわずか2点がみられただけである。

c. 高 坏

高坏は総数（分析地点内）1,190点と甕を上回る数がある。図示した資料は脚部破片65点を含む145点である。高坏は坏部・脚部形態で分類したため、破片においても、ある程度の形式分類が可能であった。それでは各形式ごとにみていくことにしよう。

高坏Aは1点のみである。西からの搬入品である可能性が強い。高坏Bは39点（27%）、分析結果でも390点が認められ、高坏の大半を占める形式である。中でも高坏B2は約半数を占め、最も一般的な形式である。この高坏Bは地点や層位に関係なく、ほぼ万遍なく出土する。高坏Cは10点（6.9%）、また分析結果でも9点と高坏全体に占める割合は低い。これらは上層から出土する例が多く、新しい時期の遺物といえる。高坏Dは図示した資料は11点（7.6%）であるが、分析結果では73点があり、高坏Bにつぐ形式である。この形式も、地点、層位に関係なく、ほぼ万遍なく出土する。高坏Eは2点があるだけである。これは特異な例としてあつかったほうが多いかも知れない。高坏Fは図示した資料8点（5.5%）、分析結果でも66点があり、前述した高坏Dとともに、高坏Bにつぐ形式となる。出土層位としては、下層より出土することは少なく、中層および上層から出土する。高坏Gは、パンタロン等と呼ばれる非常に変った形の高坏で、抽出段階でも見落すことほとんどない。それでも抽出し図示し得た資料5点（3.5%）、分析結果でも歎例が認められるだけと数少ない。この高坏も下層から出土することは少なく、主に中層から出土している。高坏Hは中遠地域からの搬入品である。図示した資料5点（3.5%）、分析結果でも16点がみとめられた。

脚部破片では、脚Aが47点（27.1%）、分析結果でも266点と大半を占める。脚B～Fは図示した資料で3～5点、分析結果でも20点程が認められるだけである。

d. 鉢

鉢は総数（分析地点内）94点とかなり少ない。前述したように底部破片は壺とまったく区別がつかないため、分析作業においては、口縁部形態が明らかに鉢であるものについて、統計をとってみた。以下、この結果も合わせてみていくことにしよう。

まず鉢Aは5点（4.7%）と数少ないが、分析結果では25点が認められるなど比較的良く見られる形式である。これらは清下層から出土する例が多い。鉢Bは31点（29.2%）、分析結果でも28点があり、鉢の中では主体を占める形式である。中でも鉢B1は図示できた資料でも24点（22.6%）があり、かなり目立つ。鉢Cは19点（17.8%）、分析結果16点、鉢Dは13点（12.3%）、分析結果17点が出土している。鉢Bから鉢Dは層の上下に関係なく出土する。鉢E～鉢Gはともに口縁部を折り返したり、折り曲げたりしない形式のものであるが、これらは鉢Eが10点（9.5%）、分析結果2点、鉢Fが3点（2.8%）、鉢Gが1点（0.9%）と鉢全体に占める割合は極めて低い。また、台付鉢は24点あるが、内19点が台付鉢Aで、台付鉢B・C・Dはいずれも1、2点がみられるだけであった。これら台付鉢は、在地品というより西からの搬入品、もしくは搬入品を模して作られた品と考えられる。

e. 片 口

総数（分析地点内）13点と極めて少ない。内訳は片口A 8点、片口B 4点、台付片口A 1点である。中・上層

からの出土例が多い。

第2節 地点別出土土器の分析

1. A群 (A10区 YT 1)

a. 出土状態

A10区YT1は、幅が1m程と狭く、深さも30cm～40cmと浅い。溝の掘削時期は明確ではないが、YT2=YT6とはほぼ同時期で、YT9に先行すると考えられている（浜松市博編1977）。土器の出土状態は、多くの土器がほぼ完形に近い状態で、溝底面に並ぶような状態で出土した（写真図版第1A・別冊図版第1）。また溝内堆積土は、D層の中では最も下層にあるD3層が主に堆積しており、次のD1層・D2層の堆積時には、すでに溝としての役目を終えていたと考えられている。したがって、このA群出土土器は、伊場遺跡出土の弥生土器の中では最も古い様相を示す土器群といえる。

b. 器種構成

A群出土の土器総数は204点である。器種別内訳は、壺67点（33%）、鉢22点（11%）、甕57点（28%）、高環58点（28%）である。このうち鉢は、形が明らかな数であって、前述したように、鉢は底部破片の場合、壺との区別がつかず、従って統計処理では壺に含めて数えている。A群の場合も、壺・鉢合せると89点（44%）となり、これは全体の器種比率に近い。A群の場合、甕の比率がやや高く、その分高環が少ないといふことがいえる。

c. 器種組成、文様、技法・手法

壺

器種組成：受口壺は數は少ないが、すべての形式が認められた。広口壺は主体となる器種で、完形品ではB1が5点、Dが1点みられるだけであるが、口縁部破片では、分析結果を含めると、A、B、Fがいずれも20点余りあり、主体を占める形式であることが知られた。この他、小型広口壺B2、長頸壺B、短頸壺Cが各1点みられた。胴部破片では、下脚部に種が付く無花果形をしたもの（脚部I）が数点ある。

文様：文様については、図示できなかった資料（破片）の中にも、様々な組み合せのものが認められた。ただこれらは破片であって全体の知れるものは少ない。従って、ここでは図示した資料を中心に述べる。図示した資料は全体からみればごく一部だが、傾向は示しているよう（以下、各地点とも同じ要領で述べる）。

A群出土七土器の場合、口縁部および胴部いずれかに文様が認められるものが大半を占める。口縁部・胴部破片が多いため、全体の比率を示すのは難しいが、中型土器に限っていえば、無文は（20）の1点だけであった。それでは、口縁部・胴部にはどのような文様が施されているかみていくことにしよう。まず口縁部文様については、受口壺では約半数のものに文様が認められた。文様は縄文や押圧横線文といった、この形態のものではあまり見かけない文様が施されていた。広口壺を除むる口縁部は図示した中に20点あるが、内15点に文様が認められた。文様は広口壺Aが口縁部に施す他は、刻目だけの2点を除き、すべて内面に施されていた。文様は波状文1、2条施す例が最も多く6点。他に扇形文、刺突羽状文、刺突文A・B、縄文を施した文様等がみられた。

胴部文様では前述した柳描文Ⅰを基本としたものが大半を占め、しかも文様帶5帯以上の幅広い範囲に施文されるものが数多くみられた。また、文様拓影図としてあげた（958）のように綫型流文を施したものや、文様Ⅶとした逆U字文を描く文様のものもみられた。（17）のように刺突文を施した柳描文Ⅲによる文様は数少なかった。なお、この群出土土器に施された波状文は、第2章第4節で波状文①とした比較的均整のとれているものが多かった。扇形文は扇を開いた状態のような、大きな単位のものが多くみられた。

技法・手法：口縁部の処理手法および底部形態についてみてみよう。まず口縁部の処理手法については、たとえばa手法のものを広口壺A、d手法ものを広口壺Fというように形態分類に生かした。b・c手法は、上記2形式を除くすべての器種にみられる手法で、器種によって若干の差はあるものの、傾向としては、c手法は新し

第9表(1) 壺(各形態別)の地点累計表

		A群 (A10% Y1)	B群 (B10% Y1)	C群 (C10% Y1)	D群 (D10% Y1)	A10%Y1区 Y1T2重複 Y1T2西側	B10%Y1区 Y1T7-F区	B10%Y1区 Y1T7-F区	B10%Y1区 Y1T6-Y区	B10%Y1区 Y1T6-Y区	A10%Y1区 Y1T6-Y区	A10%Y1区 Y1T6-Y区	その他	計
受 口 壺	A	2											2	4点(0.8%)
	A ₁	1(1)		①	1				1			①	2	6点(1.1%)
	B	1					②	1				1	3点(0.6%)	
広 壺	C	1①											1点(0.2%)	
	A ₁	2			2							2	2点(0.4%)	
	A ₂	1③			⑩	28	⑦	⑥	③	1③	④	1④	2点(0.4%)	
口 壺	B ₁	4	7	1	1	6						11	30点(5.7%)	
	B ₂	4	1	6	1	1						9	16点(3.1%)	
	B ₃	1			7	2	1					1	4点(0.8%)	
広 壺	B ₄	④	1	⑩	5	⑩	2	⑩	⑩	⑦	④	⑩	8	18点(3.4%)
	C ₁	2	1	4	5	1						1	1点(0.2%)	
	C ₂	①	③	1	2	①	3⑩	⑩	④	1②	⑩	3④	10点(1.9%)	
口 壺	D ₁	1					2					1	4点(0.8%)	
	D ₂			2	1	3	1					1	1点(0.2%)	
	D ₃	①	3	⑤	1	②	①	1④	2	①	1	2	9点(1.7%)	
広 壺	E ₁	1										2	3点(0.6%)	
	E ₂			1	7		2					1	3点(0.6%)	
	E ₃	②	⑩	⑩	⑩	⑥	⑧	①		⑩	1	3⑤	12点(2.3%)	
口 壺	F ₁	1			1	1						3	6点(1.1%)	
	F ₂	7			6	9	2					3	3点(0.6%)	
	F ₃	⑦	⑤	⑦	3	⑩	⑩	1⑩	③	⑥	⑩	4	24点(4.4%)	
広 壺	F ₄	17	⑤	⑦	3	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	1	5点(1.0%)	
	A ₁	3		1	1							3	8点(1.5%)	
	A ₂			1								1	2点(0.4%)	
小型 広 壺	A ₃		1										1点(0.2%)	
	B ₁				1		1					4	6点(1.1%)	
	B ₂	1				3			1			5	1点(0.6%)	
口 壺	B ₃					1	1					1	3点(0.6%)	
	C ₁											1	1点(0.2%)	
	C ₂											2	4点(0.8%)	
小型 壺	C ₃											3	3点(0.6%)	
	A											2	2点(0.4%)	
	B											4	5点(1.0%)	
小 型 壺	C		1			1	1					4	8点(1.5%)	
	柑			4	2	1	1		1			4	4点(0.8%)	
												7	17点(3.3%)	
長 頸 壺	A				1	3						4	7点(2.9%)	
	B	1				1			1	2	1	8	14点(2.7%)	
	C			1								1	1点(0.2%)	

第9表(2)

脚付長頸壺									1	1点(0.2%)
ひさご壺									1	1点(0.2%)
短 頸 壺	A				1	1			1	3点(0.6%)
	B		3	2					3	8点(1.5%)
	C	1		1					2	4点(0.8%)
	D			1	2				3	6点(1.1%)
	E					1			1	1点(0.2%)
	F								1	1点(0.2%)
無頸壺									3	4点(0.8%)
蓋	A							1		1点(0.2%)
	B							1		1点(0.2%)
	C		1						1	2点(0.4%)
	D								1	1点(0.2%)
胸 部	I	2	2		1	1	2	1	1	27点(5.2%)
	II				1	1	5		2	22点(4.2%)
	III		2		1	1	2		1	6点(2.7%)
	IV		1		1	7		2	1	30点(5.7%)
小 型 器 種	I		1			1			2	16点(3.1%)
	II				1					4点(1.1%)
	III	1			5	4	1	4	5	13点(6.3%)

※○の数字は、口縁部形態等をもとにした分析結果で、各形態数下段に、その形態の合計を示した。

計 522点

他是別冊図版に実測図をのせた資料による数値である。

い時期にみられる手法のようである。A群の土器は、前述したようにa手法(広口壺A)とd手法(広口壺F)をもつ事がかなりみられた。また、残る器種については、すべてb手法で処理されていた。

底部形態は、わずかに突出する程度で胸部から底部へはスムーズに移行するものばかりであった。突出するものや丸底風になるものはない。底面の形態は、分析結果を含めると、平底38点、ドーナツ底16点、あげ底1点、不明12点となる。木炭痕の残るものはない。なお、肩部文様における施文法や回転台の使用についての問題等は、第4章で詳述される予定であるので、ここではふれない。

要

器種組成：器形がわかるものではA1が大多数(12点)を占める。A2が2点、B1・B2・B4も各1点ある。肩部球形のC類、長胴形のD類があたらない点は注目される。

技法・手法：胸部と脚部の接合部の凸帯の有無についてみると、分析結果を含めると、凸帯の付かぬもの(脚部①)16点、凸帯の付くもの(脚部②)21点となり、凸帯の付くものがやや多い。

高 坏

器種組成：器形のわかるものでは、B類の中で最もオーソドックスなB2が4点、それにB9が1点みられただけである。分析結果ではBが大半の25点、他にD7点、F・Hが各1点みられた。また、脚部においては、脚Aが35点と大半を占め、他に脚D・E・Fが少量認められた。

文様：図示した資料では、坏部に文様がみられるものはなかった。脚部では約半数を占める脚Aのすべてに文様が認められた。文様は直線文と刺突文Aを組み合せた文様が数多く(5点)、他に直線文だけの文様も3点認められた。脚Dにもやはり直線文と刺突文Aを組み合せた文様が、半数のものに認められた。脚Fには坏部との境に押圧横線文、脚下部に繩文が施されていた。

技法・手法：坏部・脚部破片の中に、接合法の1つである円盤充填法による円盤のはがれ痕の残るものが何点

第10表 磁(各形態別)の地点別累計表

	A群 (A10区 YT1)	B群 (B10区 YT1)	C群 (C10区 YT2)	D器 (D10区 YT2)	A10区 YT1	B10区 YT1	B10区 YT2	B10区 YT3	B10区 YT4	A10区 YT5	A10区 YT6	A10区 YT7	周辺部下層	周辺部中上層	その他	計
A	A1 12	4		1	1										6	25点(16.4%)
	A2 2					1									1	4点(2.6%)
	A3			1												1点(0.7%)
B	B1 1	1	1	11	1										5	20点(13.2%)
	B2 1				1										1	3点(2.0%)
	B3				5										1	6点(3.9%)
	B4 1															1点(0.7%)
	B5			1										1	2点(1.3%)	
	B6													1	1点(0.7%)	
C	C1			20	2										5	27点(17.8%)
	C2			3												3点(2.0%)
	C3			1												1点(0.7%)
	C4														1	1点(0.7%)
D	D1			1	1									1	1	4点(2.6%)
	D2			1											1	2点(1.3%)
E	E1			1												1点(0.7%)
	E2					1										1点(0.7%)
F	F1														1	1点(0.7%)
	F2															1点(0.7%)
G	G1				1											1点(0.7%)
	G2															1点(0.7%)
H	H1	1														1点(0.7%)
	H2															7点(4.6%)
東 西 脚 台 部	A 1	1			10	5									3	20点(13.2%)
	B				14	3										17点(11.2%)
	C				1									1	1点(1.3%)	

車別骨図版に実測図をのせた資料に限る。

計 152点

かみられた。また、A群の高杯は、脚端面を面取りしているもの（脚端面処理手法①）が多かった。

鉢・片口

器種組成：鉢A1とD1が各2点とC11点、それに台付鉢のA1が2点ある。その他、図示できなかった資料の中に、台付鉢Aの口縁部破片が15点余りある。片口はA3が1点認められただけである。

文様、技法・手法：鉢のA1(77)やC2(79)の口縁部外側には刺突文が認められた。また(79)の外面全面には丹影が施されていた。鉢底面の形態は平底3点、ドーナツ底1点であった。

2. B群 (B10区 YT1)

a. 出土状態

A群の北側の同一溝(YT1)から出土した土器群(写真図版第2A)である。A群と同一群として扱ってよいと思われたが、これらが第2次から第7次までの何回かの調査によって分断されて掘り出された資料であるため、厳密さを期す意味で別群として分析することにした。溝はA10区と比べ溝幅も広くなり、深さもやや深くなる。遺物はやはり完形もしくは完形に近い状態で出土するものが多い。ただ、遺物は北に向って疊になる傾向にある。

b. 器種構成

出土总数は46点と少ないが、その多くは完形に近い状態で出土した。器種別内訳は壺25点(54%)、鉢2点

第11表 高坏(各形態別)の地点別累計表

	A部 (A10% YT1)	B部 (B10% YT1)	C部 (C10% YT2)	D部 (D10% YT2)	A10% D10% YT2	B12% D10% YT2-F	B12% D10% YT2-中-S	B12% D10% YT2-下-S	B12% D10% YT2-中-L	A10% B10% YT2-L	A10% B10% YT2-U	その他	計
高 坏	A				1①								1点(0.7%)
	B ₁			2	1	1							4点(2.8%)
	B ₂	4		4	2		1				1	4	16点(11.0%)
	B ₃			1							1	4	6点(4.1%)
	B ₄			2								2	4点(2.8%)
	B ₅			3									3点(2.1%)
	B ₆										1	1点(0.7%)	
	B ₇										1	1点(0.7%)	
	B ₈		1										1点(0.7%)
	B ₉	1②	②	①	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	20点(3.点(2.1%)
坏 环	C ₁						1					1	2点(1.4%)
	C ₂			1									1点(0.7%)
	C ₃			1	①	④				2②	1	2	6点(4.1%)
	C ₄			①						1		①	1点(0.7%)
	D ₁		1	1	2							1	5点(3.4%)
	D ₂					1						1	4点(2.8%)
	D ₃	⑦	①	①	2⑥	⑤	⑨	⑦	①	①	⑩		②点(1.4%)
	E				1	1							2点(1.4%)
	F ₁			3								2	5点(3.4%)
	F ₂	①	②	2⑤	⑭	③	④	②	②	①	②	⑤	2点(1.4%)
高 脚 部	G ₁			3									3点(2.1%)
	G ₂											1	1点(0.7%)
	G ₃				①							1	1点(0.7%)
	H ₁			1									1点(0.7%)
	H ₂	①		①	②	1①	⑧		①			3	4点(2.8%)
	A ₁				1								1点(0.7%)
	A ₂	7		15	4						1	3	30点(20.7%)
	A ₃			4								2	6点(4.1%)
	A ₄	1										1	2点(1.4%)
	A ₅	1⑩	①	⑤	④	⑧	⑨	⑩	④	③	⑨	⑬	1点(0.7%)
脚 部	B ₁	1			1								2点(1.4%)
	B ₂			1									1点(0.7%)
	C ₁			2									2点(1.4%)
	C ₂										1	1点(0.7%)	
	D	1	1		3							2	7点(4.8%)
E	2				1						1	1	4点(2.8%)
	F	2			2		1				1	2	8点(5.5%)

※○の数字は分析結果、記載方法は蓋と同じ。

計 145点

第12表 鉢(各形態別)の地点別累計表

		A	B	C	D	A10区 (YT1)	B10区 (YT1)	C10区 (YT2)	D10区 (YT2)	A10区B10区 (YT1+YT2)	B10区B10区 (YT1+YT2)	B10区B10区 (YT1+YT2)	B10区B10区 (YT1+YT2)	B10区B10区 (YT1+YT2)	B10区B10区 (YT1+YT2)	B10区B10区 (YT1+YT2)	その他	計
鉢	A	A ₁	2	1							1						1	5点(4.7%)
	A	A ₂	⑯		①	②				①		①	①	④			1	1点(0.9%)
	B	B ₁		1	4	4	2	1					2	3	6	23点(21.7%)		
	B	B ₂		1			1	1							1	4点(3.8%)		
	B	B ₃			⑤	③	④	⑧			①	⑤			3	3点(2.8%)		
	C	C ₁	1		1	4	1				1			1	2	10点(9.4%)		
	C	C ₂			1	2		2				⑦			2	8点(7.5%)		
	C	C ₃			1	④		③							1	1点(0.9%)		
	D	D ₁	2	①		③	⑥	2	②			1	⑤	2	6	13点(12.3%)		
	E	E ₁				1									4	4点(3.8%)		
台付鉢	E	E ₂										1	1	1	1	4点(3.8%)		
	E	E ₃					⑧							1	1	2点(1.9%)		
	F				2										1	3点(2.8%)		
	G														1	1点(0.9%)		
	H	H ₁	2			2	3	1	2						2	12点(11.3%)		
A	A	A ₂					1	1	1						2	5点(4.7%)		
	A	A ₃				③	②								2	2点(1.9%)		
	B											1			1	1点(0.9%)		
	C					1								1	2点(1.9%)			
D	D													2	2点(1.9%)			

※○の数字は分析結果、記載方法は壺と同じ。

計 106点

(4%), 豊10点(22%), 高杯9点(20%)である。全体の器種比率と比べ、壺が高く、豊・高杯の比率が低いといえる。ただ、出土総数が少ないのであまり参考にはならない。

c. 器種組成、文様、手法・技法

壺

器種組成：主体となるのは広口壺B1で光彫品にして7点がある。この他、数は少ないが広口壺B3、広口壺B4、広口壺F1、小型広口壺A1等がみられた。胴部破片を含めて、下脚部に明瞭な稜が付く無花果形をした形態をとるもの(胴部I)が多い点は、時期差を表すものとして注目された。また(91)のように中迫地城の二ノ宮式の壺も含まれており、併出関係を知るうえで注目された。

文様：中型土器の(90)と小型土器の(98)、(99)を除くすべてに文様が認められるなど、有文土器の占める割合は極めて高かった。それでは口縁部の文様からみていくことにしよう。口縁部は、13点中10点に文様が認められた。内面に文様が付く例は6点あり、これには波状文、扁形文、繩文等が認められた。この他では口唇部に浮文を貼付したものや刺突文を施したものなどがみられた。胴部文様では、柳編文Ⅰによるもの6点、柳編文Ⅱによるもの4点とこの両文様が主体を占め、この他に(94)のような繩文やⅣ8(88)、Ⅳ8(94)のような文様も認められた。文様帶としては、いずれも4帯以上を施した幅広いものであった。

技法・手法：口縁部の処理手法については、d手法の広口壺Fを除いて、残る器種はすべてb手法によって処理されていた。これは前述したA群と同じである。

底部形態は(89)が突出した作りをする他は、いずれもごくわずかに突出する程度で、胴部から底部へスムーズに移行するものばかりであった。底面の形態は、底面が明らかな20点中、平底13点、ドーナツ底6点、あげ底1点であった。木葉痕の付くものはない。(84)は底部を穿孔している。

第13表 片口(各形態別)の地点別累計表

		A 群 (A10区) YT 1	B 群 (B10区) YT 1	C 群 (C10区) YT 2 東縁	D 群 (D10区) YT 2 西縁	A10区 B10区 YT 2	B10区 B10区 YT 2-下縁	B10区 B10区 YT 2-中-下縁	B10区 B10区 YT 2-中-上縁	B10区 B10区 YT 2-上縁	A10区 B10区 YT 2-外下縁	A10区 B10区 YT 2-外上縁	その他	計
片口	A	A ₁				1							1点(8.3%)	
	A	A ₂			1		1①	1				1	4点(33.3%)	
	A	①			1							1	2点(16.7%)	
	B	B ₁				1						1	3点(25.0%)	
合計片口A												1	1点(8.3%)	

※○の数字は分析結果、記載方法は壹と同じ。

計12点

壺

器種組成：数は少ないが、A群と同じくA1が主体（4点）を占める。他にB1が1点と脚部の付かない壺Hの完形品が1点ある。やはり壺C・Dはみられない。

技法・手法：口唇部はいずれもしっかり面取りして、その後刻目を施すものは施している。（104）の胴部外面は珍しく、鐘状器具でナデ整形し、ハケメを消している。また、胴部内面を板状器具でナデ調整しているものも多い。接合部のわかるものは11点あるが、凸凹の付かぬもの（脚部①）8点、付くもの（脚部②）3点という内訳である。

高杯

器種組成：完形品になるものはない。壺部は図示したB（108）の他に、B2点とD1点が認められただけである。脚部は脚A4・B1・Dが各1点みられるだけである。傾向的なことはわからない。

文様：（109）にあげた脚部にのみ文様が認められた。これは脚上部に直線文が8条にわたって施されていた。他は無文である。

技法・手法：（109）には接合法の1つである円盤充填法を示す、円板の剥れた跡が認められた。脚端面はしっかりした面を作るもの（脚端面処理手法①）が多い。

鉢

器種組成：A1とB2が各1点ずつみられた。

文様：（112）にあげた鉢A1は、鉢としては珍しく、口縁部と胴部両面に文様が認められた。口縁部外面は刺突文、胴部には直線文と扇形文が施されている。

技法・手法：底面は（112）が平底、（113）がドーナツ底であった。木葉痕の付くものはない。

3. C群（A10区 YT 2 東縁）

a. 出土状態

A10区のYT2とYT9の土堤上から出土した土器である（写真図版第2A・別冊図版第1）。後述するD群が、YT9の堆積がある程度進んだ段階で、その西縁に並び置かれたような状態で出土するのに対し、C群はYT2の溝内遺物、それも中・上層遺物と連続する状態で出土したものである。

b. 器種構成

図示した遺物は、壹5点(55%)、甕・高杯各1点(各11%)、鉢2点(23%)の計9点である。他に若干の遺物はみられたが、YT2と連続する遺物として取り上げたので、群としての数値は明らかでない。参考のために、遺物台帳に基づいて同地域の土器を取り出して検討したところでは、壹42点、鉢2点、甕15点、高杯28点という数値が得られた。

第14表 壺胴部文様の地点別頻度表

I. 檻描文 I

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
A群 (A10区Y T 1)															2			1	1	2					
B群 (B10区Y T 1)														1	1				2						
D群 (A10区Y T 9西縁)						1	1	1	1	1	5	2	3						1	1			1		
B12区・B13区 Y T 7・下層											1		2	1	1	1							2		
B12区・B13区 Y T 7・中・上層											4			1	1	1	2					1			
A13区・B13区 環濠外下層															1										
A13区・B13区 環濠外中・上層													1			1						1			

II. 檻描文 II

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32		
A群 (A10区Y T 1)																																		1
B群 (B10区Y T 1)															1	1																	1	
D群 (A10区Y T 9西縁)						1	1	1	1	1	1																							
B12区・B13区 Y T 7・下層																1																		
B12区・B13区 Y T 7・中・上層																1	1																1	
A13区・B13区 環濠外下層																																		
A13区・B13区 環濠外中・上層																	1				1													

III. 檻描文 III

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
A群 (A10区Y T 1)											
B群 (B10区Y T 1)											
D群 (A10区Y T 9西縁)											
B12区・B13区 Y T 7・下層			2	1			1				
B12区・B13区 Y T 7・中・上層			1				1				
A13区・B13区 環濠外下層											
A13区・B13区 環濠外中・上層				2							

V. 竹管文を用いる文様

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
A群 (A10区Y T 1)									
B群 (B10区Y T 1)									
D群 (A10区Y T 9西縁)									
B12区・B13区 Y T 7・下層									
B12区・B13区 Y T 7・中・上層									
A13区・B13区 環濠外下層									
A13区・B13区 環濠外中・上層									

IV. 檻描文 IV

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
A群 (A10区Y T 1)											
B群 (B10区Y T 1)											
D群 (A10区Y T 9西縁)											
B12区・B13区 Y T 7・下層											
B12区・B13区 Y T 7・中・上層											
A13区・B13区 環濠外下層											
A13区・B13区 環濠外中・上層											

V. 繩文を用いる文様

	1	2	3	4	5	6	7	8
A群 (A10区Y T 1)								
B群 (B10区Y T 1)								
D群 (A10区Y T 9西縁)								
B12区・B13区 Y T 7・下層								
B12区・B13区 Y T 7・中・上層								
A13区・B13区 環濠外下層								
A13区・B13区 環濠外中・上層								

※別冊図版に実測図をのせた資料に限る。

c. 器種組成・文様・技法・手法

壺

器種組成：広口壺B2が1点、それと同タイプの胴部1点、それに同形をした広口壺C1が2点、胴部Ⅲ1点の計5点がある。

文様：広口壺B2と同形の胴部の場合、肩部に低い三角凸帯を1条施す他は無文である。同形をした広口壺C1の2点は、口縁部に文様を施すことはしないが、胴部には文様Ⅷ13とした刺突文Bと刷毛羽状文を組み合せた文様が幅広くつく。上器は在地品であるが、この文様構成は中道地域の二ノ宮式によくみられる文様である。胴部破片の(118)は無文である。

技法・手法：口唇部の残る3例はいずれも口唇部処理手法法bにより、しっかりとした面を作っている。底部は(118)がドーナツ底である他は、残る4点は平底である。木葉模の付着するものはない。

甌

器種組成：B1が1点あるだけである。

技法・手法：口唇部はしっかりとした面を作り、下端に刻口を入れている。胴部と脚台部との境には指頭圧痕の残る凸帯が付く。

高杯

器種組成：やはりD1が1点あるだけである。

文様：杯部は無文だが、脚部には横描直線文が2条にわたってみられる。円孔も3ヶ所に穿くが、これは直線文を施してから穿っている。

技法・手法：杯口唇部はしっかりとした面を作るが、脚端面は押えつけるように折り返して作っている。

鉢

器種組成：B1とC1の2種2点がみられる。共に無文である。

技法・手法：底部平底とドーナツ底各1点がみられた。木葉模の残るものはない。

4. D群(A10区YT9西縁)

a. 出土状態

A10区YT9西縁に集積していた上器群である。別冊図版第1に出上状態を示したが、平面図でみるとYT9溝内から出土しているように見えるが、実際はYT2とYT9がある程度埋没した後(YT9はすでに溝としての機能を終えていたと思われる)、YT9の西縁に集積したものである。集積状態は破片を単に破棄したというのではなく、完形品をなんらかの理由で並べ直したといった状態であった。また、この上器を櫻ってC層青灰色粘土層が推測しており、これら土器群はD層の中でも新しい時期に集積した土器群と考えられた。

b. 器種構成

土器は総数693点が出土した。内訳は壺232点(33%)、鉢17点(2%)、甌204点(30%)、高杯240点(35%)である。全体の器種比率と比べ、甌、鉢の比率が低く、その分壺、高杯が高比率となる。

c. 器種組成・文様・技法・手法

壺

器種組成：総数232点、内訳した資料は口縁部破片を含む61点である。以下、分析結果もふまえ器種組成をみていくことにしよう。まず、受口壺は図示した口縁部破片が1点あるだけで、D群出土土器ではほとんどみられなかった。次は広口壺、Aは図示した口縁部破片が2点あるだけではほとんどみられない。Bはやはりこでも主体となる形式であった。完形品はB1が1点、B4が5点の計6点であるが、口縁部破片は分析結果を含める46点が認められた。C・D・Eは口縁部破片も含めても10点程と数少ない。Fは図示した中にも8点、分析結果でも10点余があり、Bにつぐ形式であった。この他では小型広口壺Aが3点、小型甌C1点、壺がやや多く4

点、長頸壺C 1点、短頸壺B・C・Dで5点等が認められた。この群の1つの特徴として、中壺壺（広口壺）においても小型壺にしても、胴部形態が球形を呈するものが多いという点である。

文様：中型土器に限って文様の割合をみると、胴部有文23点（内12点は口縁部にも文様をもつ）、無文10点となり、A・B群と比べ、やや無文の割合が高くなる（胴部無文で口縁部のみに文様を施すものはほとんどない）。また、小型広口壺や壺等の小壺の壺の場合、有文5点、無文12点と無文土器の多いのはこの地域の弥生土器一般にいえることである。

それでは次に、口縁部文様と胴部文様についてみていくことにしよう。まず口縁部の文様としては、波状文を施したもののが圧倒的に多く、10点以上に認められた。この他の文様としては、扁形文、刺突文、押圧横線文、もしくはそれを組み合せた文様がみられた。胴部有文は中型土器においては23点があるが、これらの文様構成は櫛描文Iによるものが圧倒的に多く16点、この他、櫛描文IIによるもの4点、これには肩部凸帯と組み合わせて（158）のような、いわゆる有段刻形文を構成するものもある。また小型壺の文様としては櫛描文Iによるもの3点、縦文を施すもの2点等がある。胴部文様帶としては3～5帯のものが大半を占め、それも肩部付近の狭い範囲のもののが多かった。

技法・手法：口唇部の処理手法のうち、a手法（広口壺A）とd手法（広口壺F）を除く器種では、b手法とした面を作る手法が圧倒的に多くみられた。ただA・B群出土土器と比べ、作りはあくまで円頭状に近い作りのものが多くみられた。

底部形態は極端に突出するものではなく、大半はわずかに突出する程度で、胴部から底部へなだらかに移行していた。底面の形態は、平底112点、ドーナツ底33点、あげ底3点、不明84点という内訳であった。木葉底は平底に8点、ドーナツ底に3点が認められた。

窓

器種組成：窓は総数204点がある。そのうち脚台部を含めて74点を図示した。以下図示した資料を中心に器種組成をみていく。まずAはA1とA3が各1点と数少ない。BはB1が11点、B3が5点、B2・B5が各1点の計18点と、後述するCとともにこの群の主体を占める。そのCはC1が20点、C2が3点、C3が1点の計24点がある。この他D1、D2、E1が各1点が認められた。

技法・手法：口唇部は面を作るものがほとんどで、円頭状に作るものはわずか50点中5点に認められただけである。次に口縁部外側のヨコナデ整形についてみてみると、50点中ヨコナデが施されたもの30点、ハケだけのもの20点という結果が得られた。ヨコナデはどの器種に日々つといふのではなく、どの器種でもほぼ同じ割合で認められた。従ってヨコナデの有無によって器種差、時期差とすることはできないようと思えた。最後に、胴部と脚台部との接合部における凸帯の有無についてみてみると、凸帯の付かないもの（脚台部①）31点、凸帯の付くもの（脚台部②）55点、縫付凸帯がつくもの（脚台部③）2点、不明16点という結果であった。

高坏

器種組成：総数240点、内52点を図示した。器種別ではかなり多くの器種が認められた。最も多いのはBで、13点、分析結果でも42点が認められた。この他ではDが3点、分析結果6点、Fが5点、分析結果5点、G6点、H1点等が認められた。また、脚部については、脚A2・A4のようにラッパ状に大きく開く形態のものが主体であるのは他地区と異なるところではないが、D群において注目されたのは、脚A3や脚B2、あるいは高坏A2のように、ラッパ状に開いた脚部を、その下部で内湾窓状に作った形態の土器が数多くみられるようになってきたことである。

文様：坏部に文様が認められるのは、Bの坏部のみで、図示した中では6点に認められた。文様は、波状文、直線文、波状文と直線文の組み合せの3種が認められた。脚部に文様が施されたものは、全体の半数以上を占める。文様は脚Aや脚Bにおいては直線文を2～3条施しただけのものが多く、それに刺突文を加えるものは1例だけである。これは前述したA・B群の高坏と比べ、だいぶ異なる。脚Fや脚Gにはそれぞれの器種特有の文様

が施されていた。

技法・手法：D群山上の高坏は比較的多くを、復元・図示したこともあり、坏部と脚部の接合状態がわかるものが何点か認められた。実測図には成形法のわかるものについては、その状態を破線で示したが、この群のものは、坏部から脚部にかけて連續的に成形し、その後凹盤をうめ込んだ、凹盤充填法によるものがほとんどであった。次に脚端面の形態についてみると、脚Aのようにラッパ状に大きく開いた脚については、脚端面を押えつけるようにして折り返したもの（脚端面処理手法③）が数多くみられた。これは前述したA・B群が、脚端面処理手法③とした、しっかりした面を作っているのと比べ、違いが著しい。

鉢

器種組成：総数17点、内12点を図示した。形態のわかるものでは、Bが3点、Cが6点、台付鉢Aが2点ある。文様、技法・手法：鉢は口縁部外面に刺突羽形文を施したものが数多く認められた（6/9）。また（323）の口縁部外面には珍しく波状文が認められた。台付鉢の脚部には直線文と刺突文を組み合せた文様が認められた。次に鉢底面の形態についてみてみると、平底6点、ドーナツ底、あげ底各1点という結果が得られた。木葉模様が残存するものは無い。

5. A10区・B10区YT2

a. 出土状態

環濠のうち、早い段階に発掘を行ったA10区YT2は、C層（上層）とした層が薄く、そこから出土する土器も數少なかったこともあり、層位を厳密に区別けしないで遺物の取り上げを行った。このため、層序別の判組ができなかった。また、B10区YT2については、層序別の遺物取り上げを行ったが、いかんせん出土遺物が少なかった。そこで層序の混在は承知で、両地点出土土器を一括して判組した。従って、ここにあげた土器は、一時期の所産でないことはいうまでもない。

b. 器種構成

土器総数583点を数える。内訳は壺250点（45%）、鉢13点（2%）、甕128点（23%）、高坏162点（29%）である。この数値は全体の器種比率と比べ、甕の比率がやや高く、その分壺・高坏が低い。

c. 器種組成、文様、技法・手法

壺

器種組成：壺は総数250点（図示62点）がある。以下、分析結果も含めてみていくことにしよう。まず受口壺は、Bが1点と分析した中に2点の計3点がみられただけである。広口壺Aは図示した資料にはないが、分析結果では、28点が認められた。広口壺Bはそれぞれの数は少ないが、B3を除くすべての形式が認められた。図示した資料は口縁部を含めて39点、分析結果でも49点があり、壺の主体を占める。広口壺C・Dは完形品で2,3点、口縁部破片でも5,6点と数少ない。広口壺Eは完形となるものはないが、図示した中に口縁部破片7点、分析結果でも24点が認められた。形態別には新しい時期のものと考えられるが、明らかに上層から出土したものは数少ない。広口壺Fは、完形なるものは1点だけと少ないが、口縁部破片は分析結果を含め、45点と広口壺Bについて多かった。この他、小型広口壺は完形品が2点と、胴部破片数点がみられた。小型壺はない。坦は2点が認められた。卅とした（386）は珍しく有文であるが、鉢の破片である可能性もある。長頸壺はAが1点ある。胴部破片の（388）も長頸壺の胴部と考えられるが、これには胴部が穿孔されていた。短頸壺はBとDが各1点ずつある。この他に壺の脚合部と思われるものも2点がみられた。

文様：中型上器について文様の有無をみると。まず口縁部は有文と無文が約1:1の割合でみられた。また、胴部については有文25点、無文13点と有文の占める割合が高かった。胴部無文で、口縁部のみ有文という例はほとんどみられなかった。次に文様についてみよう。口縁部の文様には、口縁部内面に波状文を1,2条施したもののが10点余、口唇部や内面に刺突文を施したものがやはり同数あり、この2種で口縁部文様の人半を占める。次に

胸部文様についてみる。形態に関係なく、文様を施したもののみた場合、直線文と波状文を組み合せた文様が最も多く、全体の半数以上を占める。櫛描文 I の構成要素である扇形文を加えた文様は(379)にあげた1点だけである。この他の文様では、東からの影響と思われる縄文を施したものや刷毛状器具で羽状文を施したものなどが目についた。また、文様要素の1つとして刺突文 A・B を施したものも數多くみられた。

技法・手法：広口壺 A (a 手法) と広口壺 F (d 手法) を除いた形式の口唇部の処理手法についてみる。手法 b によるものが多い点は他と異なるところではないが、円頭状に作る手法 c もかなりの数認められた。中でも広口壺 D・E両形式においては手法 b を上回る数が認められた。

次に底部形態をみる。突出した底部と云えるものは(375), (378), (389)など数点がみられるだけで、他はいずれもわずかに突出する程度で、胸部から底部にスムーズに移行するものであった。底面の形態は平底155点、ドーナツ底49点、あげ底5点、不明41点であり、内木葉模が付着するもの平底で20点、ドーナツ底で1点であった。

甕

器種組成：図示した資料は、胸部、脚部破片合せて19点、総数では128点がある。やはり図示した以外に形態はわからない。図示した脚部破片は9点と数少ないがA～Dまでの各種とGの5形式のものがみられた。出土層位も異なり、また、数が少ないとともあり、どれが主体とはいえない。

技法・手法：胸部と脚台部の接合法についてみる。分析結果を含めると、凸帯の付かないもの（脚台部①）51点、凸帯の付くもの（脚台部②）60点、不明17点となる。

高坏

器種組成：総数162点がある。内16点を図示した。分析結果をふまるとB～Hまでのすべての形式が認められた。なかでもBは、図示した資料は3点だが分析結果では39点があり、土体を占める形式であった。高坏C・D・E・G・Hは、分析結果を含めても数少ない。Fは図示した中にはないが、分析結果では14点ありBにつぐ形式である。脚部は脚Aをとるもののが圧倒的に多く、他に脚B～Fが少量ずつ認められた。

文様：図示した高坏8点中、文様が認められたのは1点だけであった。これには波状文が認められた。脚部は14点中5点に文様が認められた。有文の割合は、A・B群と比べ低い。文様は直線文を施したもの3点、直線文と刺突文を組み合せたもの2点である。

技法・手法：脚端面の処理手法については、面を作るもの（脚端面処理手法①）ばかりでなく、押えつけるようにして折り返して作った手法（脚端面処理手法③）のものも認められた。

鉢・片口

器種構成：鉢は点数的には少ないが、AとGを除き、B～Fまでのものが認められた。どの形態が主体を占めるというのではなく、どの形態も数点ずつ認められた。台付鉢はAが4点、Cが1点、片口ではA1とB1が各1点認められた。

文様：鉢BとCでは、口縁部外面に刺突羽状文を施したもののが約半数の割合で認められた。鉢他形式では文様が施されるものはない。台付鉢は、鉢部には文様を施さず、脚台部に文様を施したものが多いが、文様構成は欠損例が多くはっきりわからない。片口は2点とも無文である。

技法・手法：底部形態についてみれば、底部平底のものが大半を占め、ドーナツ底を呈するものがごくわずかあるだけである。

6. B12区・B13区 YT 7一下脣

a. 出土状態

B13bからB12iにかけてのYT 7からは、おびただしい量の土器が、土器片をひきつめたような状態で出土した(写真図版第4A)。これらは後述する中・上層からも同じような状態で出土しており、この最初の検出作

器で検出された上器群（中・上層土器）を取り上げたところ、その下にも高密度の上器集積が及んでいた。そこでこれを中・上層土器と区別し、下層土器として取りあげた。出土層位としてはD層中と考えられる。ただ、この下層土器群の下には青灰色粘土層がみられ、その下に有機質粘土層（D3層）が認められた。従って、この上器群は、前述したY T 1から出土したA・B群よりも若干新しいと考えられる。なお、B12区・B13区Y T 7出土土器については、器種別累計方法と同じ要領で、器種別の出土状況図を作成してみた（別冊図版第3）。この図でも明らかのように、この区内間では上器はとれることなく、ほぼ全面から出土している。

b. 器種構成

土器総数558点、内訳は盃236点（42%）、鉢7点（1%）、甕136点（24%）、高杯176点（32%）である。この数値は全体の器種比率にはほぼ等しい。

c. 器種組成、文様、手法・技法

壺

器種組成：壺は総数236点がある。組成内容としては、まず受口壺はBが2点とこの地区ではほとんどみられなかった。広口壺はここでも主体となる器種である。Aは図示した中にはないが、拓影図並びに分析した中に7点が認められた。Bは広口壺の中でも主体を占める形式である。口縁部破片を含めると46点が認められた。B1からB4までの各形式のものが認められるが、無花果形をしたB1が最も多い。Cは図示したC1（1点）、C2（3点）の他にも口縁部破片が10点余りあり、B・Fに次ぐ形式である。D・Eは分析を通してほとんど認められなかった。Fは図示した3点の他にも、拓影図等で示したように口縁部破片が30点余りあり、Bにつぐ形式であった。この他では小型広口壺Bが4点、壺が1点、長頸壺A3点、同B1点、短頸壺1点が認められた。また、胴部破片においては、胴部I、II、IIIがほぼ同じような割合で認められ、胴部IVは認められなかった。

文様：B12区・B13区Y T 7下層並びに後述するY T 7上層については、実測図を作成する時間的余裕がなかったので、拓影図によって口縁部・胴部の文様を集成してみた。実測図に合せてこれらも参考にしながらみていくことにする。なお、図示した中型土器における文様のつく割合は、有文20点に対し、無文14点であった。

まず、口縁部に文様が施されたものは、拓影図を含めると40点がある。内30点余が口縁部内面に文様が施されたものである。文様は波状文、刺突文（刺突羽状文）のいずれかを施したものが多く、ついで縦文や扇形文等を施したもののがみられた。口縁部外面に文様がつくものは少ないが、これには刺突文や縞文が施されていた。

次に胴部文様についてみよう。図・拓影図合せて100点余りをあげたが、その中で最も多くみられたのが、横描文Iで半数余にみられた。横描文IIとした刺突文が施された文様は10点程と数少なかった。これには（1084）～（1086）にあげたような、いわゆる有段羽状文と呼ばれる文様も認められた。この他、縦文、もしくは押圧横線文と縞文を組み合せた文様も20点余り認められた。

技法・手法：口縁部の処理手法のうち広口壺A（a手法）と広口壺F（d手法）を除く器種では、b手法によるものが人半を占めた。

底部形態は（592）の1点が突出した底部を作る他は、いずれもわずかに突出する程度で、胴部から底部へはスムーズに移行する。底面は平底99点、ドーナツ底63点、あけ底4点、不明70点である。木葉痕は平底に2点、ドーナツ底に1点認められた。

甕

器種組成：総数136点が出土したが、復元、実測したのは（612）に示したE2の1点だけである。甕については、口縁部の一部で形態が明らかになるというのではなく、全体のプロポーションで分類しているため、破片のままの状態では形態別数値までは明らかにできなかった。

技法・手法：胴部と脚台部の接合法について観察したので述べておく。凸帯の付かぬもの（脚台部①）37点、凸帯の付くもの（脚台部②）33点、不明66点であった。

高 壕

器種組成：高壙も総数179点が出土したが、復元、図示できたのは比較的類例に乏しい5点のみである。高壙については壙部および脚部形態に注目した分析結果があるので、それらを参考に組成内容をみていくことにする。

Aとしてあげた（613）は全出土品中唯一のA形式の高壙である。脚部が欠損しており明らかでないが、西（尾張・三河）の山中式・寄廻式にみられる器形で、搬入品である可能性がある。Bの（614）はB1の典型例ともいべきものである。Bは分析結果によれば、この他に89点があり、主体を占める形式である。Cはほとんどない。Dは図示した（615）の他に、拓影図・分析結果によても9点があり、絶対数としては少ないが、全体からすればBに次ぐ形式である。Fは分析結果の中に3点が認められた。Gは拓影図としてあげた1点の他いずれも脚部破片であるが5点が認められた。Hは図示した2点の他、拓影図に2点、分析結果でも8点が認められた。

文様・技法・手法：文様は図示した中の3点と拓影図6点の計9点に認められた。壙部に文様が付くものは5点ある。B（2点）には直線文と波状文、D（2点）は櫛の刺突羽状文、Hには口唇部に繩文が施されていた。脚部文様は5点に認められた。B（614）には直線文、G（1092）には直線文と範描斜線文、Hの3点には、（617）が脚下部に刺突文、（618）が壙部と脚部の境に押圧横線文、（1093）には繩文が施されていた。

鉢・片口

器種組成：図示した資料ならびに分析結果を合せるところは、A・B・D・Eの各形式のものが2・3点ずつ認められた。合付鉢は図示したAが2点、片口はAが図示した他にも1点あり、計2点がみられた。

文様・技法・手法：図示した中においては鉢、合付鉢、片口の各1点に文様が認められた。鉢には口縁部外側に櫛刺突羽状文、合付鉢では脚部に直線文と刺突文の組み合せ、片口には繩文が認められた。鉢・片口の底面の形態は平底2点に対し、ドーナツ底4点であった。木葉痕の付くものはない。

7. B12区・B13区 YT 7一中・上層

a. 出 土 状 態

前述した下層七器同様、中・上層でもおびただしい土器が出土した。遺物は上層から中層をへて下層へと、ほぼ1つの連なりとなって集積しているため、これらを厳密に区別して取りあげできたか、自信はない。下層土器と同じく器種別の出土状態図をドットで示した（別冊図版第4）。上・中層土器はB13bに密度の濃い土器集積がみられ、B12hではやや希薄になることが知られた。

b. 器 種 構 成

土器総数は832点で、これは下層出土土器より多い。内訳は壺283点（45%）、鉢7点（1%）、甌133点（21%）、高壙209点（33%）である。全体の器種比率と比べ、壺の比率がやや高く、その分甌の比率が低い。

c. 器種組成、文様、技法・手法

壺

器種組成：壺は総数283点がある。内図示できた資料は、口縁部破片を含めての22点である。やはりここでも分析結果を参考に、器種別に見ていくことにする。まず受口壺はA2（627）の完形品が1点みられただけであった。受口壺は分析結果でもみあたらず、下層からの紛れ込みの可能性もある。広口壺ではAはみあたらなかった。Bは図示した資料は1点（628）だけであるが、分析結果では89点もあって、壺の主体を占める形式であった。Cは図示した資料にはないが、分析結果では20点程が認められた。D・Eは図示した資料に分析結果を加えても10点前後と數少なかった。Fは図示できたのは1点だけであるが、口縁部破片で34点があり、Bについて、Cとともに主体を占める形式であった。この他、小型広口壺、小型壺、壺の3種は、分析結果は不明だが図示した中には、1、2点ずつがみられた。長頸壺は図示した中にも、分析した中にもみられなかった。短頸壺はA・Eが各1点あった。

文様：小型の壺を含む全器體において文様の有無をみると、有文7点、無文15点と無文土器の占める割合が高い。これを中型土器に限っても有文7点に対し、無文6点と無文土器が結構多い（小型土器はすべて無文である）。この無文化の傾向は、中・上層土器の特徴といえる。次に各々の文様についてみていく。まず口縁部に文様が認められるものは、短頸壺の1点を含めて4点がある。1点は内面に波状文が施されたもの、残る3点は、口唇部もしくは口縁部内外面に刺突文を施したものである。この他、破片拓影図としてあげた中に、文様が施された口縁部破片が10点余がみられたが、これらは文様が施された土器を抽出して得た数であって、全体の文様比率には加えない。これらの破片には波状文、扇形文、刺突文、繩文等の文様が認められた。胴部に文様が付くものは6例。このうち5例は直線文・波状文、もしくはその組み合せである。残る1例は、それに刺突文が加わった文様構成をとる。なお、胴部についても、やはり50点余の破片拓影図を示した。やはり櫛描文Ⅰ、櫛描文Ⅱ、繩文を施した文様が、数多くみられた。胴部文様帶の幅は資料が少なくてはっきりしない。

技法・手法：まずは口唇部の処理手法に注目する。前述した下層土器の場合、口唇部はしっかりと面を作る手法bによるものが大半を占めていたが、この群のものでは、形態差にもよるであろうが、口唇部を円頭状に処理した手法cによるものも、かなりの数認められた。

次に底部形態についてみていく。底部は極端に突出するものはないが、それでも他と比べやや突出して作られるものが数多くみられた（627、630、648等）。残る多くは、わずかに突出する程度で脚部から底部へはスムーズに移行する形であった。底面の形態は、平底195点、ドーナツ底73点、あげ底2点、不明13点である。木葉痕は平底で18点、ドーナツ底で8点にみられた。

壺

器種組成：総数133点が出土したが、実測図として示し得たのは（649）にあげたA1の胴部破片の1点だけである。従って壺については、ここでも器種組成を明らかにすることはできない。

技法・手法：分析の際に、胴部と脚台部の接合部の凸帯の有無について統計をとったのでそれをあげておく。凸帯の付かぬもの（脚台部①）67点、凸帯の付くもの（脚台部②）66点という結果であった。

高杯

器種組成：高杯も図示できた資料は2点と少ない。ただ壺とは違い、分析結果からある程度の傾向がつかめるので述べておく。分析結果によれば、杯部ではBが98点と圧倒的に多く、続いてD・Fが共に20余点、C・Hといった形式も若干みられた。また脚部においては脚Aがやはり圧倒的に多く44点、他に脚C・D、E・Fが3～7点認められた。

文様、技法・手法：図示した2点は共に無文である。他の資料については明らかでない。

鉢

器種組成：分析結果も含せてみていく。まず鉢ではA～Dのものがあり、中でもBは最も多く9点が認められた。台付鉢はA1が2点、A2が1点の計3点がある。

文様：文様は図示した中では鉢において2点と、台付鉢1点の計3点に認められた。鉢の（652）は口縁部外側に刺突文、（653）は珍しく肩上部に直線文が施されていた。台付鉢の（656）は、脚部に直線文を施した後、外側全面に刀塗を施していた。

技法・手法：鉢は底部をやや突出して作るものが多い。底面はすべて平底で、木葉痕の付くものはない。

8. B12区・B13区 Y T 6 一下層

a. 出土状態

Y T 6 は3条の環濠の真中で、掘削順序としては3条の中では最も早いと推定されている（浜松市博編1977）。しかし土器（下層）の出土状態は、前述したY T 7 下層土器同様に、D3層を覆う青灰色粘土層より上の層中（D1・D2層）より出土しており、時期としてはY T 7 下層土器とほぼ同時期と考えられた。このY T 6 下層土

器についてもYT7と同じ要領で、器種別出土状態をドットで示した(別冊図版第3)。これによっても明らかのようにYT6内の遺物は、その内側のYT7と比べ、かなり数が少なくなる。これは遺跡(環濠)全体を通していえることであって、遺物が、環濠内側から破棄されたことに起因するのであろうか。

b. 器種構成

土器総数97点、内訳は壺56点(58%)、甕19点(20%)、高杯20点(20%)、鉢・片口2点(2%)である。土器総数が少ないので、器種比率はあまり参考にはならないが、甕・高杯が多く、その分が多く多いといえる。

c. 器種組成、文様、技法・手法

壺

器種組成: 図示したのは、広口壺D3の2点だけである。壺は分析結果によればこの他に54点あるが、確認された形式はすべて広口壺で、それもA~Fまですべての形式のものが認められた。いずれも少数でどれが主体となるかわからない。

文様、技法・手法: 図示した2点は、いずれも無文であった。他については、文様まで分析対象にしなかったので明らかでない。底部形態は図示した2点のうちの1点(705)が突出した形態、残る1点(704)はやや突出する程度の作りであった。底面形態は分析結果を含めると、平底38点、ドーナツ底11点、あげ底0点、不明6点という結果になる。木葉痕は平底の中に3点が認められた。

甕

器種組成: 分析結果では19点が認められたが、復元できた資料はない。したがって形態別の数は明らかでない。

技法・手法: やはり胴部と脚台部との接合部の凸唇の有無についてみる。凸唇の付かぬもの(脚台部①)8点、凸唇の付くもの(脚台部②)11点という結果であった。

高杯

器種組成: やはり復元できた資料はない。分析では、B14点、D1点、F2点が確認された。文様や技法等は明らかでない。

鉢・片口

器種組成、技法・手法: 鉢は図示した資料はないが分析結果ではA2が1点認められた。片口はA2の完形品(703)が1点ある。無文土器で、底部平底である。

9. B12区・B13区YT6一中・上層

a. 出土状態

中・上層の遺物出土状態についても、別冊図版第4に器種別出土状態をドットで示した。中・上層出土土器はB13e付近に、数少しい器が集中してみられた。

b. 器種構成

土器総数は74点と数少ない。器種比率は壺33点(45%)、鉢2点(3%)、甕16点(22%)、高杯23点(31%)である。この比率は、全体の器種比率にほぼ等しい。

c. 器種組成、文様、技法・手法

壺

器種組成: 壺は総数33点で、内9点を図示した。形態別内訳では広口壺が最も多く19点がある。A・B・C・D・Fの各形式がみられるが、いずれも少数で、どれが主体となるかわからない。この他に小型広口壺B、壺、長頸壺が各1点ある。

文様: 分析するほど数がないので、図示した資料について紹介する。図示した9点中、有文5点、無文4点であった。有文土器5点のうち、胴部のみ有文は4点、残る1点は口縁部に文様が施されていた。

文様は、口縁部にのみ文様が施された(708)の場合、内面に刺突羽状文が施されていた。胴部に文様の付く

4点については、押圧横線文を施したものが多く、(709)、(711)は押圧横線文のみ、(707)は押圧横線文と繩文が施されていた。なお、残る(706)には結節繩文が認められた。

技法・手法：口唇部の状態がわかる資料が少ないので、底部についてのみみていく。底部形態の明らかなものは図示した資料に限られるが、これらはやや突出した底部を作るもの(708, 709, 711等)と、わずかに突出するだけで脚部から底部へなだらかに移行するもの(711, 712, 717等)の2種が認められた。底面の形態は平底24点、ドーナツ底7点、不明2点である。木葉痕の付着するものは平底に4点、ドーナツ底に1点が認められた。

■

器種組成：総数としては16点があるが、復元・図化できたものが少ないため、形態別の数は明らかでない。

技法・手法：胴部と脚台部との接合部における凸帯の有無についてみる。内訳は凸帯のつかぬもの(脚台部①)7点、凸帯の付くもの(脚台部②)9点であった。

高坏

器種組成：やはり復元・図化できたものはない。分析結果では23点があり、内坏部形態では、B11点、D・F各1点等が確認できた。また、脚部形態には、A3, C2, D等の新しい時期と思われるものが目についた。文様や技法・手法等は明らかでない。

鉢

器種組成：図示できたのは鉢C1(715)と台付鉢B(716)の2点である。この他、口縁部破片の中には鉢AとBの破片が若干みられた。

文様、技法・手法：鉢(715)は無文であったが、台付鉢(716)は珍しく、鉢下部に直線文、脚台部に直線文と刺突文を組み合せた文様が認められた。鉢は平底で、木葉痕も付かない。

10. B13区・A13区環濠外下層

a. 出土状態

第1章第2節でも述べたように、弥生土器は、環濠以外の遺構からも出土しているが、いずれも数は少なく、土器分析に役立つほどの資料はなかった。そんな中で環濠に取り込まれて低湿地となった場所、つまり耕作にむかわない部分は、環濠内と同じように土器の廃棄場所？となっていたこともあり、多くの土器が出土した。そんな場所が環濠内には何ヶ所かみられたが、なかでもこれから述べるB13区からA13区の環濠外からは数多くの土器が出土した。土器の出土状態は、B13区では比較的溝内遺物と区別可能な状態で出土したが、A13区ではY T 7内の土器と区別できないような状態で重なりあって出土した。こうした点に注目すれば、A13区の環濠外の土器群は、Y T 7の溝中(下層)のものより若干後れて破棄されたものといえるかも知れない。

b. 器種構成

土器は総数273点がある。内訳は壺110点(40%)、鉢4点(2%)、甕64点(23%)、高坏95点(35%)である。全体の器種比率と比べ、高坏の比率がやや高く、その分率が低いといえる。

c. 器種組成、文様、技法・手法

壺

器種組成：総数110点中、図示した資料は口縁部破片を含めて14点である。それでは、分析結果も参考にしながら器種構成をみていくことにしよう。受口壺は図示した中にBが1点、分析結果の中にAが1点の計2点があるだけと数少なかった。広口壺は数多くが認められた。まずAは分析した中に4点、Bは図示した中に4点、分析結果31点、Cは分析結果12点、Dはなく、Eが図示1点、分析結果3点、Fは分析結果20点が認められた。広口壺Bが主体を占め、次いでC・Fといったところが多くみられるという結果であった。この他、小型壺、長頸壺が1、2点と脚部破片数点が認められた。

文様：図示した14点中、有文土器は4点、無文土器が10点あった。無文土器の占める割合が高いのは、中型土

器が少なく小型壺や長頸壺のように文様を施すことをあまりしない壺の示める比率が高いせいでもある。文様では、まず口縁部に施した2点についてみると、(787)の受口壺では外面に櫛の押圧横線文が4条施され、(788)の広口壺Bでは内面に波状文が施されていた。胴部に施文されたものは3点（内1点は口縁部と両面に施文）あるが、これらは櫛描文Iもしくは櫛描文IIで施文されていた。

技法・手法：図示した資料における口縁部の処理手法はb手法とc手法に限られた。c手法によるものは(789)と(790)の2点で、他はb手法で処理されていた。底部形態は(796)がやや突出した底部を作る他は、わずかに山張る程度で、胴部から底部へはなだかに移行するものばかりであった。底面は平底のもの49点、ドーナツ底23点、不明38点であった。木葉痕が付着するものはドーナツ底に4点が認められただけである。

甕

器種組成：総数としては64点があるが、復元・図示できたものが少ないため、形態別の数は明らかでない。

技法・手法：胴部と脚台部との接合部における凸帯の有無についてみてみると、凸帯の付かぬもの（脚台部①）23点、凸帯の付くもの（脚台部②）23点、焼付凸帯がつくもの（脚台部③）1点、不明17点という結果であった。

高坏

器種組成：総数95点があるが、復元・図示できたものは、脚部破片を含む6点だけである。ここでも分析結果をふまえてみていくことにしよう。高坏で最も多く数がみられたのはBで、44点と全体の半数近くが認められた。統いてDが13点、Cが図示した2点を含む4点、F・G・Hが各1、2点ずつ認められた。また脚部ではAとCが各10点ほど認められ、他にE・Fの脚部も1、2点みられた。新しい時期（伊場Ⅲ期）と思われる高坏Cや脚Cが數々られる点は、推積時期を知るうえで注目される。

文様、技法・手法：図示した資料で文様が施されたものは(807)の1点だけであった。これには脚上部に直線文が5条にわたって施されていた。この他、(809)の脚部には透し孔を穿けるために、箆でその位置をしるした跡が残っていた。

鉢

器種組成：図示した資料はBが2点、D・E2が各1点の計4点だけであるが、分析結果ではA～Eの各形式のものが認められた。

文様、技法・手法：図示した4点はすべて無文であった。口唇部はいずれも面を作らず円頭状に作っていた。底部の形態は平底3点、あげ底1点であった。

11. B13区、A13区環濠外中・上層

a. 出土状態

前述した下層土器の上層より出土した土器群である。下層との判別がしにくい場所もあり、また上層においては古式土師器が混在するなど、分析過所としては適当とはいえない。別冊図版では中・上層別々に判別したが、ここでは合わせてみていくことにする。

b. 器種構成

土器総数は200点である。内訳は壺79点（39.5%）、鉢13点（6.5%）、甕47点（23.5%）、高坏61点（30.5%）である。全体の器種比率と比べ、甕・高坏の比率が低く、その分、壺・鉢の比率が高い。

c. 器種組成、文様、技法・手法

甕

器種組成：甕総数79点中42点（中層18点、上層24点）を図示した。このように図示できた資料が半数余の多数となったのは、この地点においては完形品もしくは完形に近い状態で多くの土器が出土したことによる（後述するように割れににくい小型土器が多いことも一因する）。なお、この地点は口縁部形態による分析を行っていない。従ってここでは図示した資料に基づいて組成内容をみていくことにする。まず受口壺は1点があるだけであ

る。口縁部破片であって全体の器形まではわからない。広口壺はA・C・D・E・Fの各形式が認められるが、数はいずれも1, 2点と少ない。胴部破片の多くが広口壺の破片であるとしても、広口壺の壺全体を占める割合は低い。また、口縁部分析をしていないので断定はできないが、他地区では主体となって出土する広口壺Bがないものも注目された。この他の器種では、小型広口壺C2が2点、小型壺Cが4点、壺4点、長頸壺1点、蓋2点等が出土した。また、胴部破片は17点を実測したが、約半数が小型土器のものであった。このように小型の壺や、長頸壺、無頸壺の比率が高い点も注目された。

文様：図示した42点中、有文土器12点、無文土器30点という内訳であった。無文土器が目立つのは前述したように、あまり文様を施さない小型壺や長頸壺の数が多いことに起因する。そこで中壺土器に限って、文様の有無をみた場合、17点中12点に文様が認められた。

有文土器12点のうち、口縁部に文様が施されたものは、口縁部のみの1点と、胴部との両面に付く2点の計3点があり、文様としては内面に波状文が付くもの、外面に刺尖山形文、刺突文が付くものがあった。胴部文様は11点に認められるが櫛描文Iと櫛描文IIが各3点ずつ、他に繩文や押圧横線文等を施した文様が認められた。胴部文様帯は概して、2~4帯を施した幅狭いものが多いが、比較的大型壺と繩文を施したものについては、幅広い範囲に施されたもののが多かった。

技法・手法：まず口縁部処理手法についてみる。広口壺A（a手法）と広口壺F（a手法）を除いた器種においては、面を作るb手法と、円頭状にするc手法が約半分程の割合で認められた。ただし b手法においてもしっかりした面を作ることは少なく、多くは円頭状まではいかないまでも丸味をもつという特徴が認められた。

次に底部形態についてみていく。底部形態には、突出するものと、わずかに突出する程度で底座から胴部へはなだかに移行するものがあり、遺跡全体からみれば後者が圧倒的に多い。しかしながらこの群においては前者の突出した底部を作るものもかなりの数認められた。底面の形態については、平底46点、ドーナツ底17点、あげ底2点、不明14点であった。木葉痕は8点に認められた。底部形態についていえば、底部が突出したものが多い点と、ドーナツ底の比率が高い点がこの群の特徴としてあげられる。

壺

器種組成：総数45点があるが、復元・図示できたのは上層から出土した2点のみである。(862)はB5、(863)はD1の完形品である。他については形態不明である。

技法・手法：胴部と脚台部の接合部における凸帯の有無について分析したところを述べる。凸帯の付かぬもの（脚台部①）11点、凸帯の付くもの（脚台部②）14点、不明20点であった。

高杯

器種組成：総数61点が出土した。内中層2点、上層4点を図示したが、他は形態別分析をしておらず、形態別数値は明らかではない。図示した資料は、中層がB2とG3の2点、下層がC3・D2と脚A2、脚C2の4点である。

文様、技法・手法：上層出土の4点は無文だが、中層出土の2点には文様が認められた。(832)はB2の壺部破片だがこれらには波状文と直線文が施されていた。(833)の脚部には押圧横線文が12条にわたって認められた。

鉢

器種組成：鉢は図示した中層4点、上層6点の計10点が認められた。数は少ないながらも鉢A・Gと合付鉢を除くすべての器種がみられた。

文様、技法・手法：図示した資料はすべて無文であった。また小型品が多い点も注目された。底面形態は平底7点、ドーナツ底2点、あげ底1点であった。木葉痕は平底とあげ底に各1点がみられた。

片口

器種組成：片口は中層2点、上層1点の計3点が認められた。形態は中層がA2とB1、上層がA3であった。

文様、技法・手法：3点とも無文であった。口唇部はいずれも内傾する面を作った丁寧な作りである。底面の

形態は平底 1 点、ドーナツ底 2 点である。ドーナツ底の 1 点には木葉痕が認められる。(辰巳 均)

第 4 章 総 括

第 1 節 土 器 の 編 年

1. 山 上 状 態

第 1 章で述べた通り、当遺跡における土器の出土状況は、地点別の大量廃棄に特徴づけられる。それぞれ、比較的短期間の廃棄によるものと思われるが、相互にその期間や廃棄の回数に差があることが予想される。B13区の YT 7 や A13区の YT 7 の内外にみられた土器群は、かなり長期间にわたる何回もの廃棄と思われるが、A ~ C 群の土器群は、短期間の廃棄であり、特に C 群は 1 回の廃棄によるものと思われる。D 群と A10区 YT 2 から出土した土器群は、廃棄面積は狭いが、回数はかなりにのぼったと思われる。したがって一括性という観点からいえば、C 群がもっとも優れており、次いで A・B 群、D 群・YT 2、YT 7 の順となろう。しかし C 群は資料点数が少ないため、分析にはたえがたいといえよう。

2. 層位関係

次に層位的に見ると、YT 1 の A・B 群は溝底に密着し、有機粘土層 (D 層) に包まれた上面を青灰色粘土層が覆っていた。そしてその上にも黒色有機粘土層 (D 層) が堆積している。これに対して D 群や YT 2・YT 7 では、D 層に土体をおくとはいえ、中にはその上に堆積する青灰色粘土層 (C2 層) まで、土器群が含まれておらず、中には D 層に木体が埋もれていて頭を C2 層に出している例もあった。一方、溝底に接して出土する例はきわめて少なかったのである。A13区の YT 7 を中心にして、一面にわたって出土した土器群も、D 群などと同様な層位関係にあった。しかし C 群は、YT 2 と YT 9 の間の土堤上に置かれた状態だったため、層位関係は確定しにくかった。その位置関係からみて、D 群廃棄の最終段階に当るようと思われる。以上の点から土器の廃棄は、おおむね D 層の堆積と併行関係にあり、一部 C 層の堆積期に及んだといえるようである。後述するように、土器群の中には、C 層の堆積中に廃棄されたものもあり、それらは当遺跡では数が少なかった。

3. 地点別の特徴

以上の点を踏まえて第 3 章では、各地点の土器群の特徴を分析している。その大要は次の通りである。

まず、A 群は、壺 33%、鉢・片口 11%、甕 28%、高坏 28% という器種比率を示す。壺では受口壺が一通り揃っており、広口壺の A・B・F とくに B1 が目立っている。高さ 25cm 前後の中型壺が多いが、その形は「いちじく形」を呈し、胴部と底部の境では大きく屈曲するものが目につく。壺の大半に施文が見られ、口縁部には波状文が、体部では直線文と波状文と扇形文を組み合せた櫛描文 I が主体を占める。体部文様帶は 5 帯以上が多い。片口はわずかであるが鉢では A が目立つ。甕は A が圧倒的に多く、B が少しして他の型式はない。高坏は、全形のわかる例が少ないが、B2 が多いようである。脚部は、ラッパ状に拡がるもの (脚部 A) が主体を占める。脚部の施文は直線と刺穴列を組み合せた例が多い。

次に B 群は、総数が少ないが、全体的に A 群とかなり似た特徴をもっている。異なる点は、壺 54%、鉢 4%、甕 22%、高坏 20% と甕の比率が高いことと、甕の文様に刺突が加わること位いであろうか。なお、C 群についての資料不足からその特徴を読みきれない。

次に D 群をみると、器種組成は壺 33%、鉢・片口 17%、甕 30%、高坏 35% で、受口壺と広口壺 A はほとんどなく、広口壺 B が主体を占め D・E がこれに次ぐ。甕の胴部は、球形化したものが多くなり、無文のものが目立つ。口縁部文様はやや少なく、体部文様では肩部に櫛描文 I を施すが、その幅は 3 ~ 5 帯が多く、A 群と比べて

狭い。壺では、BとCと共にC1が多く、Aはわずかで、脚部付根の凸帯がやや多い。高环には、各型式が含まれていて、Bが多くD・F・Gなどがこれに次ぐ。光形品でみると高环F1とGの脚部下間に、膨らみをもつ例が目立つ。また脚部では無文がかなりあり、文様では直線だけになり、刺突を加える例はほとんどない。鉢はB1とC1の型式が多い。

そして、もう一つB13区YT7出土土器群についてみて置こう。ここでは土器集積に厚みがあり、上・中層と下層に分けて取り上げられている。これは厳密な層位差によるものでなく、最初の露山作業で検出した土器群を取り上げたところ、さらにその下に土器集積が及んでいたため、それを下層したものであった。下層はD層としても、上・中層はD層からC層に及ぶとみられる。

その下層I:岩群は、壺42%、鉢1%、甕24%、高环32%という器種比率で、受口壺をほとんど欠き、広口壺ではBを主体としてC・Fがこれに次ぎ、D・Eがない。長頸壺の存在が注目される。壺の腹部が球体を呈する例は少ない。有文のものが多いとはい、無文もかなりある。櫛描文Iが主体で刺突を加える例はほとんどない。別に繩文施文のものが他地点より多い。壺や高环については、全形を知り得る資料が不足している。上層土器群は壺45%、鉢1%、甕21%、高环33%の比率を示し、広口壺Bが主体で、Cもかなり多い。文様帶は幅を狭める一方、無文が過半を占める。文様では直線文と波状文の組み合せが主体で、刺突が加わり、扁形文がみられない。脚部球体が目立つ。甕は光形資料が不足している。高环も全形を知り得る資料が乏しいが、B類が圧倒的に多いようである。

以上のおほか、YT6やA13区の資料などがあるが、土器編年に関する資料としては不適当であるので、ここでは省く。

4. 型式 紹列

こうした視点とは別に、第2章では器種毎の型式分類が行われた。第4~10図に各器種が図示されている。細別しすぎて煩雑になったくらいはあるが、全体像を知るには役立っていると思う。受口壺は、東海地方の中期弥生土器の一人特徴といえる形式であり、第4図のA1はその系譜上にあること明らかである。A2はさらにその延長にあるとみられる。これに対してBは、同じく中期以来の系譜につながるもの、遠江以東の地域では後期に盛行した型式である。受口壺Cについては類例がない。

当遺跡出土の壺の主体は広口壺である。まず広口壺A1は畿内第3様式以来、東海地方にも出現した大型壺の形式につらなり、なお中期の面影を残している。ただし例数はほとんどない。一般的にいって、中期から後期への壺の器形変化は、細身下膨れの形から広口壺形胴へという方向にあることはよく知られている。したがって、広口壺BはB1+B2+B4、以下C1+C2、D1+D2+D3、E1+E3、F1+F2+F4という型式変化を想定することができる。また、広口壺A2+B3+F3は、小型広口壺A2や高环Hなどとともに、天竜川以東の遠江に生ずる分布圏をもつ土器群であるため、系譜関係は別途に考えなくてはならない。

小型壺につきては、前段にならって小型広口壺A1~A3を想定できるが、他の器形については個体差が大きくて、系譜関係を追求しにくい。ただ小型広口壺C3や小型壺Cそれに付いてはその出現が、他と比べて遅れたであろうことが推測される。

長頸壺ではAとBが、受口壺と同様中期からの系譜上に出現したと考えられるが、受口壺は後期では急減するのに、長頸壺は細々と続いて、一部はひさご壺に変化するものと思われる。短頸壺はA・B・Fといった有文の型式が、中期から続くが、C・D・Eは例数も少なく個体差もあって検討しにくい。

甕は、ほとんど付合である。煮沸形態に台がつくのは、中期後葉からで、深鉢形に小さい台が付けられた。後期に入ると甕形にしっかりした台がつくようになるのが、東海以東の太平洋岸地域の一般的特徴であった。問題は、そうした中での細かな差違をどう把えて、年代差や地域差とするかという点である。この地域の中期後葉を代表する浜名郡新居町一里田遺跡の上群（向坂編1980）を手がかりにすると、甕Bから甕Cへの変遷、つまり鉢

	臺類						高坏類					鉢類			甕類				
	受口壺	広口臺			小型広口臺	坦頸臺	長頸臺	B	B・C	D	E	F	G	A・B	C	台付鉢	片口	A	A-D
第一期																			
第二期																			
第三期																			

第一期																		
第二期																		
第三期																		

第15表 伊場遺跡出土土器の型式組列表

形からだいに体部が膨らむ方向への変遷を想定することができる。一方、一里田遺跡には、壺Aの形がすでにわずかながらみられる。したがって、中期からの系譜としては、A・B→Cという変遷が想定できる。壺D～Hについては、例数が少なくて検討がむずかしいが、D1は、Cの延長上につながるものと思われる。

高环は、BとりわけB1とB2が主体を占めるが、F・Gも少ない数ではない。こうした高环の形が、中期の高环からどのように変化してきたか、その過程をくわしく跡付けることはむずかしい。その間の型式変化上のヒアタスは大きい。しかし、B1・B2のような高环は、若干差はあるながらも、天竜川付近から東九州までの広い地域において、後期前半に普及していた。この広域の中で、前代から系譜的にたどり得る地域は、瀬戸内中部沿岸地帯ではなかろうか。前代からの系譜はともかくとして、B1・B2は、B5・B6・C1を経てC2へ変遷したと想定できる。これに対して、F・Gの高环は後へ続かないらしい。それらしい型式が見当らない。高环II、とりわけH2は、天竜川以東の遠江でその後にも多少変化しながら続くが、当遺跡ではそれに該当するものがない。

鉢の中でもっとも多いのは、A1・B1・C1・C2であって、他は例が少ない。これらの型式は、前後につながる型式がない。愛知県ではAに類似した型式が多く、Cが少し認められる程度で、B1などはみられない。鉢B1は、羽状刺突文を施す点でも、当遺跡にきわめて特徴的な型式である。この型式は天竜川以東にも及んでいる。片口もまた、他地域ではあまりみられない形式である。

以上述べた点を、不明確なものは除いて表にすれば、次のようになる。すなわち、大きく二つの段階に、そして前半はさらに二つに細別できそうである。

5. 文様

文様は、土器の成形ひいてはその結果としての器形と深く係っている。そこで、壺・高环・鉢について、文様に関する特徴を概観しようと思う。

中期の壺は、一般的に頸部から胸部へなめらかに移行し、文様も頸部から胸部全面にわたって施されている。口縁部もかなり飾られる。当遺跡の受口壺A1はその系譜上にあるとみられるが、すでに頸部文様を失っている。広口壺A1も中期の面影を残しており、口縁部が加飾されて体部文様もかなり幅広く施されるが、体部全面でなく肩部への集約化がみられる。そして頸部文様はすでにない。同様のこととは、他の壺についても認められ、同一形式においては、例えばB1・F1のように、古いと思われる型式では文様帯の幅が広いのに対して、新しいと思われる型式ほど肩部への集約化が進む。同時に無文の例が増える。

文様についてみると、古いと推定した中では、直線文と波状文と扁形文を組み合せた櫛描文Iが多く、新しいと思われる型式では扁形文が省かれる。さらに新しいと思われる型式では、直線文と刺突列（施文具の一端による）の組合せ櫛描文IIが多くなる。この手の櫛描文は、球形胴の壺に限られる。なお、広口壺B3・F3、小型広口壺A2のように、天竜川以東を主なる分布域とする土器は、まだ中期以来の細そりした器形で、頸部から体部への移行もなめらか的な型式であるが、頸部の文様を欠いている点に共通性が認められる。文様は繩文や羽状刺突文が施されている。

高环では、环部に施文する例が古い型式にはみられるが、新しいものにはない。脚部の文様も古い例では刺突も混えて施文するものが多いが、新しくなるほど省かれる。鉢でも同様なことがいえそうである。特に注目すべきは、鉢B1ですでに述べたように、口縁部に羽状刺突文を施す。これは時期と地域が限定されそうな型式である。

出土状況・層位・地点別・型式組列・文様等について、要點をまとめると以上のようになるが、これらを総合すると、当遺跡の土器群は、3期に分けることができる。これを第1期、第2期、第3期と呼ぶ。しかし、この3期にそれぞれ同一比重を与えることはできない。層位的には第1期と第2期がD層と係わり、第3期がC層と係わること、文様変遷も含めた型式組列でみると、第2期と第3期との差が大きく、第1期と第2期は傾向差にすぎないことがわかる。第15表左の1～3は、その関係を示しているが、それぞれの現実的な姿は、第1期がA・

B群に、第2期がD群に、第3期はB13区YT7上・中層の一部や他地点の土器群中に若干認められる。YT7下層土器群は、第1期に近いものであろう。

当然のことながら、第15表の組列と現実の地点別土器群のあり方は一致しない。今後資料增加をまって、第15表の正当性の有無を検証する必要がある。

第2節 出土土器の対比

1. 伊場式土器

伊場遺跡の土器が世に紹介された時、弥生土器は「伊場第一様式」と「伊場第二様式」に分けられ、それぞれ伊場I式、同II式と命名された(国大編1953)。I式は櫛文のよく発達した土器群、II式は単純口縁で小形品を主とした無文化傾向の強い土器群とされている。両者は同一層位に混在したが、II式の方がやや上層より多く出土する傾向があったという。いまの時点でこれを検討すると、I式は当然、前節の第1・2期に相当するが、II式についても、第3期らしいものを含むとはい、おおむね第1期か第2期に入るものと思われる。

久永春男氏は、東海における戦後の弥生土器研究成果を集約したとき(久永1955)、伊場式土器は、寄道式併行の型式とされた。久永氏はそこで寄道式土器が、前半期と後半期でかなり差があり、これを2様式に細別することも不可能ではないと述べているが、伊場式土器については触れていない。また、伊場式土器の特徴としては、球形胸とト腹部の張る壺の共存、折返口邊が多いこと、肩部の凸帯、壺台部付根の粘土紐、浅鉢状底部をもつ高壺等をあげた。つまり、前節の第1～2期の土器群に当る。その後の伊場式土器に関する記述も簡略ながら、基本は同じで、ただ伊場式を寄道式の姉妹型式と明記している(久永1969・1978)。

向坂は、浜松市の通史の中で伊場式土器に言及するところがあった(向坂1968)。伊場遺跡の大規模調査が始まる前の執筆であったため、国大編1953と久永1955の記述を参考とし、向坂なりの解釈で記述したものであったが、基本は久永氏の踏襲である。なお、そこで向坂は、実測し直した図をI式とII式に分けて掲載した。これはまったく机上操作であって、現時点でみればあまり意味のない分類であった。

今回、前節において検討したとおり、伊場遺跡の土器群は、その大半が第1期から第2期にわたるもので第3期に含まれる資料は、全体量からみればごく少ない。そして從来の伊場式土器に関する記述からして、第1～2期の土器群に対して「伊場式」の名称を与えるのが妥当であろう。しかし、問題は伊場式と寄道式が姉妹型式であるということは、型式学上どう説明されるかという点である。向坂は、かって「伊場・寄道式」という型式の分類図を三河と遠江にかけて設定したことがあった(向坂1970)。しかし、資料の不充分の段階の処置とはいえ、問題解決にはならなかった。

縄文土器においては、器形や文様構成はで類似しても、繩文をこれに加えるか否かの差で別型式とする例もあり(鈴木1963)、文様・組成が似ていても、組成比率が大きく違う場合は型式差とする例がある(向坂1970)。これに対して弥生土器の場合には、様式概念が使われ、特に近畿地方では、同一様式内の地域差を河内型とか攝津型などと称している。しかし東海以東では、様式概念の使われ方に不統一が見られ、縄文土器における型式概念との差も明確でない。この原因は、東日本の弥生土器研究過程の中にあるとともに、実際の土器群のあり方が、畿内流の様式論で律し切れない部分をもっていると考える。前者についていえば、弥生土器研究が、縄文土器研究の延長として行われてきた点が重要であると思うし、後者についていえば、かなり広い地域に系統的に安定した様式の土器群が、長く継続したような場合が求めにいくと思う。

* 当時の出土品の一部は、本書別冊図版第53・54に実測し直して掲載した。その920は第3期に入るであろう。

** 様式概念による東日本弥生土器研究は、1936年(小林編1939)と1968年(小林・杉原編1968)に公刊されているが、その観点は充分活かされていない。

第16表 東海地方西部後期前半弥生土器の比較

		尾張	三河	伊場遺跡
壺	受口壺 A		△ — — △	
	広口壺 A	○	○ 球	○ い ちじく型
	タ B	○	○	○
	タ C		?	○ 体
	タ D		○ 刃	○
	タ E	△	?	△
	タ F			●
	小型広口壺 A	△	?	○
	タ B	△	○	○
	タ C			●
短頸壺	短頸壺 A			△
	タ B		○ — — ○	
	長頸壺	○	?	○
高杯	高杯 B	○	○ — — ○	
	タ D			●
	タ F		○ — — ○	●
	タ G			●
鉢	鉢 A	○	○	○
	タ B			●
	タ C	△	?	○
	片口台付鉢 A	○	○	●
	タ B	△	?	△
甕	台付甕 A		△ — — ○	
	タ B	○	○ 無刻有	○ 有刻
	タ C	○		
	かぼちや型広口壺	?	△	
短脚端状高杯		○ — — ○		
瓜郷上層第1様式B類高杯		○ — — ○		
山中式細頸壺		○ — — ○		
丸窓付壺		△		
丹塗有蓋無頸壺		●		
丹塗長頸壺		●		
丹塗台付長頸壺		●		
丹塗広口壺(宫廷式)		○ — — △		
器		●		
文様構成	文様構成	直線文十波状文	直線文十波状文	直線文十波状文
	施文法	直線文十刺突文		
		縦内型	東海型	東海型

○○△●●はおおまかな量的関係を示す。黒丸は専有器種を示す。

しかし、最近の土器研究には繩文土器・弥生土器双方に、形式…型式・様式という分類概念が渗透して、色々大きな成果をあげつつある。こうした目で改めて寄道式と伊場式の関係を検討した場合、天竜川以西の東海地方後期弥生土器は、濃美平野までかなり共通性をもちつつ、地域的な差違も少しづつ認められるという関係のひとつとみることができようである。繩文土器の型式概念では、それは別々の型式となろうが、上記のような広い地域での齊一性が認められ、それを○○様式と呼ぶことができれば、伊場式・寄道式・山中式はそれぞれ○○様式の遠江型・三河型・尾張型とすることが可能である。こうした分析の仕方は、すでに鈴木敏則氏が、後期後半の土器群について試みている。

以下、この観点で、公刊された報告書にもとづき若干検討しておこう。

2. 寄道式土器

寄道式土器は、豊橋市瓜郷遺跡の上層第1様式土器を標準として設定されたので、まず瓜郷遺跡出土土器との対比が必要である（久永1963）。

蓋は広口壺と短頸壺と細頸壺に分けられ、広口壺は1～3類に細分されている。第1類は、本書第4図の広口壺Aに相当するものらしい。第2類は口縁部形態の説明による限り、伊場遺跡出土土器に該当するものがない。第3類は、広口壺B・D類に相当するらしい。しかし、胴部は球体をなすのが普通らしいから、伊場式とは若干違うといえよう。短頸壺は、球体であるから、本書第6図のBに近いものと思われる。細頸壺とされたものには二通りあって、第1類は、第4図の受口壺Aに該当する。第2類は、鶴頸のような文字通りの細頸壺であるから、伊場遺跡には例がない。なお、丹影の壺としていわゆるパレススタイルの壺が含まれている点に注目したい。

高壺は、二つの種類に分けられている。第1類はさらにA類とB類に細分され、A類が本書第8図の高壺Bに当り、B類は該当するものがない。第2類は、図示された例がないが、記述に従えば、台付鉢A1に近いものと思われる。

鉢は、三つに分かれているが、いずれも伊場遺跡に共通した形のものはない。器台も伊場遺跡には欠落している。

甕は、完形のものが示されていないので、比較しにくいが、伊場遺跡の甕A～Cとおおむね共通していると思われる。しかし、口唇の刺みのないものがかなりあるという。この点は伊場遺跡と異なる点である。

そのように寄道式と伊場式は、久永1963による限り、高壺と甕の共通性を除き、相違点がかなり目立つ。しかも、寄道式土器は新古2様式（あるいは前半期と後半期）に分け得るという（久永1955・1963）。それが、伊場式土器における第1期と第2期に対応し得るか否か、瓜郷遺跡の資料提示が少ないため、確かめることができない。

豊川市行明道跡出土土器は（中村1961）、瓜郷遺跡上層の古い部分に当ると考えられている。図示された資料は少ないので、本書第4～10図に即していえば、広口壺A1・B、高壺B、鉢A、台付鉢A、甕Bなどからなり、瓜郷遺跡の上層第1様式と比べると、パレススタイルの壺の欠落が注目されている。内容としては、伊場式土器とかなり共通点が多いようである。

宝飯郡小坂井町五社福荷山出土土器（久永1963）には、唐古第5様式の記号文をもつ壺に類似した土器が含まれている。図示された10点の土器の伴出関係は明らかでないが、一括性があるものと仮定すれば、パレススタイルの壺を含む点に新しさを求めるべきかも知れない。

豊田市高橋遺跡では、たくさんの住居跡が検出されており、遺構毎の出土土器も示されていて便利であるが、器種組成の検討に堪え得る資料は少ない。その中で、第7次16号住居跡の出土土器（豊田市教委1977）をみると、

* 鈴木敏則「火山式の地域性について」『軒轅』創刊号（現在編集作業中）

** 久永1963では、單に「壺形土器」と記すだけであるが、本書の広口壺に当る。

広口壺A1・B、小型広口壺B、高环B、甕B、台付鉢A1などから成る。第9次3号住居跡出土土器（豊田市教委1979）の場合には、広口壺B・D、高环B・F、台付鉢A1、甕Bなどが見られる一方、伊場式にはない瓜郷広口壺第2類、パレススタイルの壺、胴部がかばっちゃのように抵がる広口壺、短脚腕状壺の高环などが加わっている。甕には刻みをつけないのが一般的らしい。

以上、寄道式土器の分布圏とされる三河地方の後期弥生土器を概観したところによると、次のようにまとめることができる。

- ①受口壺A、広口壺A1、短頸甕B、高环B・F、鉢A、小型広口壺B、台付鉢A1などが共通する器種として認められる。
- ②広口壺B・D、甕A・B・Cが共通するが、三河地方では前者が球体を呈し、後者に刻みのないものが多い点に違いが認められる。
- ③伊場式にない器種として、瓜郷上層第1様式第2類甕、同様式B類高环、高橋遺跡の短脚腕状高环、かばっちゃ型広口壺、パレススタイルの壺などがある。
- ④伊場式にあって三河地方にみられない器種として、広口壺F、長頸壺A・B、高环G、鉢B・C、片口をあげることができる。ただし、長頸壺A・Bと鉢Cは尾張地方にはあるので、検索不足かも知れない。
- ⑤甕・高环・鉢の文様パターンが、直線文と波状文を基本とし、扁状文を加える点は、共通している。

3. 山 中 式

濃尾平野の後期前半期の弥生土器は、埴輪式と呼ばれてきたが、新しく大谷義一による編年体系（大谷1968）において、山中式が提唱されてからは、これが大方の研究者の引用するところとなった。また、その後西春日井郡清洲町の朝日遺跡群での調査結果が発表され、山中式に相当する土器群（朝日第VI型式）の内容が豊富になつた（愛知県教委1982）。これらを参考として山中期の土器群と伊場式土器と比較してみると、次のように整理することができる。

- ①両者に共通する器種は、まず広口壺A・B・D・Eであるが、山中期のものが球体に近い点が異なる。つぎは小型広口壺A・B、長頸甕であるが、伊場式では胴部が算盤玉状になる点が異なる。つぎは高环B、鉢A・C、台付鉢A・Bであるが、高环の鉢部口辺上端に山中期のものは刻みをつけることがあるのに伊場式にはない。また鉢Aの形は相互に似ているが、伊場式のものは厚手に作られる。器台との組合せを忘れて形だけを踏襲したためかも知れない。そしてもうひとつ甕B・Cが共通器種であるが、口唇の刻み方には違いがみられる。
- ②伊場式にない器種として、丹塗りのきれいな甕がある。広口壺A、長頸甕、台付長頸甕、有蓋無頸甕などがみられる。中でも広口壺Aは、パレススタイルもしくはその前身として注目される器種である。他に山中式の細頸小型瓶形土器b、丸窓付壺形土器、それに器台形土器を加えることができる。
- ③伊場式にあって山中期にない器種としては、広口壺C・F、短頸甕、高环D・F・G、片口、甕Aなどがある。
- ④文様にはかなり違いがある。壺と高环に直線文と波状文、時に扁形文を加えた組み合せが使われることは共通しているが、山中期の土器にはそれ以前に直線文と連続斜行刺突文の組み合せが多用され、とくに鉢Aではほとんどこの文様で占められる。この点は大きな相違点である。また、山中期の備攢文は、佐原真氏のいう幾内型で統一されているが（佐原1959）、伊場式では幾内型20%弱、東海II型25%強、東海III型30%弱となっており、

* 豊田市教委1979、掲誌13の43・50のような土器を飯にこう呼ぶことにする。

** 近年見晴台式が提唱されている（紅村1981）が、ここでは論旨が散漫になるので省く。

*** 伊場式土器の中にも丹塗甕は皆無でないが、山中期にみる丹塗甕の仲間には入れにくい。

**** 佐原1959による東海壺を東海I型、A種備攢文を、1～7回施文を止めたまま土器を左回りにして施す場合を東海II型、左回りに1回で備攢文を描き終える場合（縦内環の逆）を東海III型とする。この点については、別稿を準備中である。

そこにはかなり大きな差が認められる。

こうした検討は、三重県や岐阜県の当該期の土器群にも及ぼしたいが、丁度の資料が不充分なため割愛する。ただ乏しい資料からうかがい知る限り、この地域の土器群は、山中期のものとかなり近いようである。

4. 二之宮式

前節の第15表において、別枠にした広口壺A2・B3・F3、小型広口壺A2、高环B、片口B2、台付片口などは、伊場遺跡の土器群で異質な存在である。これらは、天竜川以東の遠江地方を主たる分布域とする二之宮式から備川式にいたる土器群で、その多くは二之宮式と考えられる。二之宮式土器については、鈴木敏則氏の研究（鈴木1983）に譲るが、伊場式土器との共通点は壺B・Cだけである。と同時に壺を二之宮式と伊場式に峻別することは困難である。

以上みたところを、二之宮式を除いて第16表に整理してみた。これによって、伊場・寄道・山中3型式相互の関係は、柳描文で飾られた広口壺A・B・D、小型広口壺B、高环B、鉢A、台付鉢Aの諸型式と山中式細頸壺b^{*}。それに台付壺を共有する点で、同一様式とみることが可能である。この点は、より東方の二之宮式土器、北方の座光寺原式土器、西方の畿内第5様式土器などと比較すれば、より一層その齊一性が鮮明となろう。

しかし、この三者は相互にかなりの相連点をもつとも明らかである。寄道式土器は、受口壺、短頸壺B、高环F、壺Aなどを伊場式とだけ共有する一方、山中式とは、数は少ないが丹塗広口壺（バレススタイルもしくはその前身）、瓜郷上層第1様式B型高环、短脚瓶状高环などを共有する。また、伊場式土器は広口壺F、高环D1・G、鉢B、片口などを専有し、山中初期の土器は、器台をはじめ丹塗有蓋無頸壺、丹塗長頸壺、丸窓付壺などを専有している。柳描文の施し方からいえば、寄道式と伊場式は文様構成・施文法とともに共通し、山中初期とはかなり違う反面、伊場式の壺は多くいちじく壺を呈して球体胴が少ないので、寄道式壺は、山中初期のものと同様球体化が進んでいる。壺は、三者とも台付であって形も似ているが、口唇部の刻みの有無や刻み方は、微妙に違っている。

天竜川以西の東海地方に広く齊一性のある土器群が存在したという上記の指摘が妥当であれば、これを何と呼んだらよいだろうか。小林・杉原1968では、伊勢湾地方第V様式がほぼ山中初期に当り、東海地方I（三河地方）では第IV様式が寄道式に当る。また、東海地方IIは駿河湾沿岸をさすので、遠州平野部は當時まだ様式論でまとめる範囲に含まれていなかったことになる。したがって、天竜川以西の広域に共通する様式名としては、「寄道様式」を提唱しようと思う。それは、寄道式土器が、地理的に中間に位するとともに、山中式ともまた伊場式ともそれぞれ共通部分をもつて注目してのことである。そして伊場式土器は、寄道様式の遠江型、寄道式は三河型、山中式は尾張型というように整理しようというのである。

第3節 西遠地区の後期弥生文化

1. 土器論のまとめ

第1節では伊場遺跡出土弥生土器を3期に編年し、第1・2期は少蕊で3期との間に大きな違いのあることを指摘した。そして第2節では、第1・2期をまとめて「伊場式」と把え、三河地方や尾張地方の土器と比較した結果、それぞれの地域の土器群は、互いにかなり相連点をもっているが、三河地方の寄道式土器を中心に、広口壺A・B・D、高环B、鉢A、台付鉢Aそれに台付壺を軸にして、天竜川以西の東海地方に広く齊一性を認めたことができた。それに比べれば、新古の差も地域的な差も小さいことがわかる。そこで、これらに対して「寄道様式」なる様式名を与える。伊場式土器はその遠江型として位置づけることにした。

* 山中式の細頸壺bに当るものは、伊場遺跡にはないが、隣接する国鉄工場内遺跡にわずかにみられる。

第3期の土器群は、全体として数も少ないが、層位的にも、文様を含めた型式組列の上でも、第1・2期の土器群とは異なる新しい様式と認められる。この土器群については詳しい検討ができなかったが、結論的にいえば、三河地方の欠山式土器（久永1955・1963他）と併行関係にあるものといってよいだろう。この時期の土器については、74頁の脚注に引いた鈴木敏則氏の研究に期待したい。

ところで、当地域の後期弥生土器は、これまで大きく前半と後半の2期に区分されてきた。佐藤山紀男氏は、後期を4期に分けたが（佐藤1983）、その第Ⅱ期と第Ⅳ期に様式が設定できると考えている。本書の細分による第1期と第2期はこれとどう関係するのだろうか。佐藤氏の示したⅠ期と推定される土器群は、本書の第1期にはほとんど含まれていない。強いて求めれば受口壺A1である。そしてⅢ期の土器群とした中に、広口壺D3、球形化した頭部の長頸壺、高环C1、鉢B、壺Cなどが含まれているところを見ると、それは本書の第2期とはほぼ同内容といえようである。したがって佐藤氏のⅡ期とⅢ期が、第1期と第2期に相当するから、第3期と佐藤氏のⅣ期がおむね一致することになる。つまり佐藤氏もいうように、当地域の後期弥生土器は、やはり大きく前後2段階に分かれることになるのである。画期はすでにみてきたように、第2期と第3期、佐藤氏の場合ではⅢ期とⅣ期の間に求めるべきである。

伊場式土器は、現在のところ伊場遺跡を中心とする三方原台地南側の沖積地から天竜川平野部の下流域にかけての地域と、浜名湖の東南岸一帯に分布していることが確認されているが、浜名湖北岸から都田川流域、天竜川平野部の北端部あたりでは、明確でない。その分布域を確定することは今後の課題である。

2. 伊場遺跡の消長

伊場遺跡の弥生時代遺跡は、環濠、方形周溝墓群、土壙群、小穴群などからなるが、環濠以外に遺構年代を明示する資料が出土した例はほとんどなかった。しかし、環濠とその周辺のC層（青灰色粘土層）から出土した若干の第3期土器群の他は、いわゆる伊場式土器であった。つまり、伊場遺跡は、後期前半で大方発達した遺跡であった。

これに対して、伊場遺跡のすぐ北側、国鉄浜松工場の地下にねむっている国鉄浜松工場内遺跡は、伊場遺跡第1期の土器も出土するが、おむね、第2期から第3期にかけての遺構や遺物が検出される（浜松市博編1978・1979・1983A・1983B）。この遺跡は東西約800m、南北約100mほどの大遺跡で、西端部からは瓜郷式土器が出ているから、その頃成立した遺跡とみられる。狭い地域内での所見ではあるが、第3期でほとんど発達したかに見える伊場遺跡の近くに、第3期に盛開を迎えた大遺跡が存在する点に注目しよう。

向坂は、かつて天竜川平野下流域への進出・開発が、弥生後期後半から始まると説いた（向坂1968）。しかしその後の調査でこの見解は若干訂正されつつある。まず、浜松市恩地町海東遺跡と市野町田見合遺跡では、中期の土器片が出土しており、開発の始期はさかのぼることになった。また、集落が拡大したり数が増えたりするのは、後期後半ではなく、伊場遺跡の第3期、つまり国鉄浜松工場内遺跡が急に大規模になった時期からであることがわかつてきた。そのような天竜川平野への進出が、何を契機に起ったのか、今ただちに解きあかすことは困難であるが、すでに述べたように、この時期が、土器型式の上でも大きな画期に当ることは注目すべきことである。

その時期は、また銅鐸がこの地域にもたらされた時に当るらしい。先の国鉄浜松工場内遺跡では、土壙内から近畿式銅鐸のひれ飾耳片が検出され、この時期に銅鐸が使われたことは確実である。天竜川平野部ではこれまで銅鐸が2口づつ2か所から出土しており、不明確な破片を加えれば5口となる。銅鐸の社会的、歴史的な意義づけについては、定見を持ち合せていないが、春成秀爾氏の所説（春成1982）には魅力を感じる。

向坂の「進出」について、佐野一夫氏は浜松市天王町中野遺跡の報告（浜松市博編1981）の中で、平和的な進出ではなく、戦闘などともなう集団間の交流を想定しようとしている。この視点は、銅鐸の問題を遠江で考える場合にも必要な視点として注目される。伊場遺跡の消長が、こうした当時期の社会的な状況を反映したものである。

あったと、短絡的に結論づけようというのではなく、そうした視点を忘れないようにという自戒をこめたしだいである。(向坂綱二)

参考文献

- 小林行雄編 1939 :「弥生式土器集成図録」
- 小林行雄・杉原仕介編 :「弥生式土器集成」本編 2
- 伊藤源作 1912 :「浜松付近の上代鏡」「静岡県郷土研究」第18輯
- 国学院大学伊場遺跡調査隊編 1953 :「伊場遺跡」
- 久永春男 1955 :「各地域の弥生式土器」東海」「日本考古学講座」4
- 坪井清治 1958 :「弥生式土器と土師器」「世界陶磁全集」第1巻、日本古代編
- 向坂綱二 1959 :「遠江における古式土師器」「考古学手帖」8
- 佐原 真 1959 :「弥生式土器制作技術に関する二・三の考察」「私たちの考古学」20
- 久永春男 1963 :「弥生式土器」「瓜野」
- 鈴木公雄 1963 :「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期繩文土器に就いて」「史学」36-1
- 小林行雄・佐原 真 1964 :「紫霞出」
- 向坂綱二 1968 :「原始編」「浜松市史」一
- 大曾高一 1968 :「弥生式土器から土師器へ」「名古屋大学文学部研究論集」XL.VII
- 久永春男 1969 :「弥生文化各説 東海地方」「新版考古学講座」4
- 向坂綱二 1970 :「原始時代鷹の生活圏」「郷土史研究と考古学」p.284
- 浜松市教育委員会編 1971 :「伊場遺跡第3次発掘調査概報」
- 浜松市立郷土博物館編 1975 :「伊場遺跡出土品の解説目録」
- 向坂綱二・鶴 竹秋 1976 :「浜名郡新村町沖湖底遺跡調査予報」「考古学ジャーナル」No.128
- 浜松市立郷土博物館編 1977 :「伊場遺跡遺跡編」浜松市教育委員会
- 加藤芳朗 1977 :「付載第1伊場遺跡をめぐる自然環境の地学的後討」「伊場遺跡追構編」浜松市教育委員会
- 豊田市教育委員会 1977 :「高橋遺跡第7次発掘調査報告書」
- 久永春男 1978 :「弥生文化の発展と地域性 東海」「日本の考古学」III
- 浜松市立郷土博物館編 1978 :「国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報」浜松市遺跡調査会
- 豊田市教育委員会 1979 :「高橋遺跡第9次発掘調査概報」
- 浜松市立郷土博物館編 1979 :「国鉄東海道線跡敷地内縄文文化時発掘調査概報」伊場遺跡第12次の1期発掘調査概報一 浜松市教育委員会
- 浜松市博物館編 1979 :「国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報IV」浜松市遺跡調査会
- 久野邦雄・寺沢 薫 1980 :「六条山遺跡」
- 向坂綱二編 1980 :「浜名郡新吉町・生田遺跡調査概報」浜名郡新吉町教育委員会
- 紅村 弘 1981 :「総論」「東海先史文化の諸段階」本文編・補足改訂版
- 浜松市博物館編 1981 :「浜松市大王中野遺跡発掘調査報告書」浜松市遺跡調査会
- 浜松市博物館編 1981 :「城山遺跡調査報告書」浜名郡可美村教育委員会
- 浜松市博物館編 1981 :「伊場遺跡第8~13次発掘調査概報」浜松市遺跡調査会
- 佐藤由紀夫 1981 :「浜松市三和町遺跡出土の縄刺土器について」「考古学雑誌」67-1
- 春成秀爾 1982 :「縄縛の時代」「国立歴史民俗博物館研究報告」第1集
- 愛知県教育委員会編 1982 :「朝日遺跡」
- 浜松市教育委員会編 1982 :「橋野遺跡」浜松市遺跡調査会
- 浜松市博物館編 1983 A :「国鉄浜松工場内(桜子)遺跡第VI次発掘調査概報」浜松市遺跡調査会
- 浜松市博物館編 1983 B :「国鉄浜松工場内遺跡第VII次発掘調査概報」浜松市遺跡調査会
- 佐藤由紀夫 1983 :「西遠地区的弥生後期の土器」「弥生後期の集団関係」静岡県考古学会シンポジウム5
- 鈴木則 1983 :「二之宮式土器について」「森町考古」18

伊場遺跡発掘調査報告書 第5冊

伊場遺跡遺物編 3

1982年12月25日 発行

編集 浜松市博物館

発行 浜松市教育委員会

浜松市鏡塚四丁目22番1号

印刷 株式会社開明堂

